1
金色の文字使い
リードマスター
勇者四人に巻き込まれたユニークチート
十本スイ
Sui Tomoto
illu すまき俊悟
Syungo Sumaki
ファンタジア文庫

「争いの鎖を断たねば、平和はやっては来ません！」
▶ヒイロ・オカムラ
《称号》巻き込まれた者・異世界人・文字使い…
魔界での半年の旅を経て成長した異世界人。ハーオスにて魔王と邂逅し、ある契約を交わす。
「おい魔王、獣人まで相手にするとは……って、何だこの面子は？」
「貴公は……大切な者を失ったことがあるかな？」
▶イヴェアム・グラン・アーリー・イブニング
《種族》魔人族
《称号》魔王(ハーオス国王)
魔国ハーオスを統べる魔王。争いを止めるため、人間国との同盟会談へと臨む。
▶ルドルフ・ヴァン・ストラウス・アルクレイアム
かつて勇者や日色の召喚を行った、人間国の国王。魔王からの親書に応じるが……。
金色の文字使い
勇者四人に巻き込まれたユニークチート
1

Golden
Wordmaster

金色の文字使い（こんじき　ワードマスター）7

—勇者四人に巻き込まれたユニークチート—

十本スイ

富士見ファンタジア文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載したりすることを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品の内容は、底本発行時の取材・執筆内容に基づきます。

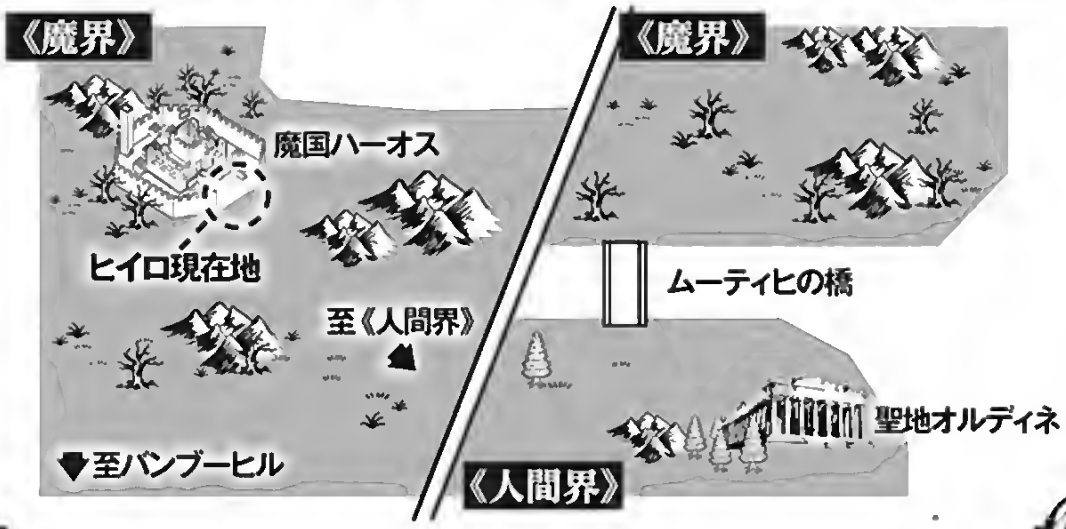
本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

CONTENTS

プロローグ
第一章・それぞれの邂逅
第二章・人魔同盟締結会談
第三章・裏切り
第四章・ヒイロ、参戦！
第五章・英雄の片鱗
エピローグ

あとがき

異世界【イデア】エリアマップ



▶▶▶ ヒイロ パーティ ◀◀◀

丘村日色（おかむら ひいろ） Lv.204 HP:7880 MP:15500

《魔法》文字魔法（一文字解放・空中文字解放・二文字解放…）
《称号》巻き込まれた者・異世界人・文字使い・グルメ野郎…
▶異世界に召喚された高校生。綴った文字のイメージを具現化する《文字魔法》を使い、イデアの旅を続ける。

リリィン Lv.154

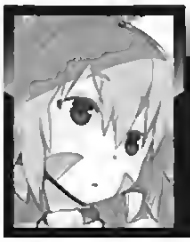
《魔法》幻夢魔法
《称号》幻と共に生きる者…
▶魔界の辺境で暮らしていた魔女。尊大な実力者。

シウバ Lv.82

《魔法》プールボール（闇）…
《称号》闇の精霊…
▶リリィンに仕える執事にして、異端の精霊。

シャモエ Lv.25

《魔法》——
《称号》家族思い・禁忌…
▶リリィンに仕える天然ドジっ娘メイド。



ニッキ Lv.35

《戦技》爆拳
《称号》？？？・捨て子…
▶モンスターに育てられた少女。

▶▶▶ 人魔同盟会談サイド ◀◀◀

イヴェアム・グラン・アーリー・イブニング Lv.102 HP:4750 MP:6500

《魔法属性》火・水・風・土・氷・雷・闇
《魔法》アヴィス・ブレイド（闇）、コスモエンド（闇）…
《称号》魔王・エレメンタルレディ・極めた者…
▶魔国ハーオスを統べる心優しき魔王。種族間の戦争を止めるため、人間族との同盟会談に臨む。

プロローグ

日は沈み、空には金色に輝く月が浮かぶ頃。

昼間の忙しさから解放され、自室にて自分の時間を有意義に過ごしていた【魔国・ハーオス】の王――イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングは、慌ただしく叫びながら駆け込んできた人物に目を見張った。

「大変です陛下っ！」

「そんなに慌ててどうしたというのだ、キリア？」

自身の側近。幼い頃からとても頼りになり、普段はそうそう感情の起伏を見せない親友が、ただならぬ表情だったので思わず眉をひそめて聞き返した。

キリアは息を整えると、イヴェアムに対して一度丁寧に頭を下げてから口を開く。

「無作法にも礼を弁えず陛下の私室に入ってしまい申し訳ありませんでした。しかし陛下のお耳に一刻も早くお入れしなければならないと思い」

「……何があった？」

これは予想以上に深刻な話のようだ。

「はい。先程テッケイル様から情報が届きました。実は――」

部屋にはイヴェアムとキリアの二人だけだが、キリアは一応周りを気遣ってか、小さな声で耳打ちするように、彼女が今持っている情報をイヴェアムに伝える。

その報せに、段々とイヴェアムの顔が険しくなっていく。

「――何だとっ!?　いや、そうか……やはり動くのか『人間族』は……っ」

イヴェアムはこの事実に不安を感じ、思わず下唇を噛んだ。

「先日テッケイル様からは、勇者たちが城から抜け出すように動いたという報せがありましたが……」

キリアの言う通り。少し前にもテッケイル――《魔王直属護衛隊》の《序列三位》という肩書きを持つ彼から一報が届いた。彼には【人間国・ヴィクトリアス】にて、諜報活動を命じているのである。

かねてからイヴェアムは、【ヴィクトリアス】に和睦の親書を送っていた。何度も無視され続けてきたが、こちら

の誠意が伝わったのか、国王同士の会談を行うまでに話を進めることができたのだ。

そしてもうすぐ、『人間族』と『魔人族』の間で、和睦の第一歩となる会談が行われる予定である。【ヴィクトリアス】でも、その準備で慌ただしく動いているという情報を得ていた。民にも噂が広まり、専らその話題で沸騰しているようだ。

ただそれを機に、何者かが悪巧みを企てて会談を妨害するかもしれない。そうでなくとも、会談に影響が出るようなことをするかもしれない。そんな怪しい動きがあるかどうかを見極めるのが、イヴェアムがテツケイルに与えた仕事だった。

そんな彼から先日、勇者が国外に出たという情報が届いたのだ。会談が迫る中での動きにより、テツケイルはその動向を探るために後をつけていたようだが……。

「まさか勇者たちの目的地が……」

「ああ、国境……だとはな。ルドルフ王は一体何をするつもりなのか……」

「しかし陛下、彼らの用心深さにも一応の理由はあるでしょう」

「……そうだな、そうだった。前回のこともあるのだ。こちらを警戒するのも当然だ。だがここで勇者たちを動かしてきたか。狙いは恐らく……」

キリアが「はい」と呟いたあと、ゴクリと喉を鳴らす。

「国境を崩すこと、だな」

「つまり、橋を壊す……ですね？」

「ああ、『獣人族』との国境である橋を私が破壊した今、もうそこだけが唯一の平和への架け橋だ」

三つの大陸――人間界、獣人界、魔界。それぞれは隣接しているものの、間に海を隔てており、巨大な橋で大陸同士を繋いでいる。

以前イヴェアムは、『獣人族』と戦争になりかけた時、獣人界に繋がっている橋を破壊し通行手段を絶って、獣人たちが攻めてこられないようにしたことにより、戦闘を即時終結させたのだ。

「あの時は争いを止めるために仕方なく橋を落としたが、もし会談でこちらが『人間族』の機嫌を損ねるようなことをすれば、今度は我々を大陸に閉じ込めるために即座に橋を落とすという意思の表れだろう」

「『人間族』の切り札。『魔人族』にとって最悪の天敵である光魔法を扱うことのできる勇者四人をそこに配置した

とすれば、そのお考えで間違いないでしょう」

実際に『人間族』がそうしてくるだろうことは予想していた。

会談が行われる場所は人間界。つまり何かあれば圧倒的にイヴェアムたちが不利なのだ。

もし『魔人族』との会談が上手くいかなかった場合、即座に橋を壊して二度と同盟などできなくする。そして全戦力を以て会談に赴いた『魔人族』を殲滅。『人間族』がそう考えていると危惧はしていた。

「ですが会談に赴くのは少数精鋭といえど、こちらは陛下を筆頭に、《魔王直属護衛隊》の《序列一位》と《序列二位》が供につきます。それに私もお傍に控えます。向こうが全面戦争を仕掛けようとも、むざむざ殺されるほど弱くはありません。少なくとも、逃げ帰るだけの時間くらいは作れるはずです」

会談に連れて行ける人数にも制限を受けている。しかしそれでも、『魔人族』最高戦力の護衛が傍にいるのだ。そこで戦って負けるとは思えないし、確かに逃げ帰るだけの時間は稼げるだろう。ただそれは、できれば使いたくない最終手段である。

「いくら【ヴィクトリアス】が用意した精鋭だとしても、会談にかの勇者が来ないのであれば問題はないかと」

キリアの言うことも正しい。【ヴィクトリアス】が誇る軍隊相手でも、勇者たちなしで『魔人族』のトップたちを相手にするのは些か力不足に思えた。

「……では勇者を橋に行かせても安心できるほどの策がある、ということか？」

「どうでしょうか。いえ、確か会談場所は……」

「ああ、《オルディネ大神殿》だ。【聖地オルディネ】――そこの大神殿の中にある《聖域の間》と呼ばれる場所で会談が行われる予定だ」

「確かそこはかつて、『人間族』を災いから救い、救世主となった勇者が没したと言われる場所ですね。その勇者を称えて《聖地》を拓いたと」

「そうだ。そこは勇者の威光が尚続いているのか、封魔の力が《聖地》を覆っている。とりわけ《聖域の間》は、微々たる魔力も放出できないほどの封魔力が強い場所らしい」

「そこを会談に選んだのは、万が一の時、我々が魔法を使用できないようにするため」

「だろうな。それに武器などの争いを呼ぶような物を持ち込むこともできないという。つまり誰もが丸腰の状態でしか中に入れないということだ」

「そこでなら、我々を屠れると……そう考えているのでしょうか？」

キリアが少し不安気に聞いてきた。武器は携帯できないが、徒手空拳で戦うことはできるのだ。戦い方によれば、相手の命を奪うことも可能である。

「そう……かもしれん。もしこちらに敵対意思があり、それを『人間族』が察知した瞬間、死なばもろとも……という考えなのかもしれんな」

しばらく沈黙が続き、先に口を開いたのはキリアだった。

「……やはり会談は中止になさった方がよろしいのでは？」

どう考えても『魔人族』側が不利な条件ばかりである。身体能力が『人間族』より優れているといっても、魔法が使えない状態では、あとは数がものを言う。少数であるこちらに対して、向こうは本拠地にも等しい場所である。完全にアウェイ。多人数で相討ち覚悟で攻められたら、さすがにイヴェアムを守り切れるか不安なのだろう。

だがそんな主を思って放ったキリアの言葉に対して、イヴェアムは首を振り否定する。

「いいや、最初からスムーズにいくとは思っていない。何しろ遥か昔から続いてきた呪いのような鎖を断ち切ろうとしているのだ。成就させるのは難しいということは分かっている」

「陛下……」

「それでも決めたのだ。平和を勝ち取るためには同盟締結を成立させる必要があると。『人間族』だって無闇に争う意思はないはずだ。誰も殺し合いなど望みはしないだろう。だが相手をそう簡単に信じられるほど因縁は浅くはない。どちらも怖いのだ。だからいろいろな事に手を打ち、万全を期するのは当然だ」

それだけ抱えている闇は大きいものだ。だからこそ会談の失敗も視野に当然入れているのだろう。失敗した時、少しでも自分たちが優位に立てるように計らうのは当然である。

「少しでも信じてもらうために、こちらは波風立てないように動けばよいのだ。同盟の意思があると、それだけを伝えるだけ。そうすれば彼らもきっと……分かってくれる。上手くいく、上手くいくようにするのだ！」

そんな決意を込めた言葉を悠然と言い放つイヴェアムを見て、キリアが微笑する。

「さすがは我が王です。ならば私も、この心と身体、全てを懸けて平和に捧げると誓いましょう」

そう言いつつ膝をついて臣下の礼をとる。

「ああ、頼んだぞキリア。私が一番信頼を置くお前が傍にいてくれるだけで私は前を向いていける。ともに平和を

掴もう！」

「御意に」

そのままキリアは、残された仕事を片付けなければならないということで部屋から出て行った。

一人残ったイヴェアムは、窓へと近づいて空に浮かぶ金色の月を見上げる。

キリアには力強い言葉を発したものの、やはり不安は大きい。この会談が成功するか否かは自分にかかっているのだ。

また本当に人間たちが大人しく会談に応じてくれるのかも、正直なところ怖い部分ではある。

（ううん。気弱になっちゃダメ。私は魔王なんだもの。だけど……）

まだ生まれて二十年も生きていない人生経験の浅いイヴェアムにとっては、とても重い事案である。だからこそその双肩にのしかかる重圧は凄まじい。

（みんなのために。世界のためにも、やるしかないのよ）

ただただ今は、自分にそう言い聞かせて前へ進むことしかできなかった。

自分が歩む道を信じて――。

※

『人間族』と『魔人族』の会談が十日後に迫ったある日、勇者四人の後を追っていたナザー・スクライドは、目の前の光景を見て険しい表情を浮かべていた。

（勇者たちが国外へ出て数日。彼らの向かう先が国境だってことは、会話を盗み聞いていて分かったッスけど……）

馬車で移動していた勇者たちを尾行し始めてすぐ、ナザーが耳を欹てているとも知らないで、目的地が国境であることを勇者たちが会話の中で口にした。当然その情報を、自身が仕える人物へと情報を送ったのだ。今頃は届いている頃だろう。

今ナザーがいるのは、『人間族』と『魔人族』の大陸を繋ぐ唯一の橋――【ムーティヒの橋】。距離にして十キロメートルほどの長さもある橋の上には、『人間族』の侵攻を防ぐために、魔王イヴェアムが腕利きの魔人を配置している。

その魔人の名はイーラオーラと言い、元《魔王直属護衛隊》の一員でもあった人物。なのでその無類の強さは人間も知っているはず。無論他にも優秀な魔人たちが多く配置されていて、だからこそ今まで汪闊に近付けずにいたといっても過言ではない。

今も橋の中央付近で人間界を睨みつけるような形で陣取っているイーラオーラの威圧感は、並みの者ならばすぐに目を逸らしてしまうほどの迫力がある。

だが驚いたことに、勇者たちは四人で横並びになり、ある程度の警戒した表情を浮かべながらも、彼らだけでその橋を渡り出してイーラオーラに近づいていっているのだ。

（……どういうことッスか？）

魔人側の許可もなく国境を渡ろうとすれば、それは確実に争いの元になってしまう。

会談が迫っている中、どうしてそのような暴挙ともいえる行動に出ているのか、ナザーは全く理解できず唖然としてしまっていた。

ナザーは紙に描いた鳥を顕現させて、勇者たちの近くへ飛ばし様子を窺っている。鳥が見聞きしたものは、ある程度の距離ならナザーにも伝わるので、伝達役としても使用しているのだ。無論勇者たちは気づいていない。

イーラオーラの目の前まで来た勇者たちは、互いに橋の中央で顔を突き合わせて足をとめたまま。そして四人の勇者の一人――少年の言葉に、ナザーは度肝を抜かれてしまう。

「アンタがイーラオーラか？」

「ああそうだ」

「そうか、ならアンタが協力者だな」

い、今何と言ったッスか？　と頭の中で何度も反芻するナザー。

（きょ……協力者……？　え……あれ……ちょっと待ってッスよ……協力者って……何のッスか？）

彼らの言葉の意味が分からず戸惑っていると、今度はイーラオーラの方が衝撃を放つ言葉を述べる。

「他の奴らはもう中に通してある。おい、例の場所まで案内してやれ」

そう背後に控える部下の一人に言うと、部下は勇者たちを促して進み出す。

勇者たちも彼の言葉を聞くと、そのままイーラオーラの脇を通り過ぎ、国境を渡っていく。つまり『魔人族』の大陸――魔界へと足を踏み入れようとしているのだ。

（他の奴ら……？　奴らって誰なんスか？　それに例の場所？）

自分でも知らないうちに全身から汗が噴き出ていた。喉が渇き、思わず小さく唸り声を上げると、頭を抱え込む。

「ど、どういうことッスか？　何でイーラオーラが勇者たちを通すんスか？　陛下が許可を？　いやそんなことは聞いてないッス。それに奴らっていうのは……？」

だがそこでハッとなり紙に絵を描いていく。今ここで頭を悩ませている場合ではない。

「と、とにかく異常事態が発生してるみたいッスね！　一刻も早くこの情報を伝えないと、『魔人族』が……国がヤバイような気がするッス！」

すると突然背後から首を摑まれた。一瞬にして全身に寒気が走る。

「――っ!?」

……まるで気がつかなかった。

確かに今の状況に動揺し普段の冷静さを欠いていたかもしれないが、それでもそんじょそこらの輩に後れを取るような修練は積んでいないと自負している。

特に気配を消す隠密行動に特化している自身の能力は、相手に気づかれず敵を捕らえることはあっても、こうして捕われることなど皆無だった。

それなのに自分に気取られないで近づき、あまつさえ首を摑んで動きを奪われるとは、まるで悪夢でも見ているかのような錯覚さえ感じる。

「……だ……誰……ッスか？」

何とか声を絞り出し背後を確認しようとすると、くぐもった低い声が聞こえてくる。

「お前の役目はもう終わった。寝ていろ――テッケイル」

その言葉にハッと息を呑みながら、

「は……はは……じ、自分のこと、知ってるみたいッスね」

強がりを含んだ笑みを浮かべながら、気づかれないようにと祈りを込めて静かに手を動かし――グサッ！

突如ナザーが持つ紙から剣が飛び出して、ナザーの顔の脇を通過して後ろにいる人物の頭を貫いた。相手は首を摑む力を弱め、そのまま膝を折る。

その隙に拘束から抜け出して、相手を確認することに。

「ふぅ、油断大敵って奴ッス。悪く思わないでほしいッス。まだこんなとこで死ぬわけにはいかないんスよ」

相手は黒いローブを着ていてフードで顔を隠していたので、確認するにはフードを外さなければならない。剣は見事に相手の頭を貫いていた。ピクリとも動かない人物に近づきフードを取ろうとしたところ――素早く腕を掴まれてしまった。

「なっ!?」

完全に死んだものと思っていたのに。

咄嗟に腕を振って拘束から抜け出し、その場から距離を取る。そのまま一定の距離を保ちつつ相手を観察……。

まるで幽霊のようにユラリユラリと立ちながら、相手は頭に刺さっている剣をおもむろに抜く。

(!? ……血が出てない……?)

普通は血が噴き出すはずだが、そこからは何も確認できなかった。痛みすらも感じていないかのように、一声も発することなく剣を地面に投げ捨てる黒ローブ。

(手応えはあったッス……それに頭を貫かれて平気な生物なんているんスか……?)

相手の不気味さに背筋が冷たくなっていくのを感じる。

「さすがは《魔王直属護衛隊》の《序列三位》――テッケイル・シザーだな。この私を一回殺すとは驚きだ」

「……どうやら普通じゃなさそうッスね」

完全に相手は自分を知って狙っている。ナザー・スクライドとは仮の姿。その正体は、魔王の手足となって動く《魔王直属護衛隊》の一人――テッケイル・シザーなのだ。

その主な任務は諜報役。各大陸に渡って、あらゆる情報を入手し、【魔国・ハーオス】に危機が及びそうな情報を、魔王へと伝えること。

ナザー改めテッケイルのボサボサ髪や眼鏡、皮膚や服などが、まるで溶けるように地面へと落ちて行く。その中から、テッケイルとしての真実が現れる。

「フッ、ようやく真の姿を見せたか」

褐色の肌に尖った耳、細身だが引き締まっており逞しい身体つきをしている。パーマをかけたかのような緑の髪はとても印象的だろう。

「魔法で幾つもの顔を作り出せるというのはやはり便利なものだな」

ピクリと肩を動かすテッケイル。

(どうやら自分のことはある程度バレてるみたいッスね。とにかく、この人が誰か確認しないと……)

チラチラとフードの中身を覗こうとしてみる。

相手にもその意思が伝わったのか、

「どうやらこの中身が気になる様子。私を一回殺したことに敬意を表して、見せてやろう」

そう言ってフードをゆっくりと上げていく。

テッケイルは険しい表情で見つめていたが、相手の顔が徐々に明らかになっていくにつれて、テッケイルの表情も愕然としたものへと変化する。

「――っ!? な……なっ……バカな……っ、な、何で……どうしてこんなとこにいるんスか――あなたがっ!?」

すると驚きで硬直しているテッケイルをよそに、相手はその場から瞬時に消える。

「え――?」

気付いたら相手はテッケイルの背後にいた。

――トン。

後ろ首に衝撃がきたと思ったら、同時に目の前がグラリと揺らいだ。段々と白くなっていく光景。最後に思い浮かんだのは、イヴェアムや仲間たちの顔。

(このままじゃ……みんなが……っ)

だが抵抗虚しく意識が遠のいていく。

そしてそのままストン――と、闇に落ちていった。

第一章・それぞれの邂逅

――会談十日前。晴れた空の下、少し生温かい風が吹く昼時のこと。

「ようやく着いたはいいが……呆れるほどデカい国だな、ここは」

眼前に広がる広大な街並みを見つめながら、丘村日色は溜め息混じりで呟いた。紆余曲折あったものの、目的地だった【魔国・ハーオス】へと到着したのである。

それまでは魔界を約半年かけて回り、大いに満喫していたのだ。

様々な『魔人族』の集落、山や海、危険区域に指定されているモンスターの巣窟――まだ隅々まで回ったわけではないが、そこそこ満足のいく観光ができた。

今思えば休みなしにひたすら動き回っていたように思える。旅仲間の勝手で振り回されていたり、弟子の育成など日色は激務の毎日を送っていた。

しかし退屈だけはしなかった。美味い食べ物、珍しい書物など、そのお蔭でたくさん出会うことができたと思う。それに多くのモンスターと戦い経験値を得ることもできて、自身のレベルも、この【イデア】に召喚された時とは比べものにならないほど成長した。

だから仲間に振り回されて影響しく思っていても、それで自身に得るものが多くあったので、完全に否定はせず付き合うことにしていたのだ。

そして魔界唯一の国に辿り着いたその時は、いろいろな未知と出会って存分に楽しんでやろうと心に決めていた。

しかし到着するやいなや、

『ワタシは少し私用があるのでな。宿をとって、しばらくはこのバカみたいに大きい国で時間を潰しているがいい』

と、旅仲間の一人である赤ロリこと――リリィン・リ・レイシス・レソドーズが偉そうに発言したあと、他の旅仲間を連れてさっさとその場から離れていってしまった。

傍に残ったのは、ニッキという日色の弟子一人。そんな彼女とともに宿を探すために歩き出したのだが――

三十分後。

「……迷った」

一度として同じ場所にも出くわさないし、人気もあまりなく迷路のように入り組んだ路地を歩いているようで、どこを歩いているのかサッパリ分からなくなってしまった。

何故なら国の広さが尋常ではなかったからだ。【人間国・ヴィクトリアス】も大きい街だったが、ここは比べようもなく別格だった。

【ヴィクトリアス】が複数の街を集結させたような国なら、ここ【ハーオス】は複数の国を一堂に集めたような規模の国。恐らく隅々まで歩こうと思ったら一日では到底制覇することなどできない。

中央にある巨大な城を守るように広がっている街には、一体どれだけ多くの者が住んでいるというのだろうか……。

何の店か分からない建物も数多く建ち並び、恐らく食べ物屋であろう店からは良いニオイが漂ってくる。公園のような大きな広場や池なども幾つかあり、レンガでできた建物や木造の建物、高い時計塔のようなものも視界に飛び込んでくる。人それぞれの趣向が集まって一つの街を形成していた。

これはじっくり時間をかけて楽しむ必要があると日色は考えている。

しかしまずは、しばらく住む場所――宿を確保しなければならない。

「……ふぅ、しかし単純に歩き回ってもこれ以上見つかりそうもない。こうなったら誰か捕まえて――」

「むむむ！　師匠師匠！　アレはなんですかな！」

歩きながら人を探していると、周りでチョロチョロ動き回りつつ目を輝かしていたニッキが服を引っ張ってくる。

彼女が指を差しているのは、広場の中央にある銅像。

当然日色が知らない人物のものである。

「さあな。あんな訳の分からん女の銅像なんかよりも、さっさと宿を探せ」

「むむむ！　おお！　このニオイは何ですかな！」

「聞けよ人の話……ん？　確かにこのニオイは……」

香ばしいニオイにつられて腹が鳴る。

（せっかく【ハーオス】に着いたんだし、まずはどこかで腹ごしらえをするのもいいな）

ということで、ニオイを辿って飯屋を探すことに。すると運の良いことに、飯屋らしき店はすぐに見つかった。

細めの路地にひっそりと佇むようにして存在する店前に日色は立つ。

扉を開けるとカランコロンと、喫茶店の扉を開けたような音が響く。そのまま扉を開けたまま軽く店内を観察する。

薄暗くてあまり人気がない。人ごみが嫌いな日色なので、ちょうど良い店だと都合良く思っていると、

「師匠？　この店で食事でもするのですかな？」

「ああ、お前も何か食べるか？」

「いいえ！　ボクは先程頂いたので！」

「……頂いた？」

するとビシッとニッキが、日色の腰に携帯しているバッグを指差す。

「そちらに入っていた燻製肉、とーっても美味しかったですぞ！」

えっへんと胸を張る姿にイラッときたので、

「にょわ!?　な、何でぶつんですかな!?」

「うるさい、このバカ弟子が」

軽く頭を小突いてやった。

たまにこういうバカなことをするのでバカ弟子と呼んでいる。これから説教だなと思っていると、

「そ、そういえば師匠！　ボクは師匠のために宿を探してきますですぞ！」

「あ、おい待て……逃げやがったな」

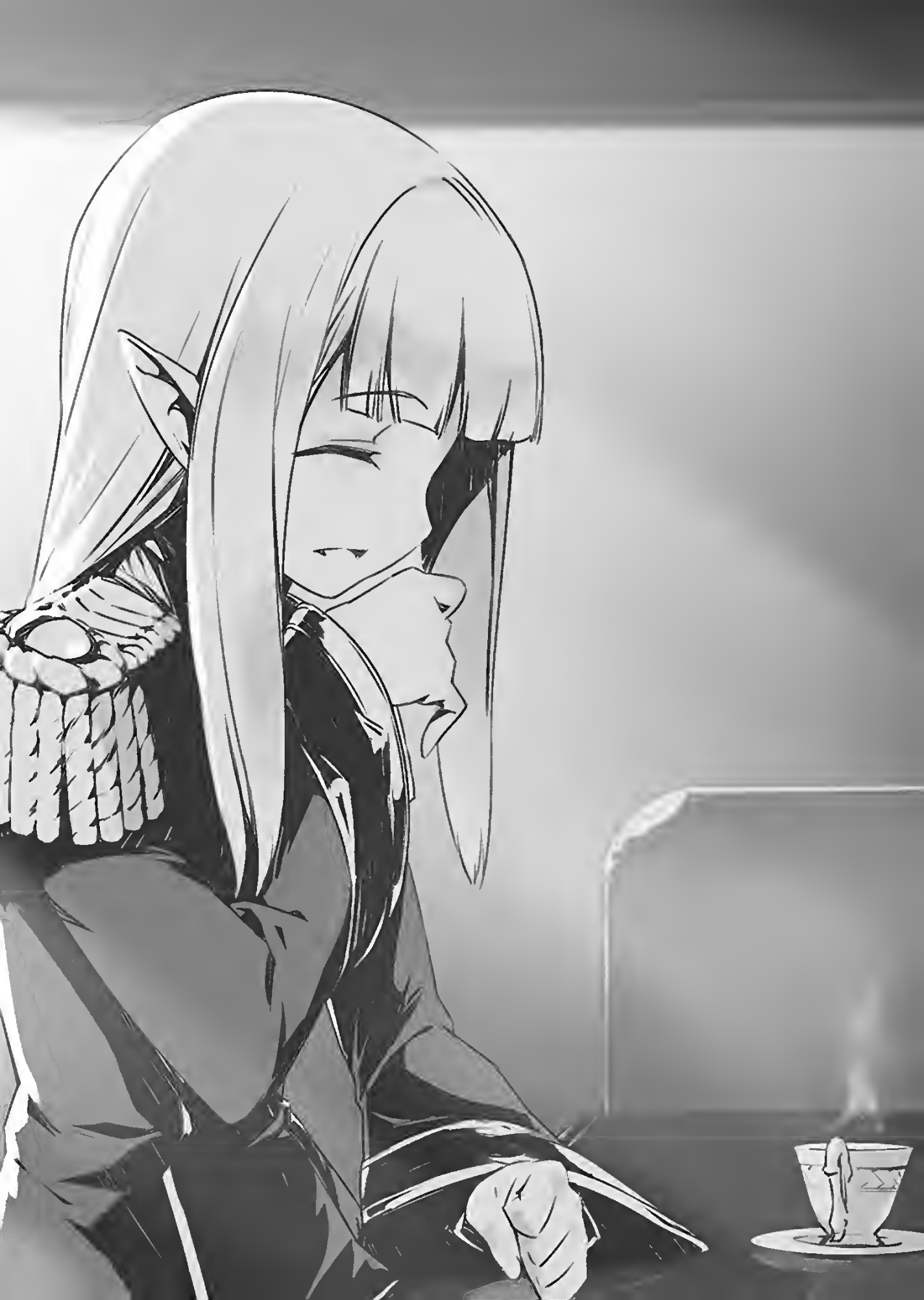
凄まじいスピードで駆け出して行った。怒られる前に良いことをして許してもらおうという魂胆なのが見え見えだ。

（アイツ、帰って来たら確実に説教をしてやる）

そのまま日色は店内に入り、どこに座るか見回す。壁や床などは黒と白を基調としたシックな色合いで、飯屋というより喫茶店という雰囲気である。

店はそれほど大きくなく六つほどあるテーブル席には誰もおらず、カウンター席には一人の少女が物憂げな表情で座っていたが、他は空いていた。

日色も一人なのでカウンター席でいいだろうと判断し座ることにする。
「何にします？」
中年男性の店主が聞いてきた。
「腹が減ってる。何か美味いものを食わせてくれ」
無愛想にそう言うと、少女もこちらに気づいた様子でチラリと見てくる。無論日色は気にした様子もなく、食事が出来上がるまで目を閉じていた。
しばらくすると、目の前に一口大の肉塊を散りばめた《チャーハン》のような炒めた飯が出てくる。香ばしいニオイでも分かったが、なかなかに美味そうだ。
ニオイに裏切られることなく、料理は絶品であり、ペロリと平らげた後、
「おかわりをくれ」
それを三回繰り返したところで――。
「――ふふふ」



近くに座っている少女から笑い声が聞こえた。
日色は何か面白いことでもあったのかと思いながら横目で見る。
彼女と目が合い、相手が若干目を泳がせた。
「あ、いやすまない。見事な食べっぷりに思わず」
戸惑った様子で言葉を発する彼女だが、日色はまたも一瞥しただけで無視する。
その様子を見た店主が慌てた様子で、
「お、おいアンタ！　この方は――」
「よいのだ」
「で、ですが！」
「よいと言っている。それにここには客として来ているのだ。常連なのだから知っているだろう？　今は身分など関係ない。それにいきなり声をかけた私が悪いしな」
「……はぁ、そう仰るなら」
店主は渋々といった態度で押し黙った。
（……身分？）
二人のやり取りを聞いていて、どうやら少女の方はそれなりに身分が高いことが理解できる。しかしもし貴族という立場があって御令嬢か何かだとしたら、よくこんな薄暗い店に一人で入って来られるものだと少し呆れた。
金持ちが狙われるのは、異世界でもそう変わらないだろう、と思っている。
しかも常連ということは、何回もやって来ているということだ。誘拐事件が発生しそうだが、この国は相当治安が良いということなのだろうか……。
見たところ腰まで伸びている美しい金髪と紺碧の瞳を持っており、花のような甘い香りが漂ってきた。顔も整っていて、男性の目を惹き付ける美少女だと判断できる。
（……ん？　ただコイツ、どっかで見たことが……）
知り合いではないはず。しかし何故か見覚えのある顔だ。
（……まあいいか。思い出せないならそれで）
自分には関係ない人物だと判断して日色は食事に集中することにした。

すると誰か客がやって来たのか、扉が開いた音がし、店主がそちらに目をやる。
そこには確かに客らしいのだが、どうにもガラが悪そうな男たちが三人いた。三人とも目つきが悪く、ポケットに手を突っ込みながら店内を物色し始める。
「おっ！　何だよ何だよ、女がいるじゃんよぉ！」
その中の一人が、少女の姿を目視してニヤついた顔をして声を上げた。
「お、いいねぇ～」
「しかも超絶美少女！」
三人が三人とも鼻の下を伸ばし、いやらしい顔つきで少女に近寄っていく。
どうも厄介しい連中が来てしまったようだ。せっかく静かな場所で飯を食べていられると思ったのに、と日色は溜め息が零れ出た。
「あ、あのお客さん！」
「うるせえオヤジ！　黙ってろ！」
「そうそう、じゃないと殺しちゃうよぉ～」
「ぎゃはは！」
店主は押し黙ってしまう。下手をすれば暴れかねないとでも思ったのだろう。
男たちは少女の背後へと回ると、その中の一人が不作法にも馴れ馴れしく彼女の肩に手を置く。それを見て店主は青ざめている。
「なあなあ姉ちゃん。俺らとイイコトしない？」
「そうそう、なんなら奢っちゃうよぉ～」
「……ほう、それは太っ腹な精神だな」
二人の言葉に少女は焦りもなく静かに返した。
「ぎゃはは！　そんなサービス精神旺盛な俺らとどう？　遊ばな～い？」
「すまないがこの後、私用があるのでな」
「そんなのサボっちゃえよぉ～」
「そうそう、こっちの方が絶対良いよぉ！　すっごぉく気持ち良くなることも教えてやるからよぉ～」

「ぎゃははは！　足腰が立たなくなるほどな！　ぎゃははは！」
下卑た笑いが店内に響く。店主は相変わらずの表情で固まってしまっている。
「何度も言うが断る。それにお前たち、この国の者ではないな？」
「あ？　まあね～、俺らは昨日この国に来たんだよ。良い女を探しに来たってやつ？　ダハハハハ！」
「だと愚った。お前たちのような下品な輩は見たことがないからな」
少女の物言いにピクッと眉を動かして固まる三人。
「……は？　おい姉ちゃん、減多なことは言わねえ方がいいぜ？」
「そうそう、気持ち良いのが、痛いのに変わっちゃうよぉ～」
「ぎゃはは！　だから素直に俺らと遊ぼうぜ？」
しかし少女は面倒そうにバシッと肩にかけてある男の手を叩き落とす。
「っ、何しやがんだお前！」
少女がスソと立ち上がる。少し俯き加減のため長い髪に隠れて目元をハッキリと確認できない。すると顔を上げて、キッとその視線を三人にぶつける。明らかな怒りがその紺碧の瞳にはこもっていた。
「それでもお前たちは『魔人族』か！　『魔人族』なら誇りを持てっ！」
彼女の物言いに、一瞬ポカンと呆気に取られていた三人は、
「「ぎゃははははは！」」
突然腹を抱えてバカにしたように大笑いし始めた。
「このご時世に誇りなんてクソの価値もねえっての！」
「そうそう、な～に面白いこと言っちゃってんのぉ～」
「ぎゃはは！　腹痛ぇ！」
そんな三人を見て、彼女の拳が強く握り締められる。店主はもう気が気でないのかあわあわとした様子で戸惑っていた。しかしそこに――
「――――黙れ、クソトリオ」
今まで大人しく食事していた日色は、堪らず口を出した。
「ああ？　おいおい、もしかして今言ったのお前かぁ～？」

店内には他に日色しかいないのを分かっているのに、嫌味を含めた言い方だ。無論それを黙って受け流す日色ではない。
「他にいるか？　それともゴミトリオとでも改名してほしいか？」
「な、何だとっ！」
「今すぐ出て行け。ナンパなら外でしろ。下品なお前らがいるせいで、せっかく気分良く食事してるのに飯が不味くなるんだよ」
一瞬、時が止まったかのような沈黙が流れ……。
そしてすぐに日色の容赦のない物言いを理解したのか、三人の額に青筋が幾つも浮かび、煩が引き攣り出す。
「おいこら赤ローブ、死にてえのか？　ああ？」
「何をやっている！　その者は関係ないだろう！」
少女はそう言うが、他の二人が彼女の前に現れて邪魔をする。
どうやら彼らは大人しく出ていくつもりはないようだ。本当に呆れてしまう。
「姉ちゃんは後でた～っぷり可愛がってやんよ。その前にだ……」
男が睨みつけてくるが、日色は視線を店主の方へ向けた。
「おい店主、ここの飯代だが、このゴミトリオを追い出す代わりに無料というのはどうだ？」
「へ……あ、そ、その……構わないですが……」
「よし、契約成立だ」
してやったりと愚いほくそ笑む。
「表に出ろ。相手してやるよ、ゴミトリオ」
「上等だ赤ローブぅぅッ！　死んでも文句は言わせねえからなぁ！」
外に出たが、幸い人通りはなかった。
店のすぐ横にある路地に入り、そこでゴミトリオと対面する。
「まさか、三人がかりで卑怯とか言わねえよなぁ？」
三人がニヤニヤしてこちらを見ている。日色は欠伸をしながら頭をかく。
「ご託はいいから早く来い、ゴミトリオ」

「こ、このガキィ……っ、ぶっ殺してやらぁっ！　おい、てめえら！　手加減するんじゃねえぞぉ！」
「当然っ！」
怒りのボルテージがＭＡＸ状態で三人が一斉にかかって来た。
「あ、危ないっ!?」
少女も一緒に出てきたようだ。彼女が危ないと言ったのは、三人がナイフを所持していたからだ。
対して日色は軽く溜め息を吐くと、両手の人差し指に意識を集中させた。日色の身体から溢れ出た青白い魔力が、それぞれの指先へと集束し青白い光を灯す。
「っ!?　な、何!?　何なのだ、この物凄い魔力は!?」
少女の困惑の叫びを無視し、日色は素早く指を動かす。青い軌跡が文字を形成する。
「バラシュートなしでスカイダイビングでもしてみるか？」
ニヤリと口元を綴めた日色がそう言った直後――ビシュンと、瞬時に日色がその場から消えた。いや、日色だけではなく、男三人も一緒に。
少女は何が起こったのか目をパチクリさせていたが、魔力を感知したようで、ハッとなり真上を見上げる。地上からかなり離れた上空に、日色たちが浮かんでいた。
「――へ？　あ？　お？　な、なあぁぁぁぁぁっ!?」
「な、何なのこれぇぇぇぇぇっ!?」
「ほわぁぁぁぁっ!?　た、高い高い高いぃ！　死ぬほど高いいいいっ!?」
三人が騒ぐのも無理はない。何故なら先程まで路地にいたのに、今は空に浮かんでいるのだから。
「よぉ、どうだ？　楽しい楽しいスカイダイビングは？」
日色は男たちの慌てる様子が面白くてつい笑ってしまう。
「お、お前ぇっ！　こ、これ、お前が!?　これしたのか！　っこここれを!?」
これこれこれと、何を言っているのかよく分からないが、まともに言葉にできないほど驚愕しているのは分かる。
そんな彼らに対して日色は言う。
「まあ、腐っても『魔人族』なんだ。ここから落ちても大怪我だけで済むと思うぞ……運が良かったらな」
「う、運が良かったらってぇぇぇぇぇっ！」

「じゃあな」
そのまま男たちを空中に残して、日色が消えた。
「「うっそぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ!?」」
――路地に戻って来た日色は、少女と同じように外に出て様子を見守っていた店主に、
「アイツらはもうこの店に来ないと思うが、さっき言ったように飯代は無しでいいよな？」
「え、あ、は、はい……それはもう……」
いまだに何が起こっているのか理解できていないような呆けたままの店主だが、言質はとったので良しとする。
遠くの方で何かが落ちた衝撃音と悲鳴がしたので、三人は見事地面に降り立てたようだと日色は理解した。これで一件落着だ。腹も膨れたしそのままそこから離れようとしたところ――ガシッと、何故か少女に腕を掴まれた。
「……何だ？」
もしかしたらイチャモンや礼の言葉でも並べられるのかと思ったが、予想外な言葉が飛び込んできた。
「わ、私は魔王だ！　だ、だから飲み物を奢らせてくれ！」
コイツは頭がどうかしたのか、と本気で思った日色だった。

飲み物を奢らせてくれというのは分かる。きっと自分の巻き添えになったとでも思っているのだろう。実際そうなのだが、嘘を売ったのは日色なので別段謝罪など求めてはいなかった。ただそんなことよりも気になるのは彼女が最初に口にした言葉。
わたしはまおう――私はまおう？
変換が間違いないのであれば、つまりこの国の王。
彼女は自分の存在を【魔国・ハーオス】の統治者だと主張しているということだ。確かにここは魔王のお膝元であり、魔王が女だとリリィンからは聞いていたが……。
もし仮に彼女が魔王であるなら、一人でこんな場所へ出歩けるほど治安が良いということなのだが、先程の余所者のこともあるし、部下がそう簡単に許可を出すとは思えない。
それともただ単に魔王に憧れていて、思わず自分がそうだと言ってしまった妄想癖のある痛い娘だという可能性

について考えてみる。

メリットは……ほとんど皆無だった。魔王の国で魔王を名乗っても良いことなど見当たらない。どうせすぐにバレる。下手をすれば不敬罪で処罰を受けてしまうだろう。

ただ店主の態度を思い出す。そこから察して、彼女は身分の高い者。

もし彼女が魔王だとしたら店主の慌て様も納得がいく。目色の言葉遣いを窘めたり、ゴミトリオが彼女に対して近づいた時、ずっと青さめていた点から見ても、彼女が相当の権力に関わる人物であることは予想できた。

（コイツが魔王かどうかはともかく、この国では高い身分のある奴だってのは確かか。となると……）

そう冷静に考えた時、彼女が本物かもしれないという判断に大きく傾く。真剣な表情で目色の目を見つめてくる彼女を見て、嘘をついていないような印象を強く受けた。

（……まあ、バカ弟子を待たなければならんし、少しくらい付き合ってやるか）

そう思い、素直に彼女の申し出を受けることにした。

店内に戻り、言われた通り飲み物をご馳走になった。それはクリームソーダのようなジュースだった。

ゴクゴクとちゃっかり二回おかわりして喉に流していると、ようやく少女が口を開く。

「さ、先程も言ったように私は魔王だ。この国を統括している」

目色はグラスを傾けながら黙って彼女を横目で見つめる。目色が信じ難いという目をしていることに気づいたのか、彼女は慌てたように言う。

「あ、わ、私の言うことが本当かどうかは店主に聞いてほしい！」

「いや、そもそもその店主の発言の信憑性がオレには判断できんだろうが」

「あ……そ、そうか。むぅ……」

「……魔王かどうかはともかく、何か用か？　コレを奢るためだけにオレを留まらせてるわけじゃないだろ？」

目色の言葉にハッと息を呑む少女。

「う、そ、それも分かってたのか」

「当然だ」

明らかに話がしたいからというオーラが漂っていた。そもそもそうでなければ、初対面なのに腕を摑んでまで店に引っ張っては来ないだろう。

「う～そんなに私は分かり易いか？」

上目遣いで、瞳が濡れたように潤んでいる。

「さあな、もしくはオレが鋭いのかもな。それで、何を話したい？　暇潰しに聞いてやる」

「ひ、暇潰し……いや、まあそれはいいとして。それはだな……」

言い難いことなのか口ごもっている。

「何もなければオレは出て行くが？」

少々めんどくさくなってきたのでその場から出ていこうとする。しかしまたも腕を摑まれて行動を拒否された。

「さ、先程の魔法は――」

「悪いが答える義務はない」

「う……そ、そうか、そうだな……」

ガ～ンといった感じが分かり易いように落ち込んでいる。

（コイツ、どう見ても普通の女にしか見えんぞ）

今の彼女は少なくとも自分の知っている女性と比べても、何ら違いが見つからない。とても魔王というか、王の器を持つ傑物には見えないのだ。

（まあ、赤ロリに聞いたが、今代の魔王は先代の後を無理矢理継がされたらしいからな）

王を空位にしておくことができず、とりあえず王族の血を引く者に引き継がせたと聞いた。だからその人物が優秀かどうかをじっくり吟味したわけではなさそうなのだ。

そんな彼女がパッと顔を上げると、早口で自己紹介を始める。

「そ、そう言えば自己紹介がまだだったな！　私はイヴェアムだ！　イヴェアム・グラン・アーリー・イブニング」

その名前には聞き覚えがあった。前にリリィンにも聞いた魔王の名前である。

「……長い名前だ。魔王だというのなら魔王でいいだろ」

「で、できれば名前で呼んでほしいのだが」

「なら魔王（仮）にでもするか？　オレ的には魔王（笑）でも面白いと思うが」

「何だその（笑）というのは！　う～、魔王でいい……」

諦めたようにガックリと肩を落とすイヴェアム。

「……名前」
「ん？」
「名前を聞かせてもらっても構わないか？」
さてどうしようかと思案する。別に名乗ってもいい。相手が魔王だとしたら、国王に知られるという面倒なことになるが、召喚された時と違い、今はもう大抵のことなら対処できるくらいの強さは手に入れた。だから別段気にする必要はないと判断する。
「ヒイロだ。ヒイロ・オカムラ」
「ヒイロ……ヒイロ・オカムラ……良い名前だ。少々変わってはいるが」
噛み締めるように言う彼女の笑みは、恐らく誰が見ても惹かれるほど素敵な微笑みだっただろう。少女のホッとした瞬間の笑みは、見ている者を穏やかにさせる力を含んでいた。それでも日色は、いつも通り無愛想な表情を一向に崩しはしなかったが。
「ヒイロ、お前も先程の者たち同様、この国の者ではないな？」
「そうだ。今日着いたばっかだ。よく分かったな」
「まあ、それは何となくニオイで分かるのだ。……ここへは何しに来たのだ？」
答える義務はないと思ったが、別に隠すようなことでもないので教えることに。
「この国に《フォルトゥナ大図書館》があるだろ？」
「ああ」
「そこの《深度5》の領域に入りたくて、許可を貰うために来た」
正確に言えば、仲間のリリィンがその許可を貰ってくるのを待っているのだ。もしかしたら、今もそのために動いているのかもしれない。
リリィンとはそういう契約をしている。日色のことを教えることを条件として、読書が生きがいの日色のため、《フォルトゥナ大図書館》の最高機密の閲覧書を読めるようにコネクションを作ること。
ただ彼女は、旅をより楽しくするため、自ら観察して日色のことを知っていくという方法を選んでいた。そう考えれば、どちらも対価は払っていないので、契約自体はまだ不完全のままフワフワとしているともいえるかもしれない。

「《深度5》？　王族の許可が必要になる場所ではないか」
彼女の言う通りだ。《フォルトゥナ大図書館》に存在する書物の数は、この世界で最高峰に位置する。別名《知識の泉》と呼ばれており、世界に存在する、ありとあらゆる問題の解答が眠っている場所なのだ。
基本的に『魔人族』なら申請すれば許可が下りる第一フロアは《深度1》と呼ばれ、貴重度は低い。それから地下に下りる度に《深度2》、《深度3》となっていき、許可も館長だけでなく国――つまり王族の許可が必要になるフロアもある。
最奥が《深度5》。一般人では決して目にすることができない書物が保管されている。日色はこの書物を是非読みたいと、図書館の存在を知ってから常々思っていたのだ。
「何故そのような場所へ行きたいのだ？」
探るような鋭い視線。日色が何か悪巧みでもしていると思っているのか。
「は？　本は読むためのものだろ？　読みたいという他に理由があるのか？」
「……え？　その、売ったりしないのか？」
キョトンとなってそうなの？　的な感じで聞いてくる。
「お前何言ってんだ？　売ってどうする。金にでもするのか？」
「そ、そうだろう、普通は」
「あのな、オレは純粋に珍しい本が読みたいだけだ。ただの知的好奇心だ。金に興味なんかない。本は秘匿するものではなく、読むために存在するんだぞ」
日色の言葉を受け、しばらく目を丸くし呆然としているイヴェアム。
「おい、質問しておいてだんまりは失礼だろうが」
「あ、いやすまない。今までにも一般人が《深度5》に入りたいと願い出てきたことがあるが、ほとんどが盗みを働いて、ひと儲けしようと企てていた者たちだったのでつい」
「ついオレもそうだと？　そこら辺の奴らと一緒にするな。不愉快だ」
失礼な奴だと思いつつジュースで喉を潤す。
イヴェアムがそんな日色を見てクスッと笑みを零す。
「そうか、いや、本当にすまない。まさかただ純粋に読みたいと言う一般人がいるとは思わなかったのでな」

「ここの連中に知識欲はないのか？」
「いいや、確かに中にはヒイロのような者もいる。だがこのご時世で本をゆっくり読もうなどと思う者は悲しいことに……少ないのも事実だな」
確かに今の世界情勢は、日色が住んでいた日本のように平和とは言えない。だからこそ、ほとんどの者は身体を鍛えたり、有事に備えて食糧を貯えたりと忙しい。ハッキリ言って日色のようにのほほんと本を読もうとする者たちは少ないのである。
日色自身は、自分が他種族同士の諍いには関係ないと楽観視している部分が大きな理由にはなっているが。
「本は良いものなんだがな」
「ほう、好きなのか？」
彼女の呟きを聞いて、彼女もまた本が好きなのか聞いてみた。
「ああ、本は私を魔王ではない別の私にしてくれる。読んでいる間だけは、私は物語の主人公となり自由の翼を広げられる」
「何だか今は自由じゃないって言ってるみたいだな。こんなとこで一杯やってるのが自由じゃないって言うなら、自由って一体何だ？」
「そ、それは……で、でも私だって普段からここに入り浸っているわけではないぞ！　魔王として皆を導き指導しているつもりだ！」
「だが常連なんだろ？」
「う……うぅ……」
イヴェアムが追い詰められて拗ねたような顔をしたのが面白かったのか、店主が「ぷふ」っと笑ってしまう。
「む！　何がおかしいのだ馬鹿者！」
「す、すみません陛下！　で、ですがそのような陛下は久しぶりに見ましたもので！」
店主は嬉しそうに言うと、イヴェアムはハッとなって頬を軽く染め上げる。そしてキッと日色を睨む。
（睨まれても困るんだが……。しかし陛下……ね）
店主の言葉で、益々彼女が魔王だという事実が薄くなっていく。
「……何だかヒイロといると調子が狂う」

「オレのせいにするな」
「むぅ～」
「大体お前が仮に魔王だとして、自由じゃないと決めつけてるお前が悪いだろ？」
「……え？」
「魔王がどういうものか知らんが、お前は魔王の型枠を勝手に決めつけてその中で動き回るからしんどいんじゃないのか？」
「……」
「だったらそんな型枠通りの、ありきたりな魔王像なんて捨てればいいだろうが」
「そ、そんなことできるわけがない！　民がついてこなくなる！」
イヴェアムがバンッとカウンターを叩き詰め寄ってきた。店主もビックリしている。
「だったら器じゃないってだけだろ？　たとえ自由に王をやってても、そいつが本物で魅力があるなら人はついてくると思うぞ」
「……」
「民のため、国のため、大いに結構だ。だが自分のために動けないのなら、いつかパンクしちまうだけだ。オレならそんな王はゴメンだな。オレはオレの道を行く。それで人がついて来ないなら別にそれはそれでいい」
まあ、自分に王の器などないがな、と日色は心の中で思った。
イヴェアムは少し顔を伏せつつ、噛み締めるような言い方で、
「……本物なら自由にやっていても人はついてくる……か」
「まあ、お前に王の器があるならそうだろうな。少なくともお前は王なんてガラじゃなさそうだがな」
「え？」
「お前はオレから見れば、普通の女だ」

※

「……え？」

——ドキッと、イヴェアムの心臓が跳ねた。まるで鋭い矢に打ち抜かれたような、いや、そうではない。何かこう素手で心臓を掴まれたような感覚が全身に走った。

（普通の……女……？）

イヴェアムは何故か胸に熱いものが流れ込んでくるのを感じ、そしてその表情は耳まで真っ赤に染められていた。恥ずかしくなって勢いよく日色たちに背を向ける。

「わ、私は魔王よ！　そ、そそそんな普通の女の子なんて言われても、こ、ここ困るわ！」

口調が変化しているのも気づいていない。

（な、何よいきなり！　きゅ、急に普通の女の子って……！）

女の子ではなく、女なのだが、少しイヴェアムの中で自動修正が入ってしまっている。

（し、しかもあんな真剣な顔でそんなこと言われたのなんて初めてだし……）

今は日色の顔をまともに見ることができない。

（だ、だけど……私も何でいきなり彼に魔王だなんて言ったんだろ……？）

普通はもっと順序立てて話を進めた方が、相手も理解しやすかったはず。しかしあの時、咄嗟に彼を引き止めなければという強い思いが身体を動かしていた。

（それは多分……あのとんでもない魔力量を感じたってこともあるだろうし……でも）

チラリと、日色の着用している赤いローブを見る。

かつて赤い服を着ている人物に助けられたことを思い出す。助けられたといっても、間接的であり、実際には名前も顔も知らない相手。

獣人との戦争をどうやって乗り越えていいか悩んでいた時、気分転換でお気に入りの水平線が見える丘に行った。するとそこで、妖精という種族の者たちが楽しそうに会話をしていたのを発見したのだ。

妖精たちが口にしていた赤い服の人間が発したという言葉を参考にしたお蔭で、双方に死者を出すことなく戦争を終結させることができたのだ。

もちろん赤い服の人間は、自分の言葉のお蔭で、イヴェアムが木懐をとげたことなど知らないだろう。しかしいつか会ってみたい。そして礼を言いたいと思っていたのだ。

今、傍にいるのは同じ赤い服でも人間ではなく魔人。その姿は『インプ族』だ。

妖精たちが言っていた人物とは違うだろう。しかし何故か、彼を引き止めて話をしてみたいという気持ちが湧いたのだ。

だからつい強引な感じになってしまったが、こうして話を聞いてもらうことができた。

（それに……そう、彼ならば……）

同じ魔人であるという理由も信頼度を高めているかもしれない。

また内包する魔力量の多さもさることながら、恐らくレベルも相当高い。戦闘力がそれほど高くないはずの『インプ族』にもかかわらず、魔王である自分よりも強いかも、と思わせるような不思議な存在。そんな強者がこんなタイミングで自分の前に現れたのは、何かの天啓なのかもしれないと運命めいたものを感じてしまっていた。

（私たちの力になってくれるかもしれない）

※

普通の女発言が困ると言われてしまった日色だが、そう言われても感じたままを口にしただけなので、何故彼女が必死で否定するのか理由がサッパリ不明だ。

（もしかして女じゃない……とか？）

この見た目でそれはない、とは思うが……。

（そういえばアイツも女っぽかったが、実は男だったよな）

以前立ち寄った砂漠で出会ったカミュという魔人。中性的な顔立ちをした少年のことだ。

だからもしかしたら目の前にいるイヴェアムもそうなのではと疑い始めていると、背中を向けていたイヴェアムがバッと振り向いた。

「と、ところでヒイロ！」

「あ？　どうした、顔が赤いが？」

「き、気にしないで！　ここの空調がおかしいだけよ！」

「そうか？」

どちらかというと、若干寒いくらいだったのだが。しかも先程から彼女の口調が変わっていることに首を傾げて

しまう。

「そ、そう……おほん！　ならヒイロは旅人ということなのだな？」

また口調が元に戻った。統一すればいいのにと思ったが、それほど気にもならないので放置しておく。

「まあな」

「ここにはどれくらいいるつもりなのだ？」

「さあな、目的次第だ」

「ああ、先程言っていた《フォルトゥナ大図書館》の件だな？」

「ああ……あ、というかお前が本当に魔王なら許可が出せるんじゃ……？」

遅まきながらそこにようやく気づいた。しかしながら本当に彼女が魔王かどうか分からないので、半信半疑で尋ねてみる。

「ああ、私なら許可は出せる。しかしいくら読みたいだけと言っても《深度5》には禁書や古文書など、門外不出の書物が多くある。おいそれと信用できない者を入れるわけにはいかない」

彼女の言い分は至極真っ当。これはリリィンに期待するしかないかなと思ったその時、

「だが、ヒイロが私の頼みを聞いてくれるのなら許可を出してもいい」

思わぬ提案に、日色はピクッと眉を動かした。

「頼みだと？」

「そう、つまり依頼。もちろん契約書も作る。ヒイロがその気なら、だが」

彼女が何を考えているのか考察する。嘘を言っているようには見えない。もし本当に魔王なら、これはかなり有益な交渉だと思った。

国のトップ直々に許可を貰えるならそれに越したことはない。リリィンには悪いが、ハッキリ言って、彼女が許可を取って来られる保証などどこにもないのだ。より確実な方法があるならそちらにするのが利口である。せっかくのチャンスでもあるし。

（ただ魔王の……いや、まだ魔王か分からんが、それなりの依頼を言いつけられそうだな）

これまで数多くの依頼をこなしてきたが、王直々にというのは初めてだった。どんな無理難題を叩きつけられるか。ただ話だけでも聞く価値はあると判断する。

「……依頼内容は？」

途端にイヴェアムの表情が険しくなる。それだけで、これから話すことが伊達や酔狂などではないことを理解した。

「――十日後、ある場所で会談が行われる予定なのだ」

「……『人間族』と『魔人族』が行うって噂のやつだな。ここに来る途中で聞いたことがあったが……十日後？」

同盟のために【魔国】から【人間国】へ会談要請が行われていることは、魔界に住む魔人たちの噂になっていた。しかしそれがいつになるかは分からない。だから肩唾ものかもと思っていたが、それが十日後に迫っているとはさすがに驚きだ。

「お前、本当に魔王ならこんなところにいていいのか？」

サッと目を逸らしたので、ああコイツ、城から逃げ出してきたなと思った。

（恐らくプレッシャーに耐えかねて、ここで息抜きをってことなんだろうが……）

そう思い店主を見ると、彼も小さく頷いて、あなたの考えが合っています的な感じで返答してくれた。

（……ん？　あ、思い出した。そういやここに来る前に見た銅像って、コイツだったような……）

この店の近くにある広場で、ニッキが一つの銅像を指差した。女性の像だったが、思い返せばあれはイヴェアムとそっくりだ。王の象徴として建てられたものなのかもしれない。

（これでコイツが魔王って信憑性が高まったな。……もし見た目通りの年齢なら、オレとそう変わらない……か）

つまり十代で国の命運を託されているということだ。そうであるならば、彼女の双肩には、日色には想像もできない重いものがのしかかっていることだろう。

「とにかく、その会談が十日後に行われるってことだな？」

「ああ、だが……」

しかしイヴェアムの暗い表情を見るに……。

「……何か問題が起こる。いや、起こる可能性があるって考えてるのか？」

「……」

沈黙は肯定だな。だがそもそも会談の危険性など当然のことだろう？」

「それは……そうだが」

過去にも人間と魔人との間で会談は行われたようだが、その時は魔人側が裏切り襲撃をかけ、結果的に多くの人間の命が失われたと、リリィンから聞いたことがある。なら人間側が復讐として何かを仕掛ける可能性もあるし、黙って見過ごすとも思えない。

「どこなんだ？　会談場所は？」

「それは言えない。契約書にサインをしてもらってからだ」

もしここであっさりと場所を言っていたとしたら、日色はイヴェアムを完全にバカにしていたことだろう。会談場所を簡単に他人に教える様じゃ、魔王失格だ。

（まあ、十日後っていうワードも、普通なら言わない方がいいんだがな）

ただそれは、まだ真実ではない可能性も残っている。

「分かった。じゃあさっさと言え。オレに何を求める？」

「……この国を助ける力になってほしい」

「……」

「無いとは信じたいが、手薄になったこの国に『人間族』から何か動きがあるかもしれん。その時、防衛の力として手を貸してほしい」

「手薄……。つまり主な戦力を率いて国から遠ざかることになる。……読めたな。会談場所は人間界か」

「っ!?」

「その顔は魔王としては失格だな。図星を指されても平静を保つように心がけた方がいい」

「あ、う……そ、そうだな」

やはり彼女は王には向いていない。というより、王になってまだ日が浅いのかもしれない。腹芸などを持ち合わせてはいないのだろう。

（しかし……会談場所は人間界か。まあ、それも妥当な譲歩か）

過去の裏切りを考慮した人間側の当然の要求だろう。それを呑むことしか魔人側はできなかったということだ。

自分が会談に向かうから、ここは自分の手で守れない。その隙を狙って人間が攻撃してくるかもしれない。つまり今度は人間側から裏切り行為があるかもしれないと、イヴェアムは一抹の不安を抱えているのだ。

もしそのような出来事が起きた場合、少しでも国や民を傷つけないように日色に力を借りたいと思っている、と

いうことなのだろう。

「ヒイロの力は先程見て把握した。凄まじい魔力に、あの魔法……恐らくユニーク魔法だろう？」

日色はポーカーフェイスを維持していたが内心では驚愕していた。まさかあの一瞬で見破られるとは思ってもいなかったからだ。

「私は魔力感知に自信がある。あの時伝わって来た魔力の感覚、どの属性も感じなかった。つまり無属性……ユニーク属性ということだ」

「……どうだかな」

まさか魔力だけで属性を把握できるとは驚きだ。余程感知能力に長けているのだろう。日色の魔法がユニーク魔法だと一目で見破られてしまった。

「別に公表などはしない。私が欲しいのは純粋な防衛力。ヒイロなら……あれほどのことを事も無げにするほどの力の持ち主なら、この国の防衛として期待できる。だから是非ともその力を防衛と保護に注いでほしいのだ」

どうやら誤魔化しても、もう彼女は確信しているようだ。日色は言い訳を諦めた。

「便利な感知能力だな。ま、オレは確かにユニーク魔法を使うが、その力を有事の際に発揮してほしい。それがお前の望むことか？」

「そうだ。あくまでも念には念を入れておく。無論何事もなければそれが一番だが」

「……なら依頼料は？」

するとそこで彼女はフッと頬を緩める。

「先程言った《フォルトゥナ大図書館》、《深度5》の入室許可証を発行しよう」

「……口約束でか？」

「いや、先程も言っただろう？　契約書にサインをしてもらうと」

すると彼女は店主に顔を向け、

「《契約の紙》はあるか？　一番ランクが上の、だ」

と問うた。

店主は「しばらくお待ちくださいませ」と頷き、店の奥へと入っていくと、少ししてから一枚の紙を持ってきた。

そこには何も書かれていない。

彼女は自分の手を歯で噛んで血を流す。さらにその血を使い、懐から出した羽ペンで紙に文字を書いていった。
書かれていく文字を、日色もしっかりと目で追っていく。
依頼の内容に報酬。そして決して途中放棄しないというような遵守事項が書かれてある。その中には、有事の際、もし納得ができない状況が起これば、個人判断で動くことも可能とも書かれていた。
「これは《契約の紙》。これにサインした者は、ここに書かれている内容を違えると、契約違反となって、互いに決められた罰を受けることになる」
「決められた罰？」
「そう。そうだな……もし破れば魂が削られてしまう、というのはどうだ？」
「魂……もしかして寿命が奪われるってことか」
「物分かりがいいのだな。その通りだ。互いの命すべてをかけるという契約もあるにはあるが、それはこの一つ上の最上級の《契約の紙》でなくてはできない。これもかなり貴重な部類に入るのだがな」
「そんなものがよくこの店にあるもんだな」
「商売人にとって《契約の紙》は必須だったりするからな」
何でも上客との交渉には必要になったりするとのことで、常に揃えているらしい。
（それにしても……）
恐ろしい契約書もあったものだと嘆息する。しかしなるほど、確かにこれにサインする相手になら、貴重な会談場所などを教えてもいいかもしれない。
契約違反をしてまで、わざわざ寿命を削りたくはないだろうから。
「私の依頼……受けてくれるか？」
紙に依頼内容を書き込んだ後、不安気にイヴェアムが日色へと尋ねてきた。
「もちろん、ここが戦場にならなかったとしても、依頼を受けてくれた時点で、そちらの望みを叶えると誓おう」
「つまり、だ。ここにサインした時点で、許可証は発行してくれるということか？」
「ああ、そのように契約書にも書いた」
「……確かに書かれているようだな」
「だから……受けてほしい」

彼女は断られると覚悟をしていたのかもしれない。というよりも、普通の相手であるならば、たかが図書館の許可証と国の防衛を天秤にはかけないだろう。
しかも違反をすれば寿命が削られるのだ。敬遠するのは当然。
だが相手は——日色。およそ常識では計れない人物でもある。
「……どこにサインするんだ？」
「え……？」
やはり断られることを念頭に置いていたのか、イヴェアムが固まる。
「おい、どこにサインするかさっさと教えろ」
「え、あ、ああ……で、でも本当にいいのか？　せ、戦争になるのかもしれないんだぞ？」
「別にいい。戦争になったってオレが死ぬわけでもないしな」
戦争の恐ろしさを、日色は十分に理解はできていない。しかしこれでも修羅場は幾つか潜ってきたつもりだし、生き抜くための力も磨いてきた。最悪、逃げるくらいはできる程度には。
それに契約をすれば簡単に《フォルトゥナ大図書館》の許可証が、魔王のお墨つきで貰えるのならば、日色にとっては嬉しい話でもあった。リリィンにはあとで説明すればいいだろう。目の前にぶら下がっている餌を放置しておくほど、日色はのんびり屋ではない。
また契約自体を破棄できる力を持っているということが一番大きい。
（オレの魔法を使えばそれも可能だろうしな）
だからこそ、案外楽観的に考えているのだ。
イヴェアムが紙に契約違反をすると寿命が削られるという条件を書き加えた後に、
「こ、ここよ。ここにサインして」
と言うので、彼女の示す場所に、同じように指を噛んで出した血でサインをした。
その瞬間——《契約の紙》が淡い光を放ち始めた。すぐに紙自体が粒子状に分散し、日色とイヴェアム両者の胸の中に半分ずつ吸い込まれていった。
痛みはない。ただ胸の奥の方にある扉に鍵がかけられたような感覚を得る。
「ふぅ、これで契約成立よ」

「口調変わってるぞ？」
「こ、これで契約成立だ！　そこは突っ込むな！」
顔を赤くして怒鳴るが、少しも怖くないところが魔王として残念だ。
「おほん。えっと……では、今後について話したいから、あっちのテーブルへ行くぞ」
カウンターではなく、店の奥にあるテーブル席へ移動し、イヴェアムから話を聞くことになった。
そうしてしばらくの間、彼女と今後のことに関して話をしていると――カランコロン。
またも来客が。
「――あらぁ～、やっぱりここだったわ陛下ぁ～」
胸をはだけさせるような踊り子風の服装で現れた妖艶な女性を見て、イヴェアムは「見つかったか……」と残念そうな表情で溜め息を零した。
「また一人で行動してぇ。マリオネとキリアがカンカンよぉ～」
「す、すまないシュブラーズ。すぐに戻る」
「そうしてちょうだいなぁ。ん？　あら男と密会？　んふふ～陛下も隅におけないわねぇ～」
日色の姿を見てからかうように言うシュブラーズと呼ばれた女性。するとイヴェアムは瞬間湯沸かし器のように、即座に顔を真っ赤に染めた後、湯気を噴出させた。
「み、みみみ密会などではないっ！　す、すすす隅に置けることしか私はしていないぞっ！」
「んふふ。混乱しまくりねぇ。ふぅん……」
シュブラーズが日色を観察するようにジッと見つめた。日色は別に興味がないのでチラリと見ただけで無視している。
イヴェアムがバッと立ち上がり、そそくさと店の入口の方へ向かう。
「ほ、ほら！　早く行くぞ！　やることは一杯あるのだ！」
「あん！　もう陛下ったら、それを陛下が言うのぉ～」
イヴェアムが扉に手をかけた時、ピタッと動きを止め、日色に顔だけを向ける。
「……じゃあ頼んだわね、ヒイロ。けどくれぐれも無茶はしないでね！　あくまでもあなたの命を優先して」
そう言って店から出て行ってしまった。

「あら陛下、口調が……ん～なるほどぉ～」
そう言って再び含みのある視線を日色に向けると、
「んふふ、陛下が世話になったみたいねぇ～。あ・り・が・と」
最後にウインクを飛ばして同じように店から出て行った。
「……あの女は？」
「え？　ああ……シュブラーズ様ですよ。陛下を護衛する部隊の一人。ああ見えてとんでもなくお強い方です」
店主に言われ、再び視線を扉へと向ける。そこにはもう誰もいない。
（店主の言う通り、あの女は強い。それに店主と同じようにあの女のことを陛下とも呼んでいたな）
本当なら魔法で相手の《ステータス》を調べるということもできたが、感覚の鋭い魔人相手に魔法を発動させるのは躊躇われた。調べればイヴェアムが嘘を言っているのか容易に確かめることもできたが、今となってはそれも必要なかったと思う。
何故なら最初から最後まで、イヴェアムの瞳は真剣そのものだったから。
彼女が魔王で、国を大切に思っているということは本物だということは伝わってきた。
（しかし、あの女が魔王ね……周りにいる連中は苦労してそうな感じだ）
ただこれで日色の望みは確実に叶うので、日色としては満足していた。
そう、契約者が死なない限りは、だが。

※

会談まで残り四日と迫ったある日――『人間族』と『魔人族』の国境では、魔王軍を率いたイヴェアムが橋を渡っていた。
魔王軍といっても、国軍すべてを引き連れているわけではない。《魔王直属護衛隊》の面々と、彼らが持つ部隊だけを連れている。
魔王軍のほとんどは国の防衛に当てており、国で何が起こっても対応できるようにしてはいるのだ。ただ最高戦力がすべて国外へ向かうこと自体は不安要素ではある。

それでもイヴェアムは、国に残してきた同志たちのことを信じているし、何事もなく無事に会談が終わるようにと願っていた。

橋を渡るのはイヴェアム他、キリアと《魔王直属護衛隊》だけ。計――七人だ。

橋の中央では、よく知った顔が出迎えてくれた。

「――イーラオーラ、変わりはないか？」

橋の護衛を任せている責任者に声を掛けた。彼はその三メートル以上はあろう巨体を跪かせ臣下の礼をとる。

「はっ！　実は勇者どもが数日前、この【ムーティヒの橋】に現れました」

「ああ、こちらもテッケイルから勇者たちが橋に現れたという情報は受け取っている。それで？　ここで勇者が何かしら動いたか？」

イーラオーラがハッキリと首を左右に振った。

「いえ、橋の先にて、こちらを警戒するように見守っているだけです」

「今も勇者はこの先にいるのか？」

「恐らくは」

イヴェアムは長い橋の先を見つめる。この【ムーティヒの橋】も、他の国境にある橋と同じで距離が長い。橋の中央に立っても、その先にいるはずの者たちの顔を判別できない。

「やはり事が起こった場合、この橋を破壊するつもりなのかもしれないな」

ただイヴェアムには少し気になることもあった。

（人間の王は、自身の護衛に勇者を当てると思っていたが）

国の最高戦力であるならば、自身の傍に置いておきたいと思うのが普通。

（王を守る優秀な盾が、他にもいるということ……？）

そう考えると、この配置も納得できるものはあるが……。

「……キリア、実は……ん？」

「どうされました？」

雪のように真っ白な髪を持つイヴェアムの側近――キリア。彼女は冷静沈着で、普段から無口で無表情だが、人間界を前にして緊張しているのか、表情が少しいつもと違うとイヴェアムは感じた。

「……珍しいな。キリアが緊張しているとは」

「……？　別にしていませんが？」

「？　そ、そうなのか？」

彼女はキョトンとした表情で「はぁ」と言うが、イヴェアムは確かに普段と違う彼女の変化に気づいていた。

（別に強がらなくてもいいのに。まあでも、キリアらしいわ。私が変に不安にならないように振る舞ってくれているのねきっと）

キリアがいつもと同じように振る舞ってくれることで、イヴェアムもまたいつも通りでいられる。彼女の心遣いがありがたかった。

（でも……キリアが緊張するなんて、今まで見たことなかったけど）

それだけ会談が重大な分岐点だということを、彼女も理解しているということか。

「それで陛下。何か仰りたいことがあったのでは？」

「あ、ああ、そうだなキリア。向こうの条件として、人間界に連れて入ることができるのは《魔王直属護衛隊》だけ。……だがここにオーノウス、シュブラーズ、グレイアルドを置いていくことにする」

その言葉に反応したのは、キリア含めてほぼ全員だったが、実際に口を開いて問い返したのはイーラオーラだった。その顔には明らかに不愉快さが滲み出ている。

「陛下はこのイーラオーラが信じられないと？」

魔人よりも脆弱とされている人間に自分が負けると思われているというニュアンスを、イーラオーラは感じたのかもしれない。

「いや、そうではない」

「では、何故でしょうか？」

「立場を弁えろ、イーラオーラ！」

そう怒気を含めた言葉を投げつけてきたのは《序列二位》のマリオネだった。

「貴様の立場は今、橋の防衛隊の隊長だ。いつまでも《魔王直属護衛隊》だった時のような進言は慎むがいい！」

イーラオーラとマリオネ、二人の間に激しい視線の火花が散る。

「よせ二人ともっ！」

イヴェアムの言葉が、互いに視線を切らせ場を鎮めることに成功した。だが両者はまだ納得がいっていないという表情だ。特にイーラオーラには、明らかな苛立ちが見える。

「はぁ、いいかお前たち。我々は同志だ。確かに立場というものを与えることで秩序を作りはしたが、それでもイーラオーラが『魔人族』のために貢献してくれていることは明白だ。彼の意見も『魔人族』の意見。無視などできるはずもない」

マリオネは憮然とした様子で鼻を鳴らすとスッと身を引いた。

「先程の質問だが、イーラオーラよ」

「はっ！」

「お前の力は存分に理解している。だがこの橋は決して壊させてはならないのだ。普段の『人間族』の兵士相手ならお前がいれば十二分に安心できるだろう。しかし今回は勇者がいる。彼らの実力は未知数だ。こちらも調査はしたが、特にここ半年の間は、意図して勇者の戦いを隠してきた節があった」

【人間国・ヴィクトリアス】にテッケイルを侵入させて情報収集に動いてもらってはいたが、彼からの情報では勇者たちの強さを知ることができるようなものはなかった。

隠密に長けているテッケイルが、それほど情報収集に苦労したのは、余程彼ら『人間族』がひた隠しにしてきたせいだ。

それだけ今の勇者たちの実力を知られたくないのだろう。だから今の段階で勇者の実力が窺い知れないとなると、イーラオーラだけで安心するのはリスクが高い。

「勇者たちは未知数。しかも全員が魔人の弱点である光魔法を使えることは調査で分かっている。それが四人も、だ。お前を信じてはいるが、やはり不安にもなる。分かってくれ」

「……御意」

渋々といった感じで、イーラオーラは頭を下げて了承の意を表した。

「ということだ。オーノウス、シュブラーズ、グレイアルドはここに残って橋の防衛に尽力してくれ」

「「はっ！」」

イヴェアムの言葉に三人が返事をして頷く。

「陛下の御身は私とアクウィナスで守るから安心するがいい」

マリオネは自信満々に特徴のある髭を擦っている。イヴェアムも、彼らがいるからこそ、ここにオーノウスたちを残していけるのだ。

そしてイヴェアムたち四人は橋を進んでいく。その中で一人だけ立ち止まりオーノウスに近づいたのは――《序列一位》であるアクウィナスだ。

「どうしたのだ、アクウィナス？」

彼の行動を怪訝に思ったのか、オーノウスが尋ねた。アクウィナスがオーノウスにしか聞き取れない小声で口を開く。

「オーノウス、お前は我らが橋を渡り切ったら国へと帰還してくれ」

「は？　一体何を言っている？」

アクウィナスが周囲を窺うような様子を見せるので、オーノウスもそれに倣い小声だ。

「どうにも嫌な予感がする」

「嫌な予感だと？」

「ああ、この会談……恐らく荒れる。しかも相当な」

「……根拠は？」

「言っただろ、予感だと」

オーノウスは友であるアクウィナスの目をジッと見つめる。そしてフッと笑みを浮かべて肩を竦める。

「一応、ここにいるのは陛下の命なのだがな」

「すまない。しかし頼めるのは俺が最も信頼しているお前しかいない」

「……分かった」

「頼む。シュブラーズたちには私から言い聞かせておく」

「ああ。だがお前も、陛下のことを必ずお守りするのだぞ」

「言われるまでもない」

そう言うとアクウィナスが、橋に残るシュブラーズたちと会話をした後、イヴェアムを急いで追って行った。その背中を見つめてオーノウスは険しい表情を見せる。

「確かにこの会談、こうも静かだと逆に不気味ではある」

彼自身も懸念していたのは『獣人族』のことだろう。この会談が成立すれば一番困るのは彼らだ。その彼らが黙って見ているわけがない。一応イヴェアムが策を講じているが、それでも何事もなく上手く進むかどうかは分からない。

それこそここまでやって来て橋を落とすようなことをしてもおかしくはないはず。

しかし『獣人族』の影も形も見えないことに、得も言われぬ不気味さが漂っていた。

オーノウスがどんよりと曇った灰色の空を見上げる。

「……確かに荒れそうだ。アクウィナス、陛下を頼むぞ」

イヴェアムたちは橋を渡り切り、そこに駐屯していた『人間族』の姿を見て身を引き締めた。皆がこちらを警戒するような視線を送っているからだ。

今まで争っていた敵が、自分たちの領域に足を踏み入れたのだから当然の対応である。

よもやいきなり襲い掛かってくるようなことはないだろうが、それでもイヴェアムたちも警戒しながら進む必要があった。

(勇者たちは……)

イヴェアムは視線を動かし、イーラオーラの情報からここにいるであろう勇者たちを探す。そしてある四人の男女に目が映った。

茶髪で身長が高くて、女性にモテるであろう整った顔立ちをしている少年に、同じ茶髪で活発そうな少女。そして黒髪が腰にまで伸びている清楚と言える見た目をしている少女に、少しウェーブがかかった黒髪を肩まで伸ばしている猫目の少女。

(あれが勇者だな……)

イヴェアムはポーカーフェイスを装い、視線だけを動かして四人の若者を視界に入れている。向こうもこちらに気づいてジッと観察するように見てきていた。

イヴェアムが彼らに対し勇者だと判断したのは、その内包する魔力量を感知したからである。イヴェアムは魔力探知に優れている魔人種であり、また彼女は生まれつき多大な魔力と精密な魔力コントロールを有していた。

その能力を使って、人間たちを観察して内包する魔力の質と量を見抜いたのである。イヴェアムはそのまま足を止めずに突き進むと、目前に人間の兵士が立ちはだかった。

「魔王イヴェアム・グラン・アーリー・イブニング殿とお見受けします」

兵士は、恐らく隊長格だろう。他の兵士が身に着けているグレー色の鎧と違い、一人だけ形と色が違う。他にも一人、目の前の人物と同じく、赤い鎧を着用している。恐らくその人物も隊長格なのだろう。

「出迎え痛み入る。我が名は【魔国・ハーオス】を統括する王、イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングだ」

凛とした表情で佇みながら言うイヴェアムを見て、周りの人間たちから感嘆の息が聞こえる。イヴェアムは確かに敵である『魔人族』の王だが、その壮麗な見た目に目を奪われているのかもしれない。

アクウィナス曰く、王としての威厳はまだまだ足りないらしいが、それでも人間たちにとっては、明らかに自分たちとは住む世界の違う存在だということを強制的に理解させられているのだろう。

またイヴェアムだけでなく、傍にいるアクウィナスとマリオネの存在感にも息を呑んでいる。

さすがの隊長格と思われる赤い鎧を纏っている者たちも、明らかに緊張が顔に出ていた。

「……これから【聖地オルディネ】へとご案内します。条件の通り、ここからは《魔王直属護衛隊》の六人のみ護衛が許可されておりますので」

「分かっている。こちらから連れて行くのはアクウィナスにマリオネ、そしてキリアの三人だ。キリアは《魔王直属護衛隊》ではないが、私の側近だ。書状で許可も得ている」

「分かりました。では馬車を用意させてありますのでついて来てください」

そうして隊長格の人物の後についていった。

※

イヴェアムはそのまま勇者たちを素通りしたが、アクウィナスだけは違っていた。少し立ち止まって彼らに視線を送り、訝しむ気持ちで眉をひそめる。

(……妙だな。確かに強い。強いが四人とも魔力量が等し過ぎる……?)

感じたのは膨大な魔力量。確かに『上級魔人族』以上の強さを感じるのだが、四人が四人とも不自然なほど同等

の魔力量を持っていた。

（此度の異世界の住人は皆がそうなのか。それとも……）

外見上は確かに四人が四人とも違うが、それでも魔力の量だけが何か引っかかった。同じ魔力量がここに四人――しかもそれが全員勇者ということに違和感を覚えたのだ。だが四人が同等の魔力を持っていることも有り得ないというわけではない。

（……オーノウス、国は頼んだ。その代わり姫は……）

不安は強くなるが、それでも今は会談に赴くしかない。

それが彼女の――イヴェアムの意志だからだ。

勇者のことは気になるが、それでも今は前へ――。

だがこの選択がどういう物語を作るのか、無論この時のアクウィナスには知る由もなかった。

第二章・人魔同盟締結会談

【聖地オルディネ】――かつてこの世界【イデア】に召喚された異世界の勇者が、困窮していた『人間族』を救い、その天寿を全うしたと言われている場所。

勇者は死ぬ時、自らの身体を光と化してその地に降り注いだという。もともとその地は酷く荒廃しており、毒の沼や多くの凶暴なモンスターたちが蠢いていた。勇者は最後の力を振り絞って汚れた土地を浄化したのだ。

それからその土地には多くの草花が生えるようになり、以前とはかけ離れた自然溢れる豊かな土地となった。それにどういうわけか、その地にモンスターは一切近づかず、魔法も使えなくなっていたのだ。

これは勇者の平和への意思がそうさせたのだと理解され、人々はそこを【聖地】と呼び、勇者を称える建物を建造した。

それが――《オルディネ大神殿》。その地の中心であり、勇者の力を最も強く残した場所に、巨大な白亜の神殿が建てられた。

初代神官長には、勇者の仲間だった人物が就任。名をロウニス・ギルビティといった。【聖地オルディネ】は平和の象徴として崇められ、現在も多くの参拝者や観光客が絶えず、上流階級の者たちが重要な交渉などを行う場としても利用されている。

そして今、そんな【聖地オルディネ】に、大きな時代の転換期を迎えるであろう出来事が起きようとしていた。

そう、会談である。

『人間族』と『魔人族』の同盟締結を主軸に置いた会談が開かれようとしていた。

《オルディネ大神殿》の中にある《聖域の間》と呼ばれる場所において、二つの種族を代表する顔ぶれが対面している。

そして会談の見届け人であり、中立の立場として両者の間に立っているのは、現在の神官長であるボートニス・ギルビティである。名前の通り、ロウニスの血を引く人物だ。

白を基調とした神官服は、金糸の刺繍が服のそこかしこに施されている。手には杖を持っており、その先にはエメラルドグリーンの大きな玉が嵌めてあった。

女性が美ましく思うくらいの色白で、三十代くらいの女性なのだが、年相応に凛としていて、全てのパーツに美が備えられてある。

ポートニスに「どうぞお席に」と促され、二国の代表者たちが動き出す。

《聖域の間》には大きな円卓があり、ちょうど対面する形で二つの種族の王がそれぞれ腰を下ろし、その間――両者を視界に入れられる位置にポートニスも座った。

「――それでは、只今から《人魔同盟締結会談》を始めたいと思います」

彼女の声は透き通っていて、誰の耳にも抵抗なく飛び込んで来る。

座っているのは『人間族』の国王――ルドルフ・ヴァン・ストラウス・アルクレイアムと、『魔人族』の国王――イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングだけ。

他の者も席を勧められはしたが、そのまま立つことにしたようだ。恐らく何かあった時に対処し易いようにするためだろう。

ルドルフ側には、大臣デニス、ギルドマスターのジュドム・ランカース、そして五人の兵士である。その中にはイヴェアムたちをここまで案内した隊長格も混じっている。いや、五人全員が、ルドルフが信頼しうる隊長なのだろう。

イヴェアム側には、側近キリア、アクウィナス、マリオネの三名。

イヴェアムに関しては、普段着用している黒を基調とした服ではなく、儀礼用に誂えた白、黒、赤がバランスよくコーディネートされた礼服となっている。またアクセントとして頭に付けている羽のような黒の髪飾りは、彼女にとても似合っていた。

ルドルフに関しても、王族として恥ずかしくない威厳を感じさせる礼服だ。

その両者の中でジュドムは、アクウィナスに視線を向けていた。相手も同じように視線を向けていたので、必然的に見つめ合う形となる。

〝久しぶりだな、アクウィナス〟

ジュドムは声には出さず目で語る。するとアクウィナスも理解したように、

〝自業自得だ、ジュドム・ランカース〟

まるで戦友同士のようなやりとりが視線だけで行われている。二人はかつて人間と魔人が戦争をしている時に死

闘を繰り広げたことがあり、その経験から互いのことを認め合う仲なのだ。

〝こんな場所で顔を突き合わすとは思わなかったが、やはり格が違うなお前は〟

〝それはこちらも同様だ。以前相対した時も思ったが、お前は『人間族』とは思えないほど完成されている武人だ〟

二人は同時に視線を切り、目で語る会話が終了した。

（相変わらずの存在感だな。普通の野郎なら、アイツの存在を見ただけで萎縮するが……）

ジュドムは、自身の後ろに位置取っている五人の兵士たちに意識を向けた。その中には、やはりアクウィナスとマリオネの存在に気圧されている者もいる。

（そうなるのも仕方がねえ……か）

恐らく彼らは【人間国・ヴィクトリアス】の国軍の中でも選りすぐりの腕利きなのだろうが、それでもやはりアクウィナスたちと比べると見劣りしてしまう。

それはもちろん自分にも言えることで、もし仮にアクウィナスたちが暴れたとしたら、到底自分一人では抑え切れない。

《聖域の間》では武器の持ち込みが禁じられているので、純粋に身体能力のみで相対することになるのだが、それでも自分一人ではアクウィナスと対峙するだけで精一杯だろう。

だからこその五人の隊長なのだろう。しかし彼らにマリオネや魔王の側近、そして魔王自身を相手取れるかといえば疑問が残る。

実は事前に自分の信頼する腕利きの冒険者もこの中に入れようという案があったのだが、大臣であるデニスに却下され、国王ルドルフもまた、自身が信頼している者たちだけしか傍に置いておきたくないと言い、それ以上は譲歩に腕押しで聞く耳を持たなかったのだ。

今は周囲にアンテナを張って警戒をしつつ、ジュドムは会談を見守ることに徹することにした。

「この会談は双方の合意のもとに行われております。そしてその意思は、どちらも平和への繋がりとして同盟を結ぶためのもの。それは間違いありませんか？」

ポートニスが両者の代表にそれぞれ視線を動かして尋ねるように言う。迷うことなくそれに反応を返したのはイヴェアムだ。力強い頷きを返した。

ポートニスがルドルフの方へ視線を動かし、意志を確認する。彼は目を閉じていたが、沈黙が続く中、静かに瞼

を上げ、ゆっくりと噛み締めるように言葉を吐く。
「……一つお尋ねしたいが、よいかな神官長殿」
「……何でしょうか？」
皆の視線がルドルフへと注がれる。
「この《聖域の間》は、会談中は入るのも出るのも神官長殿の許可が必要になる」
「……そのように結界は構築されていますが」
会談中に無粋な連中が入ることができないようにされているのだ。ただルドルフの視線が、ボートニスの持つ杖にチラリと向かったことは気になった。
「そして入ることができる人数は神官長殿を含めて十三人が限度ですな？」
「……はぁ」
ボートニスの表情は、ルドルフの真意がまったく掴めていないといった様子だ。突然何故そのようなことを問い質してくるのか意味が分からないのだろう。
「しかも外からの情報は全く入って来ない。……まさに異空間とも呼ぶべき部屋だ」
ルドルフの言葉にジュドムは眉をしかめてしまう。
（ルドルフ……一体何を……？）
彼の真意の見えない発言に、ほぼ全員がルドルフを訝しげに見つめている。
「……いや、ただ確認しておきたかっただけ。時間を取らせてすまなかった」
「い、いえ」
彼が何のためにそのようなことを確認したのか理由は分からない。若干だが嫌な予感をジュドムは覚えてしまう。
（……ルドルフ、お前……）
信じたくはないが……と不安を抱えながらも、もう少し様子見をしようと思った。
「では、改めて双方名乗りの方をお願い致します」
「うむ。私は『人間族』を統一する統一王であり、【ヴィクトリアス】の国王――ルドルフ・ヴァン・ストラウス・アルクレイアムである」
ボートニスに促されルドルフが名乗ると、それに倣ってイヴェアムも口を開く。

「私は【魔国・ハーオス】の王、イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングと申します。この度は、我々『魔人族』の要望に応えて頂き、真に感謝致しますヴィクトリアス王」
軽く会釈する感じで頭を動かす。
「いや、こちらも同盟が成ればメリットは大いにあるのでな」
魔王が敬語で話しているのに対し、ルドルフがそうでないのに対し、不愉快そうに眉をしかめるマリオネだが、アクウィナスはそんな彼に気づいたようで、小さく首を振っている。口を出すなと念を押すかのように。
当の本人であるイヴェアムは、言葉遣いなど全く気にしていない様子のまま言う。
「そう言って頂けるとは有り難いことです」
「だが」
「……？」
「この同盟を望んでおらぬ者もおるはず」
「それは重々承知です」
「それだけ我々が互いにつけた傷は重く……深い」
「ええ、ですがそれを癒すのは復讐などではなく、平和という時間の中でしか癒せないと私は考えております。かつて我々は争ってきた。それこそ非人道的とも言われるようなことも平気で行ってきました。悲しみ、憎しみは膨らむばかりで、それがまた争いを呼びます。それではダメなのです。誰かがその争いの鎖を断たねば、いつまで経っても平和はやっては来ません！」
彼女の熱い弁論に誰もが耳を傾けていた。
（この娘……これが今の魔王か）
ジュドムは彼女の理想を聞き、彼女が本気でそう言っているということを感じた。そもそも敵地である人間の大陸に、これだけの人数で来ることは自殺行為に近い。しかしそれでも会談に赴き、同盟を成したいと真に思っているからこそ、こうして敵国の代表と顔を合わせているのだ。
自分たちに圧倒的に不利な条件のもと、下手をすれば甘い戯言ばかりを並べるガキと思われ反感を買い、争いになるかもしれないこの状況で、微塵も偽りない言葉を放てるのは、彼女自身が本気でそう思っているからだろう。
（……ん？　この娘どこかで……？）

ジュドムはイヴェアムを見て、既視感のようなものを覚える。どこかで会っているような感覚が脳裏に過ぎった。
そして――。
（――思い出した！　おいおいおいおい、まさかあん時の嬢ちゃんが魔王かよ？）
ハッとなって目を見開きながら再度彼女を確認する。
（……間違いねえ。……そうか、あん時の嬢ちゃんが……立派になったもんだな）
向こうはまだ気づいてなさそうだが、間違いなく過去に会った娘だということを確信した。そして大きく立派になったことに、何となく嬉しさが込み上げていく。
あれは十年以上前に、ジュドムが【ハーオス】へ潜入した時のこと。そこでアクウィナスに護衛されている一人の少女を見たことがあった。それがイヴェアムだったのだ。
「同盟を成したところで必ず歪みが出てくる。それをどうお考えかな？」
ルドルフの問いにイヴェアムは動揺もせずに答える。
「確かに、同盟がここで成立したとしても、それに納得していない者たちは必ず不満を持ちます。それに『獣人族』のこともあります。しかしこのまま争い合っていけば、この【イデア】は更に傷つき、人の住む場所がなくなってしまう。それは実際に過去に起きたことであり、あなた方も理解されているかと思います」
「……」
「それではいけないと思った先人たちは、手と手を取り合い繁栄していって、今の世界を形作っていった。いわば我々がこうしてこの場に立てているのは、我々の祖先たちが苦労して間違いを正し、世界を築いてくださった結果です。子孫の我々が、それを壊してもいいものなのでしょうか？」
皆が黙って彼女の言葉に耳を傾けているが、ルドルフは目を閉じており、大臣デニスに至っては難しい表情をしていた。いや、デニスはそれこそ口を開けば、「くだらないことを」と言うような様子でイヴェアムを見つめている。
「平和は簡単には作れないでしょう。しかし我々が手を取り合えば、それが礎にはなります。問題も多くあるでしょうが、必ずいつか誰もが笑って過ごせる世界になるはずです！」
穢れなき美しい理想。誰もが甘美に思うその理想は、確かに実現すれば平和そのものだ。
（違う……急ぎ過ぎだ魔王ちゃん）
ジュドムは渋い表情でイヴェアムを見つめる。

（確かに素晴らしい理想ではある。しかし少し……言葉にし過ぎてらぁ）
そう、確かに彼女の言う理想は素晴らしい。だが彼女はルドルフの言葉に対して、ハッキリと答えていないのだ。同盟によって生まれる歪み。それにどう対処していくかという問題に対し、彼女はただ己の理想を言葉に並べ立てただけ。
言うなれば、内乱が起きるかもしれないという問題に対し、「大丈夫、何とかなる」と言って、根拠のない自信を振りかざしているに過ぎない。
ジュドムもこの会談は望むところではあった。無論同盟にも賛成だ。しかしそのために生じる問題に無頓着なわけではない。だからこそ、その問題を――同盟の先にある近しい未来について対談する場が欲しかったのだ。
まずは互いのことを良く知る。信頼というのはそこから徐々に時間を掛けて生まれてくる。だが彼女には同盟の綺麗な部分しか見えていない。ハッキリ言って危ういのだ。
理想だけ聞けば誰もが飛びつくような内容かもしれないが、相手は一国の代表者であり、種族の命運が肩にかかっている者。理想だけが先走っている彼女を見て、ジュドムも不安に思えてくる。
（急ぐな魔王ちゃん。時間はあるんだ。同盟に急ぎは禁物だ。まずは互いを知り、一つ一つ問題を解決していくことが先決だ。今日はあくまでもそういう会談なんだ）
まるで自分の娘に語りかけるような言葉を思い浮かべるジュドム。彼女を見ていると、つい導いてやりたくなるような気がしてくる。甘いが、不思議と惹かれるものを持つ彼女は、まだ若くても魔王なのだと理解させられた。

※

「――――魔王イヴェアム殿」
しばらくの沈黙の末、不意にルドルフが呟くように言葉にした。
「な、何でしょうか？」
「貴公は……大切な者を失ったことがあるかな？」
「……は？」
「見たところ、貴公は純粋だ。先代の魔王とは確かご兄妹だったらしいが、その考え方は似ても似つかぬもの」

一体彼は何を言いたいのだろうか、とイヴェアムは不思議に思った。

「素晴らしい考えをお持ちだ。本当に真っ白で……綺麗な……いや、綺麗過ぎる理想だ」

瞬間デニスの喉からゴクリという音が聞こえる。緊張しているのか。言葉の端々に込められているルドルフの覇気に当てられているのかもしれない。

「もう一度聞こう。貴公は大切な者を失ったことがあるか？」

「……はい。『魔人族』全てが私の家族です。死んでいった者たちはたくさんおります」

「……なるほど。それではもしこれから先、そちら側の家族が誰かに殺されたとして、貴公は復讐など無意味。話し合いで解決できると……その者に笑って語りかけることができると？　平和のために、涙を呑んで憎き仇と手を取り合えと諭せると？」

ルドルフは静かに目を開け、鋭い視線を彼女にぶつける。彼女の一挙手一投足を決して逃さないという意思を感じた。

イヴェアムは、彼の質問に少し顔を曇らせはしたが、ハッキリと気持ちを言葉にする。

「……笑えるかどうかは分かりません。いえ、恐らく笑うことはできないかもしれません。確かに憎しみと向き合うのは辛いでしょうが……ですが、これ以上争いはたくさんなのです！　憎しみに支配されて争えば、また多くの血が流れてしまいます！　家族は誰にも殺させません！　この魔王イヴェアムの名に懸けて、復讐を生み出すような行為は止めてみせます！」

しばらく互いを睨む合う形で沈黙が続く。そして最初に口火を切ったのはルドルフだ。

「どうやら貴公はまだまだ若いようだ」

「それは重々承知です！　至らない点があるのも認めます！　しかし――」

「この会談」

「……は？」

ルドルフが彼女の言葉を遮るようにして言う。

「この会談、『獣人族』なら必ず手を出して止めようとしてくるはず。貴公らは、彼らの動向を把握しておるのかな？」

「私の部下には情報収集に長けた優秀な者がおります。その者に『獣人族』の動向を探らせました」

「ほう、それで？」

「ここ数か月、『獣人族』に真実を気取られないための情報操作をしていたことは、あなたもご存知のはずでしょう」

「おお、そう言えばそのようなこともしたな」

実際、両国の権力者を通じて、情報交換を何度も行った。それは、イヴェアムとキリアで作り上げた、『獣人族』を騙すための工作。

会談場所、日時など、偽りの情報をわざと漏れるようにしたのだ。

無論獣人の密偵も、その情報を鵜呑みにはせずに、彼ら自身の手で調査をしたはずだ。

それでも数日前に、その情報を握った『獣人族』が、軍を連れて偽りの会談の場所に赴いたという報せが、テッケイルから届いたとキリアから報告を受けた。その中には獣王の姿も発見されていたとのことで、偽情報に踊らされていることは明らかだ。

「今頃、『獣人族』はこちらが用意した偽りの会談場所を襲撃しようとしているはずです。ですがそこには姿は似ていても、全く別の我々がいるだけです」

「確か精巧な人形作りに特化したものが、その偽物を作ったと聞くが……それほど似ているのかな？」

「もちろんです。実際に触れて確かめなければ、見た目では判断できません」

「ほほう、優秀な部下をお持ちだ」

ルドルフの言葉に誇らしげな気分になるイヴェアム。

何故なら人形を用意したのは、他ならぬ自分が最も信を置くキリアなのだから。

（ルドルフ王の言う通り、私には頼もしい家族がいる）

彼女がいるからこそ、獣人たちの目を欺くことができたのだ。

チラリと傍に立つキリアに視線を向けると、キリアも安堵するように僅かに頷を引いた。

「ならば、全てに問題はないと言うのかな？」

「その通りです、ヴィクトリアス王」

「『獣人族』にしても、この会談にしても、そして――我々『人間族』にしてもかな？」

「……？　何を仰っているのですか？」

突然含みのある言い方で喋る彼に違和感を覚える。

すると彼がサッと手を上げた。直後、それが合図だと言わんばかりに、五人の隊長の一人がその場から素早く動く。

反射的にアクウィナスたちは、イヴェアムを守るために最大に警戒網を張り巡らせ身構える。だが隊長の狙いは――イヴェアムではなかった。

「な、何をっ!?」

驚いたことに、狙われたのは見届け人であるボートニス。いや、正確にいえば、ボートニスの持つ〝杖〟だった。あまりに素早い動きと、突然のことで虚を突かれたボートニスは、成す術もなく杖を奪われてしまう。その光景をほとんどの者が呆気にとられて見つめていた。

「壊せっ！」

隊長にそう言い放ったのはルドルフだ。隊長は小さく頷くと杖を振り上げ、

「お、お止めなさいっ！」

ボートニスの制止の言葉も虚しく、杖を地面に叩きつけた。衝撃により杖の先端に嵌まっていた宝石のような玉は粉々になり周囲に散らばってしまう。

「……よくやった」

ルドルフの言葉に、隊長は「はっ！」とだけ言うと、元の位置まで素早く戻った。

同じように驚愕のまま身を固めていたジュドムもさすがに声を荒らげる。

「おいルドルフッ！　お前何を考えて――」

「そうです！　その杖がどういうものか、お分かりではないのですか！」

ボートニスが続けて言うと、ルドルフは僅かにも焦りなど見せず冷淡に答える。

「知っておる。だから破壊した」

「なっ！」

「ルドルフ……お、お前まさか……！」

愕然としているボートニスと、わなわなと身体を震わせるジュドムを見て、ようやくイヴェアムも参加する。

「い、一体どういうことですか？　これは何のおつもりなのですか、ヴィクトリアス王よ！」

『魔人族』たちが敵意を込めた視線で、いまだに笑みを崩さないルドルフを睨む。

「これで二十四時間、ここは外界と完全に隔離された世界になった」

「隔離された……世界？」

イヴェアムは言葉を繰り返したが、その言葉に答えたのはジュドムだった。

「この《聖域の間》は、古代の勇者がその身を捧げたままにその場所であり、聖なる力が最も強力に施されているとこなんだよ」

「ジュドム……」

アクウィナスがそう呟くと、イヴェアムはハッとなってジュドムを見つめる。

（そ、そうか!?　どこかで見たと思えば、彼があの時の……!?）

先程まで、一体彼は何者なのか分からなかった。勇者を自身の傍から手放してまで、護衛につけるのだからかなり有能な人物だと思っていたが。

だがそこへようやく過去に【ハーオス】で一度出会ったことを思い出し、ここにいても不思議ではない存在だと納得を得た。

「あなたが……ジュドム・ランカース？」

「おう、そうだ。しかしまあ、デカくなったなぁ、あん時の嬢ちゃんが、まさか魔王ちゃんになってるとは時の流れは早ぇな。そう思わねえか、アクウィナス？」

「フッ、全くだ。……しかし陛下、今はそのようなことよりも」

と、アクウィナスの窘めによりハッと我に返って、イヴェアムはジュドムに話の続きを聞くことに。

「そ、そうだな、すまない。ジュドム殿、話の続きをお願いできますか？」

「ああ。この場所、《聖域の間》は強過ぎる勇者の力のせいで、一度入ると、中に入ったものを守ろうと自動的に強固な結界を張っちまうんだ」

「……良いことなのでは？」

「確かにそこまで聞けば、勇者の力に守られているってことだし、ここはどこよりも安全な場所なのは違えねえ。だがな、一度入ると二十四時間は出られなくなっちまうんだよ」

「なっ!?　それは本当ですか？」

驚愕に歪められた顔をジュドムに向けて、それを見た彼も苦笑を浮かべてしまう。

「ああ、そうだよな、ボートニス？」
「ええ、そうよ、ジュドム」
親しげに互いの名を呼び合うやり取りを見て、知り合い同士なのだろうと誰もが感じた。
「二十四時間――絶対防壁として、この部屋は機能してしまうのです。本来なら、この杖……」
そう言いながら、ボートニスは地面に叩きつけられた杖を拾い上げて皆に見せる。
「この杖の先に玉がありましたよね？」
彼女の問いにイヴェアムは地面に散らばった玉の欠片を見て頷きを返す。
「あの玉は《勇者の盾》に嵌められていたものでした。言ってみれば《勇者の遺物》ですね。その玉のお陰で、ここに入っても杖を持つ私と一緒なら、この場から自由に出ることができました。たとえ二十四時間経たなくても、です」
「そ、それでは……」
「……はい、二十四時間後には、ほんの僅かの間だけ結界が緩みます。そうすれば出られるのですが……今は……」
玉が壊れてしまったので、という言葉を呑み込んで顔を俯かせるボートニス。
「おいルドルフ、最初からこれを狙ってやがったな？　そういやお前、会談が始まって奇妙なことばっかボートニスに確認してたな。あれはこのことを示唆してたってわけだ」
怒気を込めたジュドムの言葉。
確かにルドルフは、《聖域の間》の仕組みを事細かにボートニスに質問していた。イヴェアムも奇妙だとは思っていたが、あれはこの状況が作れることを確認していたのだ。
「こんなとこに俺たちを閉じ込めて何を企んでるとは聞かねえ。ルドルフ、お前――やりやがったな？」
ジュドムの言葉を受け、すぐに言葉を発したのはイヴェアムだ。
「やりやがった？　ジュドム殿、一体ヴィクトリアス王は何を……？」
「陛下、少しは頭を働かせてください」
「む、ならマリオネは分かるのか？」
マリオネに叱られて、素直に聞き返すイヴェアム。
「当然です。恐らく奴は――いえ、奴らは……我々を裏切ったのです」

「なっ!?」
バッと顔を勢いよく振り、マリオネからルドルフへと向ける。
するとルドルフはククと喉を鳴らし、
「ははは、裏切るとはよく言う。それは基本的にはそちらの専売特許ではないかね？」
「くっ！　ヴィクトリアス王！　あなたは何故このようなことを！　そもそも我々を閉じ込めて一体何をっ！」
「……まだ分からぬか、我が国の仇敵よ」
「――っ!?」
ルドルフの冷たく昏い瞳を見て、イヴェアムはゾッとするものを感じた。彼の唇がゆっくりと動き出し、衝撃的発言がイヴェアムの耳朶を打つ。
「――戦争だよ」

※

――【ムーティヒの橋】。
会談が行われている最中、《魔王直属護衛隊》の《序列五位》――シュブラーズと、《序列六位》――グレイアルド、それに加えてイーラオーラという巨漢魔人が橋の防衛の任に就いている。
ただシュブラーズとグレイアルドは、イーラオーラと違って橋の中央ではなく、人間界と橋の境界線のところまでやって来ていた。同時にシュブラーズの部下やグレイアルドの部下も少数だが同じ場所で警戒している。そして残りの部隊は、橋の向こうの魔界で待機中だ。
この布陣もすべて、人間がもし何か起こそうとしても、未然に防ぐためである。
「はぁ～、今頃会談かぁ～、なあ姐さん、ダルくね？」
浅黒い肌を宿した青年グレイアルドは、めんどくさそうに地面に寝っ転がりながら空を見上げている。声を掛けられたシュブラーズは、その豊満過ぎる胸を、腕を組んで支えるようにしながら彼を見下ろす。
「もう、少しは真面目にしたらどうなの？」
言うことを聞かない子供を窘めるように注意するが、当の本人はニヤソとする。

「おお～、この眺め良いなぁ。姐さん、できればその場で上半身だけを揺らしてぶふっ！」
シュブラーズに顔を踏まれてグレイアルドは沈黙する。
「ま～ったくぅ、まだまだ子供のくせに、大人に興味を持つのはまだ早いわよぉ」
「俺はこう見えても五十を越えてるっちゅうの！」
涙目で顔を擦りながら怒鳴るグレイアルドだが、シュブラーズは相手にせず周囲にいる『人間族』を見つめた。
その視線が四人の勇者へと向く。
（ふぅん、あれが勇者なのねぇ。あら、一人いい男がいるじゃない！）
妖艶に微笑みながら、誘惑するように勇者の一人――吉山大志に向かってウインクを送った。しかし彼は無反応。
その場にジッと立ってこちらを見つめているだけ。
別に本気で口説こうとしているわけではない。確かに顔はイケているが、それだけ。まだまだ子供っぽさを漂わす少年なので、シュブラーズの好みではない。どんな反応をするか確かめてみたかったのだ。
しかしあまりにも無反応……それが少しシュブラーズは気になった。
（……つまんない男ねぇ。まるで人形みたぁい）
そんなシュブラーズの傍にイーラオーラがやって来る。手には常人では振ることもできないような巨大な槍が握られていた。
「あらイーラオーラ、あなたは橋の中央にいるんじゃなかったのぉ？」
「そうだぜ、ここは俺らに任せてお前はさっさと中央に戻りな。いちいちダルいこと言わせんじゃねえよデカブツ」
グレイアルドの物言いに、イーラオーラは不愉快げに睨みつけた。
「ああ？　何だよその目は？」
しばらく睨み合っていた両者だが、イーラオーラの方が先に視線を外す。
「ちっ、《魔王直属護衛隊》落ちなんだし大人しくしてろっての、ああダルい」
「こらグレイアルド、言い過ぎよぉ。同じ仲間なんだからぁ」
「へいへ～い。姐さんはお優しいこって。けどなぁ、俺はな～んかそいつ嫌いなんだわぁ」
「もう……イーラオーラはここを常に守ってくれているのよぉ。感謝しなさいな」
「やなこった」

グレイアルドは、居心地が悪くなったと言い背中を向けてどこかに行こうとする。それをジッと見つめているイーラオーラ。
シュブラーズはそんな二人をやれやれといった様子で肩を竦めている。
そのままグレイアルドがその場を離れようとした瞬間――ズシュッッ！
グレイアルドが足を止めた。いや、止めざるを得なかったのだろう。
口からは真っ赤な液体が吐き出されている。彼の胸元にシュブラーズが視線を向ける。
そこから――大きな槍の先端が胸を突き破っていたのだ。
「――がはぁっ!?」
大量の血を吐くグレイアルドだが、皮肉にも槍に支えられて膝を屈することができない。
「っ……ぐ……い、一体……何……が……っ!?」
激痛に顔を歪めながら背後を確認するグレイアルドが、槍を手にしている者の姿を見て愕然とする。
そこには、楽しそうに口角を上げたイーラオーラがいたのだ。
「よぉ坊や、《魔王直属護衛隊》落ちの下剋上はどんな気持ちだぁ？」
「てっ……めぇ……っ」
ブシュッっと槍を引っこ抜かれたグレイアルドが、ようやく地面に膝をつける。
「グレイアルドッ！」
それまであまりに唐突な出来事に思考を止めていたシュブラーズは彼の名を叫んだ。
（な、何でなの!?　どうしてイーラオーラがグレイアルドを!?）
確かに彼らの仲は悪いが、それでも同志なのだ。まさかイーラオーラがグレイアルドを殺そうとするなんて考えもしなかった。
グレイアルドは完全に無防備だったためか、急所を貫かれて致命傷だ。今はもう地面に倒れて微かに肩が上下しているだけ。
「ダハハハハハ！　《魔王直属護衛隊・序列六位》グレイアルド、ここに散る！　いい様だなオイ！　ダハハハハ！」
「イーラオーラッ！　アンタ何をしてるのか分かってるのっ！」

うるさそうに顔をしかめるイーラオーラが、シュブラーズを見てせせら笑う。
「何を言ってる？　てめえらはここで死ぬ。それがシナリオなんだぜ？」
「シナリオ……？　何を言って……」
「オラァ！　シナリオ通り動けてめえらぁ！」
イーラオーラの叫びを皮切りに、『人間族』の兵士たちが一斉に動き始め、シュブラーズたちの部下に刃を向ける。
ただイーラオーラの部下にだけは手を出さない。それどころかイーラオーラの部下は、同族である『魔人族』に反旗を翻しているのだ。
「ちょっと……一体何……っ」
自身の部下たちが攻められている光景を、ただキョロキョロと見回しているだけのシュブラーズ。明らかに動揺してしまっていた。
（……え？）
視界に入ったのは、先程確認していた勇者たち。このような騒ぎなのに、瞬き……いや、身動き一つすらせずジッと佇んだまま。そこで初めて感づくことができた。
（ま、まさか――本当に人形？）
人間にしか思えない外見だが、彼らの態度に人らしさはなかった。
「ダハハ、後はてめえだけだなぁ、シュブラーズ？」
「くっ！　アンタ、まさか裏切るつもりかしら？」
「裏切る？　それは誰を指して言ってんだぁ？」
「え？」
「俺が忠誠を誓ってるのはただ一人。それはイヴェアムみてえな乳臭えガキじゃねえ」
「なっ！」
とんでもないことを口にしたイーラオーラ。
「それにいつまでも俺がてめえらより下だと思うなよぉ？」
イーラオーラの全身から信じられないほどの魔力が迸った。ビリビリと殺気とともに空気を震わせる。
（こ、これは……！　私たち《魔王直属護衛隊》よりも遥かに……っ！）

死を予感させるような圧倒的な力がイーラオーラから伝わってきた。
さらに驚くことにイーラオーラの身体が、まるで溶岩のように真っ赤に染められていく。
「イーラオーラ……アンタ……いつの間にそんな力……！」
「ふん、あの方が下さった力だぁ！　まだ完全に使いこなせちゃいねえが、それでもてめえらの三、四倍は強えんじゃねえかぁ？　ダ――ッハッハッハッハ！」
イーラオーラの変わり様に、ゴクリと息を呑むシュブラーズ。他の者たちも一様に驚愕してしまっている。
「お逃げください、シュブラーズ様っ！」
「あ、あなたたちっ！」
部下たちがシュブラーズの前に立つ。その身体は恐怖で震えながらも、必死に剣や槍を構えてシュブラーズを守ろうとしていた。
「ダハハ、上司を思う部下……泣かせるねぇ。だけどよぉ……」
イーラオーラが手に持った槍を勢いよく横薙ぎに一閃――。空気を切るような音が耳に届いたかと思えば……。
「……え？」
シュブラーズの目の前にあったのは、身体を真っ二つに斬られ、絶命しているとハッキリ認識できる部下たちの変わり果てた姿だった。
「あ……あ……あぁぁぁぁぁぁっ！」
シュブラーズは怒りに身を任せ地面を蹴りつけ、鋭い爪を伸ばしイーラオーラに攻撃をしようと向かう。そして素早い動きで瞬時に間を詰めて、その爪でイーラオーラの腹を貫いた――はずだった。
「ん～、少しだけチクリとしたなぁ」
爪は確かに彼の皮膚を突き破っていたが、鍛えられて膨れ上がった筋肉に、画鋲を刺したほどの小さな傷しか生むことはできなかった。血液すらも流れ出ていない様子。
イーラオーラが懐で動きを止めてしまっているシュブラーズを、狂気じみたその目で睨みつける。ゾクッと背中に寒気が走り、このままここにいれば死に直結するとシュブラーズは認識できた。
「――死にな、《序列五位》！」
まるで人間一人分ほどに、突然膨れ上がった剛腕が、空気を切り裂きながらシュブラーズめがけて飛んでくる。

時間がギュッと凝縮されたような感覚があり――ただただ迫ってくる拳を見つめることしかできなかった。
避けなければいけないのだが、彼が放つ威圧感と恐怖に圧倒されて動けずにいたのだ。
そして――――自分は完全に潰された。
――と、シュブラーズは覚悟したのだが、次の瞬間にはその場から吹き飛んでいた。ただ不思議なことに、身体に痛みはない。
何故？　その理由を、自らを覆っている温かいものの存在と同時に悟った。
地面に倒れはしたが、自分が誰かに助けてもらったことに気がついたのである。
「――――グレイアルドッ！」
イーラオーラの攻撃から身を挺して庇ってくれたのは、グレイアルドだった。

※

グレイアルドは、自分の間一髪の行為を自分で褒めてやりたい気分だった。
（へへ……間に合って良かったぜ）
何とかシュブラーズを助けることができたのは嬉しかった。
しかしその代償として、イーラオーラの苛烈な一撃を受けてしまい、左腕が弾き飛ばされていたのだ。ただでさえ胸を槍で貫かれているというのに、その上、攻撃を受けてしまえば文字通り一溜まりもない。
案の定、全身血塗れだった。先程の一撃で体中の骨は見事に粉砕されている。内臓も潰されているだろう。そして血も流し過ぎている。地面が真っ赤に染まっていた。
（やれやれ……まともに受けたのは左腕だけだってのに、風圧でこの様かよぉ）
それだけ今のイーラオーラの一撃に込められた威力が大きかった。これからその力を持った存在と戦う必要がある。
橋からかなり離れた場所まで吹き飛ばされたようだが、海方面に落ちた方がまだ生存率が高かったかもしれない。
「グレイアルド！　グレイアルドッ、しっかりしなさいっ！」
シュブラーズに覆い被さっている状態で、身体も瀕死なのに、彼女から伝わってくる温もりや柔らかさ、それに

……。
（いいニオイだなぁ……）
場違いな感情まで浮き出てくる。別に命を賭してまで、彼女を助けるような仲でもない。同じ魔王を守る同志。それだけの間柄だろう。確かに彼女は好みのタイプではあるが。
（へへ……けどなぁ……女が死ぬのはぁ……ダリィんだよぉ）
別段フェミニストというわけではないが、目の前で女が殺されると思った瞬間、身体が動いてしまっていた。その結果、死に瀕してしまっているが、不思議と悪い気分じゃない。
「姐……さん……っ、はぁはぁはぁ……にげ……ろ……っ」
「グレイアルドッ！」
シュブラーズが優しく仰向けに寝かせてくれた。
イーラオーラの一撃でかなり吹き飛んだせいか、追ってくるまで少し時間がある。ただ彼がゆっくりとグレイアルドたちに近づいて来るその一歩一歩が、まるで処刑台で処刑を待っている罪人のような気持ちにさせる。
「は……やく……このこと……陛下に……」

「でもアンタがっ！」
「この……ままじゃ……大死にしちゃ……まう。……頼むよ……」
「そんな……グレイアルド……ッ」
彼女の頬からツーっと涙が流れ、グレイアルドの頬に落ちた。
妙だ。本当に妙だが、その涙から温かさが全身へと伝わっていく。不思議と痛みが引いていくような感覚だ。
「へへ……俺のために……泣いてくれる……とは……嬉しい……ねえ」
「……ばか」
「はは……いいか……っ、姐さん……うっぐ！」
グググと身体を起こしながら、「げほぉっ！」と血を吐くが、それでも必死に立ち上がった。本来なら痛みでショック死してもおかしくはないのだが、今は何故か意識までハッキリしている。
（……女の涙のお陰ってか。はは、俺ってば何ダいこと考えてんだ）
段々と近づいてくる処刑人を見つめて――決意を固めた。
「行けっ！　俺たちの命を……ムダに……すんなぁ！」
「グレイアルド……くぅっ！」
シュブラーズは後ろ髪を引かれるような感じで、下唇を噛み締めながらその場から立ち去って行った。
（そうだ……それでいい）
そしてあとは……。
「ん？　おやおやぁ、そんな身体でまだ立つのかよぉ」
「けっ、ダルいけどよぉ……女は……守る性質で……ね」
もう本当に自分が立っているのか分からないほど身体から感覚が失われている。
「……放っておいても死にそうだが、てめえには俺の席を取られた恨みがあるからなぁ」
「はは……そんなダルいことに……まだ拘ってんの……か？　ガキか……てめえ」
その言葉にイーラオーラの殺気は更に膨れ上がる。今の自分には暴虐なまでの力。
まるで大津波に呑みこまれる瞬間のようだ。
だがグレイアルドは――笑う。

（……姐さん、無事に逃げ切れたらいいけどな）
イーラオーラの拳が目の前に迫ってくる。
（バイバイ……姐さん。バイバイ……みんな）
グレイアルドは静かに目を閉じた。直後、グレイアルドの身体が光り輝く。
「むぅっ!?」
イーラオーラが目を見張るのと同時に、周囲を巻き込んだ大爆発が起きた――。

※

――魔力爆発。魔力コントロールによる現象のこと。
魔力を高密度に圧縮させて一気に解放させれば、まるで大気を圧縮して破裂させた時のような爆発を起こすことが可能。無論操作を誤れば自爆してしまう恐ろしい技術でもある。
今回グレイアルドが行使したのは、自身を媒介として魔力を全て圧縮させ、それを瞬時に解放したもの。ただ魔力だけでなく、自らの生命力も全て注ぎ込んでいたようで、それはもう甚大な爆発力を生んだ。
【ムーティヒの橋】周辺では、グレイアルドの自爆により、大きなクレーターが出来上がっていた。半径五十メートルはあろうかというものだ。
イーラオーラの一撃でグレイアルドが吹き飛ばされていなければ、間違いなく橋ごと粉々に吹き飛んでいただろう。ただその余波は凄まじく、橋もところどころにヒビが入っており、周囲で戦っていた者たちや木々などは、ほとんど海に吹き飛ばされてしまった。
そして爆発の中心にいたイーラオーラはというと。
「痛ぅ……っ、あのクソ野郎がぁ、魔力爆発なんて起こしやがって」
無事だった。しかしさすがに無傷ではなかったようで、左腕が付け根から存在しない。奇しくも死ぬ前のグレイアルドと同様の姿になってしまっていた。
また全身が傷だらけで、立っているのもなかなかに辛そうではある。だがあの爆発の中で生きているだけでも彼の異常さが際立つだろう。

「イーラオーラ様！　ご無事ですか！」
海に吹き飛ばされていなかったイーラオーラの部下らしき男がやって来た。
「ああ、他の連中はどうしたぁ？」
「ほぼ海へ。残っているのは我が隊だけであります！」
「ほほう、まあ予定とは少し違ったが一応任務完了か」
「逃げたシュブラーズはどう致しましょう！」
「放っておけ。奴が到着する頃にはもう全て終わってる。いや、始まってる……か？」
意味深にほくそ笑みながら言葉を発する。
「この身体も一所で休ませる必要があるしな。他の奴らがここに駆けつける前に俺は消える。てめえらはシナリオ通りに動け」
部下は「はっ！」と返事をし、その場を離れて行った。
「ちっ、ああは言ったが、この身体も治るのに時間かかりそうだな」
忌々しそうにクレーターの中心を見下ろす。
この状況を生み出した存在を頭の中に浮かべながら、
「あの世で悔しがれ、《魔王直属護衛隊》がぁ」
イーラオーラは地面に唾を吐きかけて言うと、その場を去った。

※

――その頃、【魔国・ハーオス】でも異常事態が起きていた。
突然鎧を纏った者たちが数多く国に押し入って来て、ところ構わず攻撃してきたのだ。そのため建物は傷つき、国民たちも突然の襲撃に戸惑い、必死になって逃げ回っていた。
国の防衛を任されている兵士たちが彼らの撃退に赴くが、そのあまりの数と強さ、そして何より――。
「な、何で奴らがここにっ!?」
「い、一体どうやってこれだけの数が!?」

兵士たちが驚くのも無理はなかった。自分たちの国を襲っているのは、明らかに統率された軍隊。しかもそれは『獣人族』だったのだから。
獣人界と魔界を繋ぐ橋は、魔王イヴェアムが破壊したことで、獣人が魔界へと渡る術を奪ったはずだった。
確かに屈強な者なら、危険度の高い海を渡ってここまで辿り着くことは可能だろう。しかしこれだけの数がこの場にいることは、ありえないと『魔人族』たちは思っている。
一体どうやってここまで来ることができたのか分からず皆が困惑していた。
中央の魔王城を囲むようにして広がっている【ハーオス】は、大きく分けて西地区、南地区、東地区、北地区、中央地区とある。
そして今、その中の西地区では――。
「――さあ、暴れるニャ」
黒豹を擬人化したような獣人が、その鋭い目から獰猛な光を放ち、まるで獲物を見るようにして敵を定めていく。
舌舐めずりして微笑むその表情は、見るものを恐怖させるほどの不気味さを宿していた。
「おいおいクロウチ、俺様の分は残しとけよ？」
黒豹獣人のことをクロウチと呼ぶのは、【獣王国・パシオン】の第二王子――レニオン・キングだ。彼もその肉食獣ばりの笑みを浮かべていた。元々吊り上がっている目つきがさらに凄みを増している。
「了解ですニャ。それじゃ半分こってことでどうですかニャ？」
「いいや、7：3で俺様7だ」
「むぅ……レニオン様ずるいニャ。僕だっていっぱい殺りたいニャ～！」
不機嫌そうに膨れる姿をしている。それが普通の女性なら可愛いと評されるだろうが、クロウチがすると発言と相まって不気味さが増しただけ。
「あ～あ～あ、分かった分かった。ならどっちがどんだけ殺すか、勝負といくか？」
「フニャ！　それ乗ったニャ！　勝った方が、食事を奢るってのはどうニャ？」
「ククク……いいぜぇ」
二人同時に、目前で身構えている兵士たちに殺気をぶつけた。その殺気を受けた者たちは身体を震わせる。格の違う相手に死を覚悟して――。

一方東地区では、大量のモンスターが暴れていた。
モンスターたちは一度死んでいて、いわゆるゾンビ化している。
普段のモンスターと違い、肌は腐蝕し異臭を放っているが、痛みも感じないように作られているため、相手をするには厄介極まりない存在となっているのだ。
中にはSランクやSSランクが混じっていたりするので、魔力に長けた『魔人族』でも、おいそれとは仕留めることができず苦戦していた。
また相手は一匹などではなく、数えるのが億劫になるほどの数。それが東地区から他の地区へとどんどん侵攻して、容赦なく周囲のものを破壊していっている。
魔人の兵士たちは自分たちの攻撃で建物を破壊しないようにしているのか、かなり消極的な攻撃になってしまっていた。
そんな中、モンスターが迫る広場において、親と逸れたのか魔人の子供が一人で、尻餅をつきながら泣き叫んでいる。
兵士たちは口々に「しまった！」や「助ければ！」などと叫んでいたが、子供との距離があり過ぎたため手が届かず、モンスターの凶刃が子供に伸びた瞬間――ドゴォンッ！
突然モンスターの上空から人影が降ってきて、モンスターは背中に大打撃を受けさば折り状態になり悶絶した。
人影はモンスターの尻尾を掴むと、勢いよくぶん投げて子供を危機から救った。
「いいかお前ら！　よく聞くのだ！　手は抜くな！　全力で排除しろっ！」
兵士たちに檄を飛ばすのは、《魔王直属護衛隊・序列四位》に位置するオーノウスであった。兵士たちが頼もしいオーノウスの存在に顔を明るくする。
「このままでは国が破壊される！　多少の損害は気にするな！　今は『魔人族』の誇りにかけて全力で向かい撃て！　分かったかぁ！」
オーノウスの低い声が気持ち良いほどに周囲に轟く。ビリビリと大気を震わせるようなその叫びを聞き、皆の士気も一気に上がった。

「うおおお

グもなしに転移できる力や魔具の話も聞いたことがない）

事実、オーノウスも魔具ではないが、魔界各地に軍が設置している転移魔法陣があり、それを利用しながら素早く国へと戻って来た。ただ魔法陣にしても、使うためには多大な魔力が必要になる上、転移できる人数も限られているので多用することは難しい。

その魔法陣にもイーラオーラの部下たちが常駐していて、敵に使わせるわけがない。仮にそれを使うにも、【ムーティヒの指】を渡る必要があるのだ。

ならこの状況はどう説明できるのだろうか。

いくら考えても答えが出てこない。分かっているのは、今まさに国が危機に陥っているということだけ。

「とにかく一刻も早く事態を収拾せねば！」

今、主だった戦力は国を離れている。この場にいる者たちの中で、自身の動きが一番重要になると判断し、向かうべき場所を見定めることに。

これは――戦争である。

ならば戦争を指揮している指揮官が必ずどこかにいる。その指揮官を叩けば、少なくとも相手の士気はかなり下がるはず。地区それぞれに指揮官がいるだろう。最初に一番厄介そうなのを止めなければならない。

そう考え冷静に場を観察していく。

「――あの者たちは!?」

目に映った光景に驚愕の表情を浮かべながらも、向かうべき場所を発見したことでオーノウスの目の奥が光った。

※

勇者四人は今、目の前で起こっている光景に言葉を失っていた。

逃げ回る『魔人族』を、味方の兵士たちが背後から剣でバッサリと斬り伏せる。また泣いて叫ぶ女性に笑いながらトドメを刺す者。獣人の腕力で頭を殴られ陥没する頭蓋。両腕を斬られて、それでも尚助かるために逃げる者を追いかけて首を刈る。

鮮血が舞っていた。周囲はもう煙と血のニオイしかしない。そこかしこに生首や千切れた肉体の一部などが転がり、どんどんと死体が重なっていく。

この地獄絵図のような現況に、勇者の一人である青山大志が呟くように口を開く。

「な……何だこれ……？　や、やり過ぎじゃないのか？」

現実離れした光景に、頬は引き攣り顔色は真っ青である。他の三人も同様の思いなのか、呆然と立ち尽くしていた。

「――何をしているのですっ！　早く敵をっ！」

勇者を奮い立たせようとするのは、何度か模擬戦闘訓練などで手合わせしたことのある自軍の兵士だった。子供が好きで他人に優しく、笑顔が眩しい好青年であると四人は同様の印象を受けていたのだ。だがそんな彼の鎧はもうすでに返り血で汚れており、何人もその手にかけたことは一目瞭然だった。

「え……だってこれ……死んでるん……だろ？　あ、相手はモンスターじゃないんだぞ？」

胸に込み上げてくる気持ち悪さを呑み込むように、必死に言葉を絞り出す大志。

「当然です！　これは戦争なのですよ！　勇者様がたにはこの北地区をお任せします！　いいですか、殺さなければ逆に殺されますよ！　たとえ相手が子供だろうが容赦はしないでください！」

あれだけ子供に優しかった者が、血走った目をしながら子供を殺せと言う。本当に自分たちが知っている人物なのかどうかさえ疑ってしまうほどの変わり様。

自身の持ち場に戻っていく兵士を、四人が唖然としたまま見送っていると、『魔人族』であろう子供が、魔法で起こった爆発の余波に巻き込まれて、近くまで飛ばされてきた。

身体はボロボロで、目や鼻からは大量に液体が流れ出ている。腕も変な方向に曲がっていた。見た目は……まだ五歳ほどの子供。それでも必死に逃げようと立ち上がる。

「お、おい大丈夫――」

大志が思わずそう言葉をかけて手を差し伸べようとしたその時――

「――え？」

子供の胸から刃物が突き出た。背後から味方の兵士が剣で突いたのはすぐに理解できた。

「「「ひぃっ!?」」」

四人が四人とも恐慌の声を漏らす。子供の傍にいた大志は、腰が抜けて尻餅をつく。

「がふっ……！　い……やだ……いだ……いよぉ……っ」

子供は胸から突き出ている剣を素手で握り、引っこ抜こうとするがビクともしない。その手は刃物を掴んでいるので血塗れだ。

「うるさいっ！」

剣を勢いよく抜かれ、背後からさらに斬りかかられて子供は地に臥せる。だがさすが『魔人族』の生命力なのか、まだ微かに息があり、何かを求めるように大志たちの方に顔を向け、震える手を伸ばす。

「まだ……死にたく……ない……よぉ」

――グサッ！

子供の願いも虚しく、またも背中に剣を刺されて、糸が切れたように手が地面へとついて、今度こそ絶命した。

「――うっぷっ!?」

大志がその場で吐いた。他の三人も膝をついて吐いてしまっている。

「……な、何でこんな……っ」

大志は子供を殺し平然としている兵士を見ながら震える。

そしてこれが本当に現実なのか分からず、とてつもない恐怖や息苦しさと戦いながら、ここに来る前の、国王との会話を思い出していた。

「――『魔人族』が裏切る？　それは本当ですか？」

「……ああ」

大志の質問に答えたのは、自分たちをこの世界――【イデア】に召喚した国の王であるルドルフである。

今この場には勇者四人と国王しかいない。国王が内密に話したいことがあるというので、こうして王の執務室にやって来たのだが、彼は会談で『魔人族』が裏切ると言ったのだ。

「せやったら同盟っちゅうのは嘘なんですか？」

ネコ目が特徴的で、いつも笑顔を絶やさない赤森しのぶが眉をしかめながら聞いた。

「そうだ。【ハーオス】に密偵を放ち調べさせたが間違いない。奴らは会談をきっかけに、我々を潰そうとしておる」

「そ、そんな……せっかく戦わずに済むってのに、『魔人族』は何考えてんのよっ！」

憤りを露わにするのは、スレンダー美少女――鈴宮千佳だ。

「そんなに戦争がしたいのでしょうか……？」

大和撫子という言葉が似合う黒髪少女の皆本朱里が、悲しげに眉をひそめている。

呆れたように溜め息を吐いた大志が、「それでは会議を中止に？」を聞くと、

「いや、これほど怒りを覚えたのは初めてだ。あれほど和睦の意を向けていたのにもかかわらず、結局はこちらを根絶やしにするための方便だった。これでは死んでいった者は浮かばれん」

ルドルフが怒りと悲しみが混在したような表情を浮かべて言葉を絞り出し、

「会談は中止にはせん。逆に会談を利用して奴らに目に物を見せてやろうと思っておる」

「ど、どないしはるんですか？」

「あちらが同盟を反故にするのならば、こちらは同盟の力を見せつけてやれば良い」

「……まさか！」

しのぶが気づいたようにハッと息を呑む。他の三人はまだ気づいていないようだ。

「……『獣人族』と同盟を結ぶ」

「「「っ!?」」」

その言葉に、しのぶ以外の三人が一様に目を丸くした。

「そしてその会談中に【ハーオス】を襲撃し、二度とこのような愚かなことを企てられないようにするつもりである」

まさか『魔人族』の狙いを潰すためとはいえ、『獣人族』と同盟を結ぶという発言には四人ともが正直に驚いていた。だがそうしてでも倒さなければならない相手、ということなのだろう。

「会談の前に、お主たちにある任務を任せたいのだ」

「任務……ですか？」

大志が怪訝な面持ちで尋ねた。

ルドルフが言うには、会談前に、自分たちの世話係でもある第二軍隊隊長であるウェル・キンブルと、その部下とともに魔界へと向かって、そこで『獣人族』の国軍と合流し、ともに【魔国・ハーオス】を制圧してほしいとの

ことだった。

だがそこで一つ問題が出てくる。橋には『魔人族』の精鋭が護衛していて、おいそれと渡ることができないと聞いていたのだ。

「問題ない。そこには我々の味方となった者がすでに待機している」

それは魔人のイーラオーラといって、現魔王のやり方に反発している人物とのこと。

そこまで根回し済みだったことには驚いたが、同族にまでそう思われる今の魔王は、やはり器ではないのだろうと大志は思った。良い魔王なら、皆がついていきたくなるはずだと単純に考えていたのだ。

橋を渡れば会談の日まで、イーラオーラが用意した安全な場所で身を潜めておき、『獣人族』がその後に合流してから、会談当日に【ハーオス】に攻め入ってほしいとのこと。

魔人側も、最高戦力が会談に集中している以上、勇者四人と獣人の国軍相手にムダな抵抗などせずに降伏するだろうとルドルフは言う。

その言葉を聞いて、大志たちはホッとしていた。確かにいくらなんでも、最高戦力を失った国が、『人間族』と『獣人族』の最高戦力相手に戦うわけがないと思う。

大志たちは無闇に人を傷つけなくてもいいのだと分かり胸を撫で下ろしていた。

「これは戦争ではなく、ムダな血を流させないための制圧なのだ。やってくれるな？」

ルドルフは真剣な表情を向けて嘆願してきた。

四人は互いに顔を見合わせて力強く頷く。

「任せてください！　俺たちの力で平和を掴んできます！」

心強さを感じさせるセリフを放った。その表情には陰りなど一片もない。むしろ清々しいほどの希望しか映っていなかった。

――これは戦争ではない。

それなら人は死なないだろうと、安易過ぎる答えを導き出し、四人が四人とも、まるで作られた人形のように疑問など思い浮かべず、平和という言葉だけを意識していた。

ルドルフの昏い笑みにも気づかず、大志たちは王の言葉を信じて【魔国・ハーオス】に赴くことになったのだ。

大志は国王ルドルフとの会話を思い出しながら、どうしてこんな場所にいるのか、何度も反芻していた。

（そ、そうだ……俺たちはここを制圧に……。だ、だってこれは……戦争じゃないって）

ルドルフはそう言っていた、と心の中で自分に言い聞かせるが、明らかに目の前に広がる光景は戦争そのもの。剣と剣が合わさる音、魔法や《化装術》が飛び交い、そこら中が破壊されていく。そしてその中でいとも簡単に失われていく――命。

（な、何で戦うんだよぉ……降伏勧告して終わりじゃなかったのか……？）

これだけの戦力を見せつけて降伏を要求すれば、必ず無血開城できると思っていた。無駄な抵抗をせず、誰も傷つけず全てが終わると。ルドルフもそう言っていたのだから。

事実、イーラオーラという魔人の手引きによって、彼が教えてくれた転移魔法陣のお陰で、事前に数多くの戦力を、時間をかけて少しずつだが投入することができたのだ。また『獣人族』とも手を組めた。そうやって準備を進めていき、万全の態勢を整えることができたのである。

これであとは戦力差に怯えた魔人たちが武器を置くだけ。そんなふうに考えていたのだ。

――だが現実はそんな甘いものではなかった。

この国の周辺で息を殺しながら合図を待っていると突然、『獣人族』のトップらしき人物が突撃の合図を出したのだ。

その合図を皮切りに、とてつもない殺気が同志である彼らから溢れ出した。それは決して降伏を促すのではなく、全てを殺し尽くしてやるというような雰囲気そのものである。そしてその感覚は的中した。

見知っている『人間族』の兵士でさえも動じることなく剣を抜き、無防備な『魔人族』たちに凶刃を放つ。それは弱者を痛めつける略奪者にしか見えない。

そして、初めて理解させられた。自分たちが思っていた制圧というのは、決して綺麗なものではなく、戦争という名を言い換えただけの恐ろしいものであるということを。

「ね、ねえ大志……アタシたち……これ……」

千佳が完全に混乱しているのが[redacted]て分かる。震える唇を必死で止めようとしているのだが、無意識のそれを止められず声も上ずっていた。目も充血して涙目になっている。先程目の前で『魔人族』の子供が殺されてから女

性たちは皆が同じ表情だ。

「……ど、どうすれば……いい？」

情けないことに、大志は消えるような声でそんな言葉を出した。

「き、聞かないでよぉ……。アタシに分かるわけない……分かるわけないよぉ……」

千佳の当然のような言葉に対し、大志は答えを求めるように他の二人の顔も確認するが、朱里は顔を俯かせて泣いており、しのぶは放心状態で固まっている。

戦争をしている中で、そんな四人は恐ろしく違和感ある存在に見えた。ただそれは敵にしたら格好の的にもなる。

「――許さねえぞぉっ！　この侵略者どもがぁぁっ！」

怒りと憎しみに満ちた形相で魔人が一人、剣を手に向かって来る。大志たちは何もしてはいないのだが、『魔人族』にしてみれば、大志たちも立派な敵だ

敵だから殺す。そうしなければ自分たちが殺される。自分たちの国を滅茶苦茶にした者どもを許さないと、剣に殺意を込めて。

大志は向かって来る魔人を視界に捉えていたが、身体が石のように固まり動けないでいた。腰には剣がある。これを抜いて応戦しなければ、間違いなくあの殺意の餌食になってしまう。

頭では分かっているが、向かって来ているのは言葉を話す〝人〟である。モンスターではない。今まで多くのモンスターと戦い命を奪ってきた。また模擬戦としてなら人とも戦った経験はある。だが――人を殺したことはない。

「そ、そうだ、こ、殺さずに気絶させれば……！」

今の状況で、その震える身体も制御できずに、そのような甘いことを考える者はどういう結果を生むか――。

「大志逃げてぇっ！」

千佳の言葉が耳に飛び込んでくるが、大志は動かない。いや、動けない。半端な覚悟、いや半端にすら届いていない覚悟が生み出す結果、それは――完全な硬直である。

（う、動けない……っ）

頭の中では剣を抜いて構えているのに、実際は指先すらまともに動かせないでいた。

「あ、あぁ……!?」

魔人は容赦なく詰め寄ってきて、剣を振り上げている。大志は瞬きも忘れ、半ば他人事のように目の前に迫ってくる光景をただただ見つめていた。

だが相手の目を見た時、ハッと我に返り、これが紛れもなく現実なのだという強烈な意識が喚起された。そしてこのままだと殺される――。

「い、嫌だぁぁぁぁぁっ！」

精一杯叫ぶ。無情にも後ろにいる千佳たちも恐慌で動けなくなっている。

「た、大志っ、避けてぇぇぇぇぇっ！」

千佳の願い虚しく、魔人の凶刃が大志の頭上から振り下ろされる。

誰もがもう大志の命はそこまでだと思ったであろう。

「――――アチョオオオオオオオッ！」

突如間の抜けたような掛け声とともに、小さな人影が大志の目の前にいた魔人を殴り飛ばしてしまった。魔人はそのまま真っ直ぐ建物へと突っ込み沈黙する。

大志は強烈な死の気配に、血の気の失った顔を向けた。他の三人も、息の仕方すら忘れたような表情だ。

助けてもらったのかもしれない。なら何かを言わなければと思うが、言葉が出てこない。

そんな大志たちの思いを無視するかのように、その人物は吹き飛ばした魔人をビシッと指差すと、

「コレェ！　もう少し静かにしてほしいですぞぉ！　このままですと師匠が起きてしまうではないですかぁっ！」

ぷく～っと頬を膨らませて声高に叫ぶ。その姿はまるで戦争に似つかわしくない。何故なら、その人物は明らかに――子供なのだから。

歳の頃は十歳くらいだろうか。頭の上には団子状に二つに纏めた珊瑚色の髪を持ち、長い二本のアホ毛がピョコンと生えている。

恐らくは魔人の子供。水色の道着のようなものを着用しているその子の顔は年相応に幼く、女の子のようにも男の子のようにも見える。クリッとした瞳と低い鼻が愛嬌を醸し出しており、年上につい抱きしめたいと思わせるような子供だった。

そしてそんな子がふと背中を向けた時、目に入って来たものに大志は目を奪われた。

（え……あ、あれって……!?）

それは着ている道着の背中に入った文字。

それは間違いなく――『文』――という文字だった。

（か、漢字……!?）

何故この世界に漢字が存在しているのか不思議に思ったが、答えは見出せなかった。今分かっているのは、大志たちはこの子供に命を救われたということだけだ。

すると子供が、急に頭を抱えて悶え始める。

「あ～もう！　これだけ騒がしくするとはぁ！　師匠の寝起きの悪さを知っているのですかな！　この前なんてちょっと目覚めが悪かったからと言って、ボクを魔法の練習台にしたんですぞぉ！」

何やら急に涙を流し始めた子供を呆然と見つめる勇者たち。

「それに数日前など……ああ、恐ろしや恐ろしやぁ……」

今度は顔を青ざめさせて震え出した。そして今度は大志たちの方を指差す。

「もし師匠が起きて不機嫌だったら責任とってほしいですぞぉ！」

突拍子もない出来事に、何も言い返せずにいると、突如上空から何かが落ちてきた。

スタッと大した音を立てず着地し、その場に現れたのは、

「……ふむ、やはりお主たち――勇者か？」

《魔王直属護衛隊・序列四位》のオーノウスその人だった。

※

「むむむ？　どなたですかな？」

二本のアホ毛が伸びた童子が、オーノウスにキョトンとした顔を向けた。

「ほう、見たところ『魔人族』のようだが、俺を知らないか？」

「知らないですぞ！」

オーノウスは周囲を見回し、吹き飛ばされ沈黙している魔人を見た後、細めた目で子供を睨みつけた。

「……アレはお主が？」

「そうですぞ！　何やら大声で叫んでいたので止めたのですぞ！」

信じられないことだ。このような幼子が、仮にも魔人の兵士を倒すとは。

『魔人族』は総じて身体能力が高い。たかが子供の攻撃でどうにかなるとは思い難い。だが倒れている魔人の横っ腹には、小さな拳の跡がくっきりと残っていた。

（一撃で……？　この童……できるな）

オーノウスは冷静に子供の戦闘能力を分析して、子供だからといって舐めると危険だと判断した。

「一つ聞こう。大声を出したから止めたと言ったが、お主はそこにいる勇者の仲間か？」

「……はい？　勇者とは誰のことですかな？」

可愛らしく小首を傾げる子供。嘘をついているようには見えない。つまり子供は勇者と無関係だということ。

「……お主は我らと敵対するのか？」

「？　よく分かりませんが、ここでうるさくしないのでしたら何もしませんですぞ」

どうやら本当に騒がしかったから止めにきただけのようだ。今、この国がどういう状態にあるのか理解できていない様子。

しかしこれ以上、子供に戦争の非情さを痛感させたくはなかった。

「いいからこの場から去れ。俺はそこの勇者たちに用があるのでな」

勇者たちに向かってオーノウスが睨むと、彼らはビクッと身体を震わせた。

だがそんなオーノウスの言葉に口を尖らせて子供が反論してくる。

「そうはいかないのですぞっ！」

「……何故だ？」

すると子供は早口で言葉を捲げかけてくる。

「ここで何かをするつもりなのですな？　また騙がしくするつもりなのですな？」

「……何を言っている？」

「ダメなのですぞ！　ぜ～ったいダメなのですぞ！　そんなことをすれば……っ」

青ざめた表情を見せる子供。

「ダ、ダメですダメですダメですダメですダメでええええすっ！　ぜえええ～ったいにそのようなことはダメなのですぞおおおおおっ！」

首をブンブン振りながら全力で否定してくる。そのまますぐに頭をビタっと止めたと思ったら、今度は大きく息を吸って、

「そんなことをすれば師匠が起きてしまうではないですかぁぁぁぁぁっ！」

耳をつんざくほどのとてつもない叫びが周囲を響かせる。

するとその時、小さな何かがオーノウスの視界の中で走り――ボフンッ！

「うぶぅっ!?」

突然子供の頭に――枕が飛ばされてきた。

見事枕が命中し、その勢いで倒れゴツンッと地面に頭を打ちつけてしまう子供。

「にょわぁぁっ!?　い、痛いいいっ！　後頭部打ったぁぁっ!?　痛いですぞおおおっ！」

ゴロゴロと頭を押さえながら地面に転がり始めた。勇者たちは子供の行動に目を奪われていたが、オーノウスだけは違うところを見る。

それは近くにある建物。確か宿屋だった。その二階にある一室の窓から、一人の人物が姿を見せているのをハッキリと視認する。その人物こそ、子供に枕を投げつけた存在だ。

そしてその人物は、不機嫌そうに眉を大いにしかめながらこう言い放つ。

「――お前が一番うるさいっ！」

そこには、赤いロープを纏った『インプ族』らしき少年がいた。

第三章・裏切り

その日は、一睡もせずに今朝まで本を読んでいたので寝不足だった。だから丘村日色は、今日一日は寝通すと決めて、弟子のニッキには「絶対起こすな」と厳命していた。

【魔国・ハーオス】へ来て十日。その間――弟子のニッキとともに宿屋に泊まり、鍛錬や観光に励んでいたが、残りの仲間たちは、十日前に別れたっきり音沙汰がない。

そのうち帰ってくるだろうということで、宿をとって【ハーオス】を堪能していた。

そして今日も、どうせ音沙汰がないのだろうと思いながらベッドで寝ていると、急に外が騒がしくなる。それどころか宿屋の中も慌ただしく人がバタバタと、まるで何かから逃げるように走る音がした。

というか、騒がしいというレベルではない。まさに轟音や爆発音、建物が崩れる音や刃物同士がぶつかり合うような衝撃音。そんな音を聞きながら徐々に苛立ちを溜めていく。

（何なんだ今日は……？）

いまだにベッドに横になりながら、心地好かった眠気が無残にも失われていく感覚に不機嫌度が高まっていく。

いつもは静かなのに、本当にどういうことだろうか。

「ダ、ダメですダメですダメですダメですダメでええええすっ！　ぜえええ～ったいにそのようなことはダメなのですぞおおおおおっ！」

――ビキ……と、聞き覚えのある声を耳にし、日色の額に青筋が浮かぶ。

瞼をゆっくりと上げてベッドから静かに起き上がり、壁にかけてある赤いロープを羽織った。ベッドにある枕を右手で摑むと、ドンドンドンドンと床を叩くように歩き、怒気を込めた表情で窓へと向かい、窓をガラガラと開けた。

「そんなことをすれば師匠が起きてしまうではないですかぁぁぁぁぁっ！」

自分の目を完全に覚ましやがったバカに向かって、勢いよく枕をぶん投げた。それが見事に命中し、バカは地面に転倒。その際に頭を打ったようで、ゴロゴロと転げ回っている。

そしてニッキに対し、不愉快度百パーセントでこう言う。

「――お前が一番うるさいっ！」

お仕置きは確定だなと思いつつニッキを睨みつけていたが、驚いたことに、外は日色の想像以上の騒ぎで埋め尽くされていた。

宿屋の二階から見回せる様々な光景が目に飛び込んでくる。

多くの『獣人族』、そして兵士と思われる『人間族』。その者たちと命がけで戦っている『魔人族』の姿がある。ところどころから火や煙も上がっていた。

最初はキョトンとしてしまった日色だが、冷静に現況を把握していき、頭をかきながら小さく何度も頷く。

（……なるほどな、そういえば今日は……）

ゆっくりと視線を下に向けると、そこには先程枕を投げつけて痛みにもがいているニッキと、それに対峙するように立っている獣人。見た目が完全に狼のような顔なので間違いないだろうと判断する。

また地面に座り込んでいる四人を視界に入れた。何やら『人間族』のようだが、顔色が悪く蒼白で、明らかに恐怖にかられている。

（あれ？　アイツらどこかで見たこと……あったっけか？）

どこかで見た顔だと思ったが、記憶を探っても即座に解答が出てこなかったので、思い出すのもめんどくさくなってどうでもいいと決定した。

（そんなことよりもこれは……）

日色はいちいち階段を使って下に降りるのも面倒だったので、ベッドの傍に立てかけてあった新調した愛刀を腰に携帯し、そのまま窓から飛び降りた。

――スタッと地面に降りると、いまだに頭を押さえて蹲っているニッキの近くにいき、ボカンと軽く頭を小突く。

「にょわっ!?　し、し、師匠おっ!?」

ニッキはようやく日色の存在に気づき、慌てて立ち上がる。

「おいバカ弟子、今日は――」

「ああああああっ、こ、ここれはですね師匠！　いや、ボクも必死に止めたのですぞ！　うるさくしないで頂きたいと！　ど、どうかその頭張りだけは少しだけでも評価して頂きたく――」

――ボカン。

「にょわっ!?　い、痛いですぞお、師匠！」

涙目をして上目遣いに見てくるが、日色は仏頂面で言う。

「話を聞け」

「あ、は、はいですぞ！」

直立不動で口を一文字に結び日色からの言葉を待つニッキ。

「今日は何日だ？」

「はい！　今日はグウィリスの十の日ですぞ！」

グウィリスというのはこちらの世界で四月という意味だ。分かりやすくいえば四月十日ということ。

日色は、小さく「やはりか……忘れてたな」と呟きながら顔をしかめた。

「し、師匠？」

そんな日色の姿に疑問を感じたようで、ニッキがそっと聞いてきた。

「ん？　ああ、ほら前に戦争が起こるかもしれないという話をしただろ？」

「あ、はい。この前師匠が奇妙な女性からお声をかけられたというですな！」

イヴェアムという女から聞いた話を、ニッキにも教えておいた。

「それが……あ、ま、まさか……!?」

「そのまさかだ。……今日が戦争らしい」

「何ですとおおおおおおおおおおおっ!?」

「やかましい」

「にょわっ!?」

またも頭を小突いて黙らせる。しかしニッキも対抗するように言葉を返す。

「し、しかしですぞ師匠！　そんな大事な日をお忘れなど普通は有り得ないですぞ！」

「黙れ。お前こそ教えたのに忘れていただろうが」

「う……そ、それはぁ……」

日色の言う通りだったので、とても言い返せないようだ。だがその時、日色たちを大人しく見守っていた獣人が口を開く。

「――少し聞いてもいいか？」
日色とニッキは、彼に注目した。そのまま日色が愕然とした態度で「何だ？」と尋ねた。
「お主たち、何者だ？」
「人に名前を尋ねる時はまず自分からが常識ですぞ！」
ニッキの発言に、少し唖然とした様子を見せた獣人だったが、フッと頬を緩める。
「そうだな、それは失礼をした。ならこちらから名乗ろう。俺は魔王陛下を守る《魔王直属護衛隊・序列四位》。名を――オーノウスという」
日色は彼をジッと観察する。先日依頼をしてきたイヴェアムのことを調べていた時、《魔王直属護衛隊》という情報も得ていた。
（ほう、《魔王直属護衛隊》か……。コイツがあの女を護衛する六人部隊の一人ね……なるほどな、確かに雰囲気あるな）
オーノウスが只者ではないということは、その行まいから伝わってくる。それは日色の今までの戦闘経験から培われた感覚が成せるものだった。
「む～師匠、くる～えるというのは何なのですかな？」
首をコクンと傾けてニッキが質問してくる。
「お前はバカか？　あ、いやバカ弟子だったか」
「む～っ！　バカバカ酷いのですぞ～！」
「黙れ。奴も言ってただろうが。魔王を守るとな」
「むむむ？　ということは師匠の仰っていた女性の？」
「らしいな」
なるほどと納得顔で何度も頷くニッキが、オーノウスに正面を向けた。
「名乗られたからにはこちらも名乗るのが常識！　そうですな師匠！」
「そんな常識は知らんな」
「なはっ!?　そ、そんな師匠ぉ～」
「ええい！　くっつくな鬱陶しい！」

突然甘えるように抱きついてくるニッキを無理矢理剥がす。
「い、いいから名乗るなら名乗れバカ弟子！」
「むむむ、そうでした！　え～ごほん！　フハハハハ！　よく聞くが良いですぞ！　我のなまごほっ!?」
「お前はどこの魔王だ！」
頭をまたも小突かれ窘められるニッキ。
「ふにゅう～。リリィン殿に名乗りはこうした方がカッコ良いというアドバイスをもらいましてですね……」
あの野郎……と、女性なので野郎ではないが、旅仲間のリリィンに対して、余計なことを教えやがってという気持ちになった。
日色とニッキのやり取りを見て、オーノウスは頬をかきながら沈黙中だ。
（つたく、教えたことを純粋に覚えるのはいいが、疑わない性格はどうにかならないか）
他人の振りもできないので、師匠という立場として恥ずかしいのである。
「では改めまして！　ボクはこちらにおわす師匠の可愛い一番弟子！　名前はニッキですぞ！　親しみを込めてニッちゃんと呼ぶことも許可しましょう！」
むふ～と鼻を膨らまし自慢げに胸を張っている。
「そ、そうか。覚えておこう」
ようやく自己紹介が聞けたので少しホッとしたような顔を浮かべるオーノウス。
「して、そっちは？」
「何故教える必要がある？　そもそも名乗られたからと言って……」
「ヒイロ・オカムラ師匠ですぞっ！」
……。
思わず場が固まる。せっかくの日色節があっさりと崩れてしまった。そしてそれを成した人物は、隣にいて最大級に誇らしげなバカ弟子だ。
――ゴツンッ！
「にゃうっ!?」
今度は少し強めに拳骨を落としておいた。

「い、痛いっ！　ゴツンッて音が鳴ったですぞ師匠ぉっ！」
「このバカ弟子が、勝手に人の名前を名乗るな」
「うぅ～申し訳ありませんですぞぉ～。し、しかし弟子としては、師匠のお名前をババンッと大々的に紹介したくう……」
「ま、まあとにかくこれで互いの面識が終わったということでいいではないか」
何故かその場を取り持つようにオーノウスが言葉を発した。恐らくポカポカと殴られているニッキが不憫だと思ったのだろう。
日色はさらに不機嫌面をして腕を組んでいたが、そんな中……。
「……お、丘村……？」
確かめるような呟き声が背後から聞こえてきた。

「は？」
日色は後ろから聞こえた声に導かれて振り向くと、先程視界に捉えた四人がいた。
「ヒイロ・オカムラ……？　丘村……日色……？　いや、そんなわけ……アイツは人間で……けど眼鏡だし声や顔も……」
座り込んでいる少年と、その後ろにいる三人の少女たちをしばらく見つめていると……。
（四人……人間……あ、そうか！）
ようやく記憶の片隅から引っ張り出し答えを見出す。
「お前ら……リア充四人組か？」
「リ、リア充？　じゃ、じゃあお前本当に丘村……丘村なのか!?　何でこんなとこにいるんだ!?」
青山大志、鈴宮千佳、赤森しのぶ、皆本朱里。
日色を巻き込んでこの世界に召喚された勇者四人だと気づいた。四人も日色だと知って目を丸くしている。
（そういやいたなぁ、こんな奴らも）
遠い日の思い出を思い返すように日色は目を細めた。

「え……お、丘村？　コ、コイツが？」
千佳が信じられないという顔で疑わしそうに見つめてくる。
「た、確かに雰囲気とか喋り方は似ていますが、姿が全然……」
朱里も同様の思いのようだ。今の日色は、自身の魔法で人間から魔人の姿に変化しているので、困惑するのも無理はないだろう。
「せ、せやけど確かに丘村っちの声やし、眼鏡だってしとる。それにヒイロ・オカムラなんて名前、そこら辺にぎょーさんあるとは思われへんし」
そう言ったしのぶも含めて四人、ジロジロと日色を観察しつつ押し黙ってしまう。
そんな四人を日色は冷ややかに見つめていた。この状況下で緊張感なままの繰姿。そして絶望に彩られた表情。いまだに震えているその身体。
「……なるほどな。国の操り人形としてここまでやって来たはいいが、現実を知って地べたを這いずり回ってるってわけか」
嘲笑交じりに言う。すると大志が、「な、何だとぉ!?」と怒ったように叫ぶが、ちっとも声に強さが乗っていない。ひ弱で小心者な奴が、不良どもに向かって何かを言う時のトーンのようだ。単なる虚勢である。
「……ま、お前らなんてどうでもいいけどな」
「なっ……！」
日色は興味を失い背中を向けてオーノウスに視点を合わせると、勇者四人は固まったように動かなくなる。ドライ過ぎる日色に愕然としている様子だ。
「お、おい魔人……だよな？　『魔人族』なのに魔人がトップクラスにいるとは少し驚いたが」
「確かに、俺は魔人だ。しかし魔人でもある」
「……！　……なるほどな。ドジメイドと同じってことか」
「怒地……冥土？　それは奇怪な場所のようだが、そこにも俺と同じ存在が？」
……何を言っているのだろうか？
オーノウスは完全に誤解しているようだ。
「……まあそんなことより、あの女は今会談中か？」

「あの女とは？」
「魔王だ魔王。あの気弱そうな金髪女のことだ」
「！　……お主、陛下のことを気安く語るとは何事だ？」
静かな物言いだが、明らかに不審さを滲ませる睨みをぶつけてきている。
「何事だと言われてもな。オレはアイツと契約しているだけだ」
「け、契約？」
「しかしな……まさか獣人まで攻めてくるなんて聞いてなかったぞ。あの女、適当なことを言いやがって」
軽く舌打ちしながらこめかみを指で押さえる。
「ちょ、ちょっと待て！　お主は先程から何を言って――」
その時、オーノウスの言葉が終わる前に、上空から数人の襲撃者が降って来た。
「「「おらぁぁぁっ！」」」
見たところ彼らは獣人の兵士だ。
「魔人どもおおおっ、覚悟おおおおおっ！」
彼らは明らかに魔人の姿をしている日色を狙っているようだ。
日色は彼らを視界に入れるが、慌てることもなく腕を組む。
「……やれ、バカ弟子」
「はいですぞ！」
ニッキは元気よく返事をすると、腰を少し落とし、力強く大地を蹴って空へと跳んだ。
「アチョォォォォッ！」
「邪魔だガキがぁぁっ！」
下から向かって来るニッキに対し、獣人の兵士が剣を振り下ろす。だがニッキは臆することなく右拳に魔力を集中させた。すると青白い光が拳を輝かせ始める。
「な、何だっ!?」
「くらうですぞ！――一撃決殺っ、《爆拳》っ！」
ニッキが突き出した拳が、男の振り下ろす剣と衝突する。普通なら拳が真っ二つになるはず。しかし結果は――

――バキィィン！
剣の方が折れ……いや、砕けてしまった。
「んな――っ!?」
そのままニッキの拳が男の腹に吸い込まれた直後、小規模爆発を引き起こした。
「ぐはぁぁあっ!?」
爆発をその身に受けた獣人は、弾かれて放物線を描きながら飛んで行ってしまう。
また爆風により、傍にいた獣人たちも衝撃に煽られ体勢を崩し始めた。
降りてきたニッキが「やりましたぞ！」的な感じで、キラキラと目を輝かせながらご褒美でももらいたいような表情を浮かべる。
「……まだ他にもいるだろ？」
その言葉にガックリと肩を落とすニッキ。
恐らく褒めてもらいたいのだろうと日色も思ったが、爆発を直に受けた者以外は、まだピンピンとしているので、そんな状況ではないのだ。
「……凄まじい一撃だ。恐らく魔力を拳に圧縮させ魔力爆発を起こしているのだろうが、それをあんな小さな童が体得しているとは……それに今のもまだ全力ではない」
「ほう、一目でよく分かったな。さすがは《魔王直属護衛隊》ってところか」
オーノウスの冷静な分析に、日色は感心した。
敵の獣人たちも、思わぬ伏兵がいたと思ったらしく、突撃を止めて日色の前方でこちらの様子を窺って警戒している。
一見仲間のように見えるオーノウスに何も言わないということは、彼が敵だと――オーノウスだということを知っているようだ。
今、この場にいるのは三人の獣人兵だが、その後ろからまた二人ほど現れる。まだ隠れている敵の存在にも注意を向ける必要があった。
（……面倒だな。こっちはあの女のことを聞きたいんだが。こう周りがうるさいと話もできんか……仕方ない）
ニッキに任せてもいいが、それでは時間がかかる。

日色は前方で身構えているニッキの脇を通り過ぎた。
「し、師匠？」
ニッキだけでなく、オーノウスや勇者たちも日色の行動を訝しんでいる。
「下がってろバカ弟子。掃除は一気にこうやるんだ」
そう言うと、指先に魔力を宿していく。ただ片手ではなく――両手の人差し指だ。ゆっくりと同時に両指を動かし始めた。
『吸引』と『獣人』。
青白い魔力で書かれた文字が、くっきりと空中に映し出された。すると獣人たちも日色の行動に対し、さらに警戒度を高めて、その場から距離を取ろうとするが――。
「――逃げてもムダだ。《文字魔法》――発動！」
二つの文字から凄まじい放電現象が起きた直後、
「「「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」」」
全力で叫びながら、日色の目の前にいる獣人たちがジリジリと日色に近づいてくる。本人たちは足を踏ん張って耐えているようだ。また建物の陰からも数人ほど引っ張り出されてきている。まるで掃除機にでも吸い込まれるようだ。吸い込む力が強まって、次々と獣人兵たちが体勢を崩しながら日色のもとへ飛ばされてくる。
日色はゆっくりと腰に下げている刀を抜き、目にも止まらない速さで獣人たちを斬りつけた。それはまさに電光石火――。
「「「がぁっ――っ!?」」」
飛んできたのは七人だったが、七人が七人とも白目を剝いたまま地面に転がっていた。ただ誰一人として斬撃を受けた痕跡はなく絶命もしていない。
「うおおおおっ！　さすがは師匠ですぞ！　このニッキ、感服致しましたですぞぉ！」
ニッキは手放しで喜んでいたが、それを見ていたオーノウス、そして勇者たちは開いた口が塞がらないといった感じだ。特に勇者たちの驚嘆ぶりは凄いものだった。
「あ……あれが片村……!?」
「う、嘘……!?」

「す、凄いです……!?」
「み、見えへんかった……!?」
四人がそれぞれ無意識に言葉を出していた。
「ふむ……『インプ族』の少年。今の動きだけでも我々と同等……一体彼は何者だ？」
オーノウスの日色に対しての評価。一介の戦士だとは思えないほどの強さを垣間見て驚愕しているようだ。
日色は周囲に敵の気配がないと判断し刀を鞘に納めると、もう一度オーノウスを見た。
「おいオオカミ野郎、さっきの続きだが、魔王は会談に行ってるんだな？」
「あ、ああそのことだが、何故お主が陛下のことを聞く？」
「だからさっきも言ったろ？　奴との契約だと」
「だから何の契約だと言うのだ？」
段々とめんどくさく感じてきた上、話が進まず苛立ちが増してくる。
「はぁ、何故お前に言わなきゃならんのだ？　それより会談なのかそうでないのかさっさと言え」
「む……怪しい輩にそうそう素直に教えるわけにはいかぬ」
二人は睨み合うが、その間に何故かニッキが割って入ってくる。
「コレェッ！　師匠がお聞きしたいと仰ってるのですから、さっさと――にょわっ!?　ど、どうして師匠はまたぶつんですかな!?」
「お前が喋るとややこしいから黙ってろ」
「うぅ～でも師匠ぉ～」
殴られた頭を擦りながら恨めしそうに見上げてくるが、そんな彼女を無視して続ける。
「教えるつもりはないんだな？」
「お主が何者か答えるまではな」
「……」
「……は？」
オーノウスが何を言っているんだ、という表情をするが、日色は気にせずにまたも指先に魔力を宿していく。そのまま視線をニッキへと落とす。

「お前は宿に戻ってろ。危なくなりそうなら逃げろよ」
「ど、どこか行くのですかな？」
「ああ、すぐに戻ってくる」
両手の指先に浮かぶ『転移』と『魔王』。発動した直後――日色の姿が掻き消える。
日色の消えた後ろ姿を見て、ほとんどの者は唖然としていたが、大志だけは「ちくしょう……」と悔しげに拳を震わせていた。

※

「――戦争……ですと？」
日色が【魔国・ハーオス】で戦争に巻き込まれる三十分ほど前――。
先程ヴィクトリアス王であるルドルフが口にした言葉を、イヴェアムは再度聞き返していた。できることなら自分の聞き間違いであってほしいという祈りを込めながら。
「そうだ、戦争だ」
しかしイヴェアムの願いは虚しく空回りしてしまう。
どうやらルドルフは、同盟する気は毛頭ないようだった。
「い、一体何故っ!?　我々が手を組めば避けられる争いを、何故進んで勃発させようとするのですか！」
ルドルフが険しい表情を作りイヴェアムを見つめた。
「私はお主を……『魔人族』を滅ぼすために様々なものを犠牲にした。兵士、民、そして娘だ」
娘という言葉にジュドムがピクリと眉を動かす。
「そこにいる我が友ジュドムは言った。犠牲にした娘たちのためにも和平を望むべきだと。それが死んでいった娘たちが一番喜ぶことだと」
ルドルフの目からツーッと一滴の涙が流れた。その光景にイヴェアムは息を呑んだ。
「だがそれは違う。一人目の娘、ミーティはまだ幼いながらも、自分の考えを持つ賢い子であった。二人目のアセリアもとても心が強い子だった。そして……まだ死んではおらぬが、生ける屍のような存在と化してしまった三人目のファラも心根の優しい子だ。そんな彼女たちは死ぬ前にこう言った。『必ず平和を掴んでください』と」
ルドルフの身体が小刻みに震え、そのまま席を立つと、憎しみと怒りに満ち満ちた瞳をイヴェアム……いや、『魔人族』に向けた。
「娘たちが！　いや、お主たちに殺された者たちが望むのは同盟などではない！　この【イデア】から災いの種をすべて排除し平和を成すことなのだ！　お主たち『魔人族』を根絶やしにしてなぁっ！」
それは――明らかな宣戦布告。
同時にハッキリと……明確に、この瞬間――『人間族』と『魔人族』との間で繋がっていた平和への糸が、プツンと音を立てて切れた。
すると突然円卓が大きな音を立てて破壊されてしまう。
咄嗟にイヴェアムも席から立つと、アクウィナスたちがイヴェアムを守ろうと前に躍り出て、人間側も同じようにルドルフを守ろうと兵士たちが前に出る。
そのまま全員が、その破壊の原因である一人の人物に視線をぶつけた。
「ふっざけんじゃねえぞぉっ、ルドルフゥゥゥッ！」
――ジュドム・ランカース。彼の拳が円卓に突き刺さっていた。丸太のように太い剛腕が怒りで震えている。
「ジュドム、お前が何を言ったところで……もう事態は決した」
「黙れルドルフッ！　何で……何でここまで愚かなんだよてめえはよぉ！」
「貴様ぁ！　たかがギルドマスターが国王に何と言う口の――」
「てめえは引っ込んでろ優市着がぁっ！」
凄まじい覇気が大臣のデニスとその周りにいる隊長兵たちに突き刺さる。
「ひぃっ!?」
デニスは情けないことに腰を抜かして尻餅をつく。兵も全員が、彼の気迫に圧倒されているのか、全身にビッショリと汗をかいている。
「す、凄い!?　これが一線を退いた者の出す威圧感か……っ!?」
冒険者として現役を引退したはずのジュドムの放つ覇気に、並々ならぬものを感じて、イヴェアムは感嘆せざるを得ない。

アクウィナスとマリオネは、彼の容易ならぬ存在の圧力に警戒度を高め、またキリアはイヴェアムの前に立ち、ジュドムをジッと見つめて何かを思案しているような様子だ。

「おいルドルフ、てめえがしてることの意味をホントに理解してんのか？」

「……正気を失っているように見えるか？」

「ああ見えるな。少なくとも若い頃のてめえなら、こんなバカなことはしなかった！」

「なら成長したのだ」

「笑わせんな！　それは堕落だっ！」

「き、貴様ぁ！　一度ならず二度までも！」

「王を支えることもできねえ臣下は口を出すんじゃねえっ！」

「ひぃ!?」

またも口を挟んだデニスを睨みつけて威嚇し、大人しくさせる。

「てめえらもてめえらだ！　臣下ってのはな、ただ王の命をこなすだけが臣下じゃねえんだよ。ホントの臣下ってのはな、王を正しい道へと導いてやるもんなんだ！」

イヴェアムは彼の言葉を聞いて感動すら覚えた。

「王が道を踏み外しそうになったら、たとえ命を失う覚悟をしてでも進言するのがホントの臣下なんだよ！　王は絶対じゃねえ！　国だって絶対じゃねえんだ！」

そこへアクウィナスが、イヴェアムに耳打ちするように言う。

「よく見ておけ。あれが王の資質を持つ者の姿だ」

イヴェアムは小さく頷くと、再び食い入るようにジュドムを見つめた。

「絶対なんかありゃしねえんだ！　だからこそ、王が最善の選択をできるように周りの者が支えなきゃなんねえんだよ！　絶対に近づけるように、間違いを少しでも減らせるように、その姿勢が良い国を作る一歩になるんだよ！」

誰もがジュドムを黙って見ているが、ルドルフだけは目を閉じて涼しげな表情のまま。

「王だって人だ。間違うことだってある。だが、絶対にしちゃなんねえのは、人の生き死にがかかった選択を間違うことだ！　何故それが分からねえんだ、ルドルフ！　てめえの決断で多くの同胞がまた死ぬことになるんだぞ！」

ジュドムの言葉が終わったと判断したのか、ルドルフが静かに目を開けた。

「私は王であり、夫であり、父でもある。娘の命……私が本当に望んで手放したと思っておるのか、ジュドム？」

またも涙を流しながら続きを口にしていく。

「なるほど、お前なら心を殺して国のために家族の思いを裏切ることができるだろう」

「違う！　そうじゃねえ、ルドルフッ！」

「だが、私は父親だ。そして、この場にいる者たちもまた、親なのだ。そして程度の差こそあれ、家族を傷つけられている。子を失った者もおる。子の命を奪う原因となった『魔人族』と共に暮らす。それが平和というのであれば……そのようなものは許容できん。それは家族を殺された皆にも言えることだ」

「それは当然の気持ちだ！　だが誰かが耐えなければ、世界はもっと酷くなるんだぞ！」

「もう遅いジュドム。選択はすでにない。これは――――復讐なのだよ」

ルドルフの断固たる決意に、悔しげに歯を食いしばりジュドムが絞り出すように言葉を吐き出す。

「てめえに……王の資格はねえ」

「だろうな、だがお前だって事が終われば理解するはずだ。『魔人族』が滅んで良かったと……な。それが結局は皆のためになる」

怒りの限界にきたといった表情のままジュドムは、ルドルフへと近づいていく。だが当然のように兵士たちが立ち塞がる。

「そこをどけぇ、ヒヨッコどもがぁっ！」

ジュドムがサッと右手を振り下ろしただけで、その瞬間に生まれた風圧によって、身構えていた兵士を吹き飛ばしてしまう。少し離れていたイヴェアムたちも、風圧に吹き飛ばされないようにしっかりと足を踏ん張っていた。

ルドルフも壁の近くまで吹き飛ばされていたが、表情は先程と全く変化しておらず焦りなども確認できない。

「……ふっ、さすがは――《衝撃王》。我が精鋭が盾にもならんとは」

「……歯ぁ食いしばれ、ルドルフゥウウッ！」

「がふぅっ！」

フックのような殴り方でルドルフは顔面を殴打され、壁に跳ね返り転倒した。彼の口からは血が流れているが、それでも恐怖を感じた様子は微塵もない。

「……な、何をしたところで……もう動き出している。誰にも止められはしない」

口元の血を拭いながら言うルドルフに、デニスや兵士たちが駆け寄ってきて守るように固める。そんな彼らを見てからジュドムは言う。

「……おい、ポートニス」

「何かしら、ジュドム」

ジュドムが、今まで静観していた神官長のポートニスに言葉をかけた。

「この部屋からは二十四時間経たなきゃ出られねえんだったよな？　他に方法はねえか？」

本来ならポートニスが持っていた杖の先端に嵌まっていた宝玉である《勇者の遺物》があれば、自由に外に出られるのだが、それを壊されたため、次に出られるのが二十四時間後の結界が弱くなった時期だけなのだ。

「そうね……他に《勇者の遺物》があればいいのだけれど。それがあれば、勇者の力を共鳴させて結界をこじ開けることもできるし……」

「……今は持ってねえな。……他に方法は？」

「そうね……外からの情報も全く遮断されてしまうから、今外で何が起こっているかも把握できないわ。同じように外の者が、中の異常に気付くこともできないの」

「くそ……っ」

「けど……」

「何だ、何かあるのか？」

「ええ。もし……もしだけど、この異常事態に気がついて、誰かが外から《勇者の遺物》で結界を開けてくれればあるいは……」

「……厳しいな。この中の状況が分からねえんじゃ、誰も手を出してくれねえだろうし」

思案するジュドムたちを見て、ルドルフが口を開く。

「だから言ったであろう？　何をしてもムダだと。この《聖域の間》を調べ上げて、ここならこの状況を完璧に作り出せると判断したからこそ会談場所に選んだのだ。不備はない」

「くっ……答えろルドルフ。てめえ、今勇者どもはどこにいる？」

「……見当がついておるのではないか？」

初めてそこでうすら笑いを浮かべながらルドルフは尋ねた。

「国境ではないのか？」

口を開いたのはイヴェアム。勇者の姿を実際に、【ムーティヒの橋】にて、その目で確認しているのだ。だがルドルフは鼻で笑う。

「フフフフ……大いに的外れだな魔王よ」

「は？」

「教えてやろう。今我が最高戦力は……【魔国・ハーオス】にいる」

「なっ!?」

それは魔王側の誰もの表情を揺るがす一言だった。

「フフフ、さらに驚くべき事実を教えてやろう。勇者だけではない、今【ハーオス】には多くの『獣人族』もいるはずだ。【獣王国・バシオン】の国軍がな」

「何だとっ!?」

「バカなっ！　不可能だ！　橋は壊されて通行ができんのだぞっ！」

イヴェアムの次に叫んだのはマリオネである。彼の言う通り、『魔人族』と『獣人族』との唯一の繋がりであった橋をイヴェアムとアクウィナスが破壊した。だから彼らが軍隊を引き連れて魔界へ渡れるはずがないのだ。

（そうよ……。確かにまだ軍を魔界へ渡らせる方法はあるけど。そこはもう【ムーティヒの橋】を使う方法しかないわ。けれど獣人が人間界と魔界を繋ぐその橋を渡れるはずが……っ!?）

そこでイヴェアムは、ある恐ろしい考えに至る。

「そ、そんな……も、もしかして……！」

「どうかされましたか、陛下？」

イヴェアムの明らかな動揺に、マリオネが困惑気味に言葉を発した……が、先に言葉を口にしたのは……。

「……フフフフ、感づいたかな、魔王？」

「……ま、まさかルドルフ、てめえ……」

ジュドムも気づいたのか、愕然とした声色を漏らす。

「ああそうだ。我々『人間族』は――――『獣人族』と同盟を結んだ」

その言葉は頭にハンマーをぶつけられたかのような衝撃を魔王側に与えた。

「そ、それでは……っ」
イヴェアムは声を震わせながら呟くように言葉を漏らす。
「そうだ。計画ではそろそろ戦が始まる頃合いである」
外れてほしい予感が的中した瞬間だった。

※

すでに【魔国・ハーオス】では戦が勃発しており、国を守るために国境から帰って来たオーノウスは、
「転移……した？　童よ、あの者はどこへ向かったのだ？」
突如として目の前から姿を消した日色について、傍に立っているニッキに尋ねた。
「そ、そうだよ！　丘村はどこに行ったんだよ！　何で急に消えたんだ!?」
大志もまた日色の動向が気になる様子だ。いまだ顔色は青ざめているが。
答えを求めて、全員の視線がニッキへ。すると彼女が胸を張って宣言するように言う。
「ボクにもサッパリですぞっ！」
「……そう、か」
それならどうしようもないなと思いオーノウスは黙る。それに日色のことも気になるが、勇者のことも気になっていたのだ。
確かに会談へ向かう時、【ムーティヒの橋】でその存在を確認したはず。
それなのに何故ここに彼らがいるのか、その謎をまずは解かなければと思う。オーノウスは彼らに近づいていく。
勇者である大志たちは、近づいてくるオーノウスの雰囲気に押されているのか、後ずさりをし始める。逃がしはしないと思ったオーノウスは、彼らに視認できないほどの速さで動き、背後に陣取った。
「うわぁっ!?」
声を上げて尻餅をついたのは大志だ。
「……まずお主たちに聞こう」
「な、な、なんなの何だよぉ！」

半ば自棄気味に大志が叫ぶが、条件反射か分からないが、立ち上がると腰に下げていた剣を抜いて構えている。
「話を聞きたいだけだ。尤も、お主たちの今後を聞いた後、こちらに害を成すようなら容赦はせぬがな」
殺気を含ませた視線をぶつける。大志たちはさらに顔を青ざめさせ、身体を震わせる。
「は、話って……？」
「まず聞きたいのは、お主たちは本当に勇者か？」
「そ、そそそうだ！　俺たちは【ヴィクトリアス】に召喚された勇者だ！」
「とても信じられぬな」
「な、何だと！」
「勇者といえば『人間族』の切り札であり救世主。その者たちが、何故そうして震えている？　敵地のど真ん中で」
救世主、それは希望の光。かつて『人間族』を災いから救い、多くの民から崇められ敬われる存在としてこの【イデア】に召喚されたこともある英傑たちのこと。
真っ直ぐな勇気、不屈の闘志、正義の力、慈愛の心。それらを武器に悪と戦う勇敢なる者。それが勇者。それなのに今の彼らには、どれ一つとして当て嵌まらない。
大志たちも目を伏せて意気消沈している。
「まあいい、お主たちが勇者かどうかなど、この場では必要なかったな」
「……え？」
「何故ならば、お主たちはこの【ハーオス】を攻め落とすためにやって来たのだろう？」
「そ、それは……」
「なれば、【ハーオス】を守る俺としては、お主たちを排除しなければならぬ」
「あ……っ！」
「それにだ、お主たちが本当に勇者だとしたら、ここで確実に殺しておくことが、『魔人族』のためにもなる」
さらに膨らませた殺気をぶつけながら、ゆっくりと近づく。
そんなオーノウスを見て、ビクッとなった大志が思わず、
「う、うおおおおおおっ！」
あろうことか剣を振り回しながら突進しだしたのである。

「た、大志ダメェェェッ！」

千佳が叫ぶ。だが彼女の声が届いていないのか、歩みを止めるつもりはないようだ。

「……愚かだな」

オーノウスは向かって来る大志を見つめながら呆れて立ち尽くしている。

大志の剣をあっさりと回避して、彼の鳩尾に拳を入れた。

「がはぁっ!?」

「大志ぃっ！　このぉっ！」

千佳がオーノウスに向けて右手をかざした直後、彼女の右手が光り輝く。

（む？　この感じ――光魔法か！）

攻撃を放たれる前に、素早くその場から距離を取った。

「うぅ……ぐぅ……っ!?」

「大志しっかりしてっ！」

千佳もまた攻撃を止めて、腹を押さえながら蹲る大志に駆け寄った。

そんな二人に向けて、オーノウスが静かに語る。

「光魔法を使おうとしたところを見ると、やはり勇者のようだが、お主たちは圧倒的に経験が足らぬ。よくもまあこの戦場まで送り出されたな。ある程度戦闘経験のある者たちがお主たちを見れば、戦場にはまだ早いと誰もが想像できるはずだが。……何故国王は止めなかった？　まさか兵士が、お主たちにはまだ早いと進言していないはずがないからな」

その言葉を聞いて、千佳は「え？」とオーノウスの顔を見つめる。

「レベルはそこそこにあるだろうが……戦場は遊び場ではない。その程度の覚悟しか持たず、本当に無事に帰れると思っていたのか？　見たところ、人が死ぬところも見たことがないように思えるが？」

誰も何も言えずに固まっている。図星のようだ。

「それとも送り出した国王は、お主たちをただの捨て駒として扱っているのか？」

「そ、そんなわけないじゃないっ！」

精一杯声を張り上げて否定する千佳。

「なら何故この場にいるのだ？　少し考えれば分かるはずだろう？　今のお主たちをここに送り出せばどうなるかなど。覚悟において一般兵にもなれていないお主たちは、何をもって国王に送り出されて来た？」

それはオーノウスにとっては純粋な疑問だったのだが、千佳は答えられないようで、ただただ苦々しい表情を浮かべるだけ。

「……ち……か……」

「た、大志！　大丈夫なの？」

「あ、ああ。腹痛いけど……多分、手加減された」

「え？」

大志は腹を押さえながらオーノウスに視線を向ける。

「アイツは全然全力じゃなかった。多分……レベルは遥かに向こうの方が上だ」

オーノウスは初めて大志に感心した。一撃受けただけでそこまで相手の力量を図れるとは、勇者の称号も伊達ではないかもしれない。まだまだ未熟ではあるが。

「魔法だけが武器ではない。それが分かっただろう」

鍛え上げられた肉体は、それだけで武器になるのだ。

「さて、素直に投降するのであれば命だけは助けよう。だがこれ以上抗うというのなら、《魔王直属護衛隊》の名に懸けてお主たちに地獄を見せよう」

今度は本気の殺意をもって威嚇する。のほほんと見ていたニッキでさえも、無意識に構えてしまうほどだ。当然直接殺気を向けられている大志たちには、心身に多大な負荷がかかっていることだろう。

「た、大志……」

不安そうに大志を見つめる千佳。

大志は千佳の目を見返したあと、諦めたように肩を落とす。そして決意したような目つきでオーノウスを見たその時――

「――見つけたぞぉっ、クルゥゥエェェェェェルゾ！」

建物の上から飛び込んできた人物がいた。赤茶色の髪に獣耳と尻尾が生えている存在。明らかに獣人だった。その手には大剣が握られてある。

（この者は――っ!?　確か【獣王国・バシオン】の第二王子――レニオン!?）

すでに攻撃態勢を整えているようで、剣の先に大きな竜巻が生み出されていた。

「人間界に向かったはずの奴が何でここにいるかなんて分かんねえが、都合が良い！　ここで【ハーオス】最高戦力をぶっ倒して、最強にまた一歩近づかせてもらうぜっ！」

剣を振りかぶり、オーノウスに向けて振り下ろしてきた。その近くには大志たちもいるのだが眼中にないようだ。

振り下ろした剣から竜巻が放たれ、更地にするような勢いの暴風が襲いかかってきた。

オーノウスは即座にその場から離れるが、竜巻は止まらない。真空の刃を含んだ風の猛威が大志たちを襲う。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!?」

「「きゃあぁぁぁぁぁぁぁっ!?」」

まともに受けた大志と千佳は、竜巻に呑み込まれて、上空へと弾き飛ばされてこの場からどこかへ去っていく。

幸いにも朱里としのぶは、竜巻に巻き込まれることはなかったが、風圧により吹き飛ばされてしまう。

「むむむ！」

そこへニッキが比較的近くに飛んできたしのぶを、その小さな身体で受け止めた。ただ朱里は建物にぶつかってしまったようで、ぐったりとしている。

そんな中、オーノウスはというと、

（くっ！　勇者たちは仲間ではないのか！　見境のない王子だ！）

レニオンが次々と繰り出してくる攻撃を避けながら、このままここで戦えば、ニッキもまた被害を受けると考え移動することにした。

「おいこら待ちやがれぇっ！」

回りを巻き込むことを何とも思っていなそうな厄介な相手に対し骨が折れると思いつつ、オーノウスは比較的人気のない場所へと向かった。

※

「はあぁぁぁぁっ！」

――《聖域の間》。イヴェアムは、部屋を包んでいる結界ごと扉を突き破ろうと、何度も何度も素手で殴って攻撃を加えていた。しかし扉は結界に守られておりビクともせず。

「無謀だな。勇者の命を宿した結界が、素手で破れるわけがない」

落ち着き払っているルドルフの言葉は無視し、イヴェアムは拳を突き出している。

「はあはあはあはあ……どうだ、何か分かったか、アクウィナス？」

「……これは魔法の力を封じる《封魔結界》に加えて、打撃を吸収する効果も含まれているようだ。元々武器の持ち運びが禁じられているこの場所では、理論的に言って力ずくの脱出は不可能に近い」

アクウィナスは扉に触れながら厳しい顔つきで説明した。彼は下手に攻撃などをせずに分析をしてくれていたのだ。

「――どいてろ、アクウィナス」

沈黙を守っていたジュドムが、瞼を閉じて全神経を右拳に集中させると、

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

力強く踏み込んで扉を壊すような勢いで拳を突き出した。

しかし、まるで衝撃を吸収するかのように結界が波打つだけで破壊することはできない。

「くそぉっ！」

「ジュドム殿でも無理なのか……」

イヴェアムは悲痛に歪む表情で結界を見つめる。彼の本気を乗せた拳は、一[illegible]てイヴェアムとは比べものにならないほど強力さを含んでいた。それでもダメだということは、やはりアクウィナスの言う通り力ずくは不可能かもしれない。

「このままでは国民たちが……」

懸念は【魔国・ハーオス】のこと。今戦争をしていると聞かされ、居ても立ってもいられなくなっている。

「許されんっ！　陛下、とりあえず奴らの始末を命じて頂きたい！」

マリオネがルドルフたちに、殺意を込めた視線を向けた。しかしイヴェアムは首を振る。

「……ダメだ」
「何故です陛下！　こうなったのもこのクズどものせいですぞ！」
「……今この場ではほとんどの暴力行為は弱体化している。マリオネ、魔法も武器もない状態で、あの五人の兵士とまともに戦って無傷でいられるのか？」
「……！」
「それにジュドム殿だって立ち塞がるだろう。……ここから脱出できた時、一刻も早く国に戻る必要がある。その時にお前が傷ついて動けなくなっていたらどうする？」
「し、しかし……」
「今はここから出ることが先決。ムダな体力は使うな」
「……御意」
仕方なくといった様子だが、イヴェアムの言うことが正しいと判断したようで、大人しく従うことにしてくれたみたいだ。
それを傍目で見ていたジュドムは、イヴェアムの冷静な判断力に感心していた。
（ほう、まだまだ青いが、大切なことは分かっているな。この娘はきっと良い王になる）
考えも甘ければ行動にも問題がある。しかしそれでも大切なものを失わず、優先すべきことを理解している彼女は、必ず将来伸びると思った。
しかし……と、扉に再度視線を向け、拳を強く握る。
（俺の攻撃でも歯が立たねえか……）
恐らく中から結界をこじ開けて脱出するのは不可能に近い。ならば何とか外からの力に頼らざるを得ない。少なくともジュドムはそう考えていた。
「くっ……何度攻撃をしてもビクともしないか」
悔しそうに歯を食いしばりながら、イヴェアムが結界に触れている。もう何度となく放った拳は真っ赤に腫れてしまっていた。
「ええい！　やはり陛下、先にこの忌々しい『人間族』を全員始末するべきですぞっ！」
「ならんっ！」

マリオネの言葉に断じて肯定の意を返さないイヴェアム。
「しかし、奴らは我々を裏切ったのですぞ！」
「先程も言っただろ？　外に出た時のことを考えろと」
「む……ですが」
「今はこの結界を何とかし、一刻も早く【ハーオス】に帰り戦争を止めなければならないのだ！　ムダな体力を使うことを禁じる！」
マリオネも「くっ……」と、歯噛みしながら渋々身を引いた。
「見るのだ。ジュドム殿も、あのように体力を温存するかのように瞑想している。マリオネも、今後のためにも体力を温存するのだ。この結界は私が何とかする！」
そこへ神官長であるボートニスが、ゆっくりと視線をルドルフへと向ける。
「ヴィクトリアス王、あなたは同志である我々をも謀り、あまつさえこの聖地である【オルディネ】を汚すような行為を平然とし、何とも思われないのですか？」
そうだ、彼女もルドルフに裏切られた一人。世界平和のために開かれる会談、それを是非、平和の象徴ともいえる聖地で開きたいとの申し出があり、彼女は喜び了承した。
それなのに、ルドルフは聖地を利用して、戦争をしかける行動を起こしたのだ。それは彼女にとって何よりも耐え難い裏切りに他ならないはず。
「あなたが行ったことは平和への冒瀆以外のなにものでもありません！　恥を知りなさい！」
完全に憤慨しているボートニスだが、ルドルフは平然とした態度のまま答える。
「神官長、君もそのうち理解できる。全てが終われば、これが真の平和だと感じることができるはずだ」
「『人間族』以外全てを滅ぼしてですか！」
「それが平和への一番の近道なのだよ。君も他種族に家族を、友を傷つけられたことがあるであろう？　まずは『魔人族』。その次は――『獣人族』だ」
「……ジュドムも言っておりましたが、やはりあなたに王の資格はありません！」
その言葉にルドルフが軽く呆れたような様子で鼻息を出すと、「魔王よ」と、イヴェアムに声を掛けた。
「……何だ？」

もう敬語は使わないようだ。それに値する人物ではないと判断したのだろう。
「私は先程問うた。貴公は大切な者を失ったことがあるか、と。今頃、貴公の国では多くの死者が出ていることだろう。貴公の言う、大切な家族の死者がウジャウジャとな」
「くっ！」
「貴公は、復讐は意味を成さないとも言った。二十四時間後にここから出て、それでも同じ言葉を吐けるかな？人間や獣人に家族を滅ぼされ、それでも憎しみからは何も生まれはしないと、聖人のような言葉を吐き続けられるか？」
「……私はそれでも、平和を諦めたりはしない！」
「詭弁だな。強がりもそこまでいくと一種の才能だが。なら現実を見た時、改めてもう一度聞くとしよう。よく考えるがよい。時間はたっぷりとある、たっぷりとな」
そう言うと、一人だけゆったりと椅子に腰かけた。イヴェアムはそれ以上ルドルフに対して言葉を放ってもムダだと分かったのか、今度はアクウィナスに顔を向ける。
「国の防衛で、どれくらい保つ？」
「そうだな、こんなこともあろうかと、一応オーノウスには国へと戻ってもらった」
「そ、そうなのか!?」
「ああ。嫌な予感がしていたのでな。陛下には悪いが、俺の独断でアイツには戻ってもらっていたのだ。今アイツは国を守るために奮闘していることだろう。あくまでも、奴の言う言葉が真実なら……だがな」
「そ、そうか！　さすがはアクウィナスだ！」
「しかし、それでも勇者四人に、『人間族』と『獣人族』の国軍。二つの国の最高戦力が相手だ。オーノウス一人では厳しい……だろうな」
「一人ではない」
「ん？　どういうことだ？」
「我が国には頼りになる多くの同胞たちがいる。皆、優秀な者たちだ」
「……そうだな」
「……それに一人……」

「ん？」
「とても強い者と取引も――」
イヴェアムが言葉を発している途中、部屋を包んでいる結界がグラリと揺れた。
「な、何だっ!?」
イヴェアムは身構え、周囲を見回す。
「地震……でしょうか？」
側近のキリアが眉をひそめながら言葉を出す。
ルドルフたちも、この現象を把握できていないようで、驚きようは皆と同じである。つまりこれは彼にとっても想定外だということ。
だがその時、今まで瞑想していたジュドム一人だけが、ニヤリと頬を緩めていた。
【聖地オルディネ】に存在する《オルディネ大神殿》。さらにその大神殿の中にある《聖域の間》。そこは勇者の力が最も強く残っている場所である。
そこに入ることができるのも合計十三人と決まっており、中に入った者は、簡単には外に出ることができない。《勇者の遺物》と呼ばれる、この結界を張った勇者の持ち物を持った者がいれば、結界を一時的に弱めることができ、自由に出入りすることが可能。
また最初の者が入ったその時から二十四時間経つのを待てば出ることもできる。二十四時間後――結界がほんの少しの間だが緩むのだ。その隙を狙い外に出る。
そんな《聖域》の結界が、時間を待たずにグラグラと揺らぎを見せたのだから、皆の驚きは大きいものだった。
「こ、これは一体……？」
イヴェアムが部屋内を見回しながら戸惑いの声を上げた。
「ははは、安心しな、魔王ちゃんよ」
安心させるように、穏やかな声音でジュドムは言った。

※

「ジュ、ジュドム殿？」

ジュドムの顔に驚きや焦燥感は全く見られない。それどころか、待ちに待っていたと言わんばかりの笑みを浮かべて部屋の扉を見つめていた。

「ジュドム、あなたまさか」

ボートニスも、その美しい顔を戸惑いに歪めている。

「ああ、こんなこともあろうかと、きっちり保険はかけといた」

その言葉を聞いて黙っていられないのは、ヴィクトリアス王――ルドルフだ。

「どういうことだジュドム？　この揺れは一体何だ？」

「ルドルフ、そうそうてめえの思い通りには事は運べねえってことだ」

「何だと？」

「俺が会談が行われる日まで何もしねえでジッとしていたと思うのか？」

するとただ一つしかない両開きの扉が、ギィ……ソという音を立てて開き始める。

「――ジュドム様ぁ！」

その扉の向こうから、冒険者らしい格好をしている者たちが現れた。

それを見たジュドムは嬉しそうに「よっしゃ！」と笑うと、続けて「今だ魔王ちゃん、急げ！」と、急かすように言葉を発した。

「え、あ……はい！　お前たち！」

イヴェアムが近くに控えているアクウィナスたちに声をかけると、それぞれが頷きを返して扉へと急ぐ。驚きで固まっているルドルフたちを尻目に、次々と部屋から出て行く。

「よしボートニス、お前も行け」

ジュドムに促され、「分かったわ」と、彼女は杖を拾い上げてから扉へと向かった。彼女を見送った後、憮然とした様子のルドルフに、ジュドムが視線を向ける。

「やってくれたな、ジュドム」

先に言葉を発したのはルドルフの方だった。彼の瞳は怒りに燃え、頬が引き攣っている。

「はん、俺だってお前を信じていたかったさ。けどな、最近のお前のやり口を俺が知らねえとでも思ってたのか？

情報収集なら俺もそれなりに自信あるんだよ。この場所を会談に選んだのを知った時から、一応部下に《勇者の遺物》を探させておいた」

「……だが何故この中の状況が外の者に伝わったのだ？」

「……その答えは外に出てから答えてやるよ。それともてめえらは命欲しさにここにいるか？　まあここに居れば安全だからな」

それだけを言い残すと、ジュドムはその場から去った。

「……ど、国王様！　ど、どどうなさるおつもりで？」

そう聞いたのは大臣デニスだけでなく、五人の隊長たちにも明らかな動揺が見られる。ルドルフは険しい顔つきのまま、

「……こうなった以上、シナリオは変更されたということだ」

「で、では……」

「ああ、あの者もまだ動く様子はないようだし、我々も外へと向かうとしよう」

「し、しかし……」

デニスの不安は尤もだ。ここにいれば安全は保障されていたようなものだった。しかし、一度外に出れば、確実に『魔人族』から攻撃を受けるだろうことは想像できる。

「嫌ならお前はここに残ればよい。お主らもな」

五人の隊長たちの方にも視線を送るルドルフ。

「外の兵たちに、このことを黙っていたことが裏目に出るとはな」

この会談で魔王たちを閉じ込めるという話は、ここにいるデニスと隊長五人にしか話していなかった。あまり情報が漏れないようにしたためなのだが、もし知らせた上、厳重に警備しておけば、ジュドムの派遣した冒険者がここまで辿り着けなかったはず。

だからこそルドルフは後悔していた。しかし事が起きてしまった以上、ここにいても何も変わらない。

（そうだ。我々にはまだ切り札もあるしな）

ニヤリとした口角を、すぐに元に戻す。

「私は行く。このシナリオの先を……そして結果を見届けるためにもな」

ゆっくりした足取りで外へと向かうルドルフを見たデニスたち。
「お、おいていかないでくだされぇ！」
慌ててルドルフを追う。
その場に残る者は誰一人いなかった――。

※

「――さあ、説明してもらおうかジュドム？」
外へ出てきたルドルフを待っていたのは、もちろんイヴェアムたちの敵意だった。特にマリオネは、今にも飛びかかりそうな雰囲気を醸し出している。
周囲に多くの人間の兵士がいるとは言っても、彼が本気で暴れればものの数ではないだろう。デニスは恐怖に全身を震わせ兵士の陰に逃げている。
だがルドルフだけは、平静を装いジュドムに問い質していた。
「何故、《聖域の間》の情報が外へと伝わったか……だったか？」
「そうだ、あの部屋は完全に隔離された空間になっており、外からも中からも、決して情報は漏れないし、入ってもこないはずだ。それなのに……何故だ？」
ルドルフの疑問は尤もだ。事実、彼らがあの中にいる時、外の情報は一切入ってこなかった。扉のすぐ傍に待機しているはずの兵士の存在も、誰かの話し声さえも、何もかも伝わってはこなかったのだ。
そしてその逆に、中の情報も同じように外へは漏れないようになっていたはず。だが現実は、ジュドムの部下が異変を察知しタイミングよく現れた。それが不思議で仕方なかったのだろう。
イヴェアムたちもルドルフと同様の疑問を抱えており、ジュドムの説明に注目していた。
「別によぉ、中の情報が外に伝わったってわけじゃねぇよ」
「む？　どういうことだ？」
「……おい」
ジュドムが、自身のために駆けつけた部下の一人に声を掛けた。するとその人物が手に持った小さな短剣を手渡

す。
「おう、ありがとな。お前らは非戦闘民を避難させとけ」
部下が「はい」と返事をすると、その場から去っていく。
ジュドムは短剣を「ポートニス、これを」と言って差し出す。
彼女は反射的に短剣を受け取ったのだが、直後に目を大きく見開く。
「……こ、これは!?　ゆ、《勇者の遺物》――《プリズムナイフ》じゃない!?」
ポートニスの言葉に、ルドルフが険しく眉をひそめた。
「会談場所がここになることを知って、それを部下たちに探させていた。念には念を……ってことでな。それはお前が持っててくれ、ポートニス」
「い、いいのかしら？」
「ああ、お前なら信用できるしな。それと、ここから他の神官たちを連れて離れてろ。誘導は俺の部下たちがしてくれるはずだ。奴らにもそうするように通達してあるしな」
長い付き合いのお蔭なのか、それだけでジュドムの言いたいことを把握したようで、
「……分かったわ。気を付けてね」
と言って、ポートニスは大事そうに短剣を両手で抱え、他の神官たちを連れてその場から離れて行った。
「……一体」
「ん？」
「一体どういうことなのだ？　早く説明しろ、ジュドム！」
「そう怒鳴んなっての。ちゃんと説明してやっから。さっきも言った通り、別に中の情報が外に漏れたわけでもねえし、俺が部下に連絡を取ることができたわけでもねえ」
「……だろうな。その様子はなかったはずだ」
「ああ、けどよ。事前に対策くらいはできんだよ」
「……？　対策、だと？」
「そうだ。部下にはこう言ってあった。『もしも【ハーオス】、もしくは【ヴィクトリアス】が襲撃に遭うような事態になったら、《勇者の遺物》を使って、強制的に俺を《聖域の間》から出せ』ってな」

明らかに衝撃を受けたように、ルドルフやデニスたちは言葉を失って青ざめている。
「最近のお前は、明らかに変だった。だからこの会談の話も、本当にお前が心から望んでくれてんのか判断できなかったんだ。そのために俺は保険をかけただけなんだよ」
「ジュドムゥ……ッ」
歯ぎしりが聞こえてくるかのように歯を食いしばり、憎々しい感じでジュドムを睨みつけるルドルフ。
「本当はこんな保険なんてかけたくなかったし、無事に会談が終わってくれれば良かったんだけどな。けど……お前は俺を裏切った」
ジュドムは落胆の溜め息を大きく吐いた。
「そんなことはどうでもいい！　結果的に出られたのだからな！　今はやるべきことがある！」
マリオネが怒り心頭。我慢の限界と言わんばかりに、周りにいる『人間族』を睨みつけていた。今にも爆発しそうな怒気が彼から溢れ出ている。
「確かにそうだ。姫……いや陛下、早々に【ハーオス】の情報を得た方がいいだろう。ジュドムの言う通りならば、【ハーオス】が襲撃を受けているのは本当だ」
アクウィナスのその言葉に「そ、そうだな！」と、口を開いたイヴェアムだったが――。
「そうではないっ！　今こそ思い知らせてやるべきだ！　我々を裏切った報いをな！」
明らかな殺意とともに、マリオネが両手に魔力を宿し始めた。周りにいる兵士たちに緊張が走る。デニスなどは「ひぃ！」と腰を抜かしていた。
「よせマリオネッ！」
「何故止めるのですか陛下っ！　今は外、このような脆弱なゴミどもなど、ものの数分で！」
「よせと言っているっ！」
イヴェアムがキッと睨むと、マリオネの動きがピタリと止まった。
「……納得のできる理由を聞かせてもらいますな？」
「今は何もかもが疑問で一杯だ。ヴィクトリアス王の言うように、勇者たちや『獣人族』が橋を渡って魔界へ攻め入ったといったが、【ムーティヒの橋】にはイーラオーラが常に控えているし、今はシュブラーズやグレイアルドだっているんだぞ？　私たちが橋を渡る前に通ろうとするならイーラオーラから情報が来ているはずだ。そうだなキ

リア？」
「その通りです。テッケイル様の情報は常に私に入ってきますので、異常があればすぐにでも陛下のお耳に入れます」
ここに来る途中、橋に争いの様子はなかったし、勇者だってそこにいた。もし彼らが暴れたとしても、シュブラーズたちが何とかしてくれているとイヴェアムは信じているのだ。
途端に優越感を含んだ笑みを浮かべたマリオネが「なるほど、そういうことか」と口にした。
「ふん、読めたぞ。そもそも獣人どもと同盟を結んだという話は虚言であろう。今思えば我々の動揺を誘うためか？　陛下を結界に閉じ込めて、その間に何をしようとしていたのかハッキリとしないが、たとえ国に襲撃をかけようが、脆弱で愚かな畜様ら人間が【ハーオス】を落とせるわけがない。我々を甘く見過ぎだ人間どもが」
自分たちが上位に立った。そんな感じで言葉を発するマリオネに対しルドルフが、「……ははは」と、何故か突然乾いた笑い声を上げた。
「どうやら全ての思惑が外れておかしくなったようだな」
笑うことしかできないと判断したようで、マリオネも不敵に笑みを浮かべた。
しかし笑いを止めたルドルフが、またも余裕のある表情でマリオネを見る。
「いやいや、笑ってすまない。うむ、確かに当初予定していたシナリオとは食い違っているが……それでもこちらの思惑は進んでいる」
「ふん、強がりを」
「……魔王よ」
マリオネの言葉を無視してイヴェアムに話しかけるルドルフ。
「……何だ？」
「貴公は『魔人族』を信じていると言った」
「ああ、私は家族を信じている」
「ふむ、ならもしその家族が貴公を疎ましく思っていたらどうだ？」
「……何を急に」
「『魔人族』にだって感情がある。意思がある。なら個人の考えだって持っているはずだ。それとも、全ての『魔人

族』がお主に忠誠を誓っているとでも？　それこそ思い上がりではないかね？」

突然何を語り出したのだというのか。皆が不審そうに彼を見つめていた。

「考えてもみたまえ。いくらこちらと『獣人族』の最高戦力があるとはいえ、戦力が集中している橋を力ずくで渡る愚行をすると思うか？　一歩間違えば橋が破壊されかねないのだぞ？」

それは……確かにそうだった。【ムーティヒの橋】はそれほど頑丈というわけではない。もしそんな戦力同士がぶつかれば橋は簡単に壊れてしまう可能性が高い。

「いいことを教えてやろう魔王よ。信じられぬかもしれぬが、こちらの戦力は、全て無傷で魔界へと渡ったはずだ。無論……獣人たちもな」

「そ、それはありえんっ！」

「ありえん？　何故だ？」

「確かに力ずくで渡れる可能性はゼロではないだろう。しかし無傷など到底ありえん！　ここに来る途中に勇者たちを見た。つまりその時は、まだ橋を渡ってはいなかったということだ。その後に渡ったとしても、こちらには信頼できる仲間たちがいる。こちらの最高戦力が三人もいるのだぞ！」

イーラオーラもその数に入るほどの実力者たということをイヴェアムは認めている。

「故にもし戦いになったとしても、無傷など絶対ありえん！　仮に突破できたとしても、疲弊した兵力など、我が国軍なら追っ払うくらいできるはずだ！」

するとルドルフがとんでもない発言をし始める。

「……もう一つ面白い情報を教えてやろう」

「……面白い情報……だと？」

「獣人や勇者たちが魔界へと渡ったのは――――貴公らが橋を渡る前だ」

「――っ!?」

イヴェアムたち魔人側は、彼が言い放った言葉の意味を瞬時に理解できずに固まった。

「そ、それこそもっとありえん！　橋には常にイーラオーラが控えているし、もし争いになっているならこちらへ情報がやってきているはずだ！　そうだろっ、キリア！」

「……その通りです。そのような情報はテッケイル様から届いておりません」

「見ろ！　やはり貴殿の虚言か！」

目一杯に声を張り上げて言うイヴェアムに、ルドルフは微かに頬を緩める。

「だから言っているであろう。こちらの戦力は無傷で通ったと」

「だからそんなことは――」

すると彼女の言葉を止めるように、アクウィナスがイヴェアムの肩に手を置く。

「……アクウィナス？」

目を細めたアクウィナスが、ルドルフに視線を向けた。

「なるほど、お前の言を素直に受け取るのであれば、イーラオーラは……」

「……そう、彼は――――こちら側の魔人だ」

またもイヴェアムが固まる言葉が吐き出された。

バクバクとイヴェアムは口を動かしているが声にはなっていない。あまりにもルドルフの言葉が衝撃的だったためだ。

「彼がこちら側についてくれたからこそ、今回の作戦を進められたのだよ」

「イーラオーラが裏切った……だと？」

マリオネが呟くように言うが、彼も完全には信じていない様子だ。

「いや、しかしもしそうなら、奴らの強気の発言の理由に説明がつく。それに確かにそれなら無傷で橋を通過できる。それに奴には魔界各地の転移魔法陣の守護も任せている。それを使えば、大量の兵士を短期間で【ハーオス】へ向けられる……！」

マリオネの見解を受け、今度はルドルフが優越感を含んだ笑みを浮かべた。

「ははは、『魔人族』という存在は、裏切りとは切っても切れぬ縁で結ばれているようだな。信じられぬか？　同胞が同胞を裏切ることが」

「……嘘だ」

「む？」

「お前の言っていることには根拠がない！　こちらの動揺を誘うだけの詭弁だ！」

イヴェアムは全力でルドルフの言葉を否定する。

「……はぁ、今更貴公らを動揺させて何になる？　まあ、信じたくないのであれば、無理に信じなくともよい。しかし――」

ルドルフは、チラリとあるところを見て、

「――実際にその目で見ると、さすがに信じられるのではないかね？」

「……何を言って……え？」

イヴェアムは自分の身体の違和感に気づいて、それが胸から伝わってくることを認識し、ゆっくりとそこに視線を落とした。

おかしい。おかしい。おかしい。

何故……何故自分の胸を突き破って誰かの手が見えているのだろう。

そして何故、その手に見覚えがあるのだろう。

考えたくはない。考えたくはない。

だがその手の持ち主を確認しなければならない。

痛みよりも、確認することの恐怖で顔を歪めてしまっていた。

顔を回して、背後にいる者の顔を見つめる。
視界に映ったその顔を見て、驚愕を越えた思いが全身を貫く。
何故……何故そこに――

「あなたがいるの――――キリア」

第四章・ヒイロ、参戦！

イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングの身体から引き抜かれたキリアの腕。同時に穴の開いた右胸と口から大量の血液が噴出した。
キリアは何の感情も籠らない無表情のまま、崩れゆくイヴェアムを見ている。
するとキリアの背後から大きな人影が迫る。キリアは瞬時に身を屈め、大きな人影の攻撃と思われるそれを避け、そのままその場からあっという間にルドルフ側へと移動した。

「……ちっ」

人影の正体はアクウィナス。手刀を以てキリアを薙ぎ払おうとしたらしい。だがさすがの彼も、まさか側近であるキリアがそのような暴挙に出るとは露ほどにも思っていなかったらしく、隙を突かれてしまったようである。
ジュドム・ランカースもまた、突然のことに呆けながら固まっていた。

「へ、陛下ぁぁぁっ!?」

マリオネが強張った表情で慌ててイヴェアムの元へ駆けつけ、キリアを睨みつける。

「キリアァァッ！　貴様何のつもりだぁっ！」

「ぐ……っ」

「へ、陛下!?　ご無事ですかっ！」

マリオネがイヴェアムの身体を優しく抱え上げると、イヴェアムもまた胸を押さえながら必死に起き上がり、自身の側近を信じられないといった目で見つめた。

「どうかね、魔王？」

キリアの言葉が聞きたかったイヴェアムだったが、ルドルフの言葉が発せられた。

「胸の痛み……そんなものよりも心が痛いのではないかね？　教えてやろう……その痛みが――――裏切りの痛みだ」

嘘だ。嘘だ。こんなの何かの間違いだ。そう心の中でイヴェアムは何度も繰り返すが、この痛みのせいで、これが現実に起こっていることを否応なく痛感させられる。

そしてその現実は、ルドルフ側にキリアが立っているということだ。

「どう……して……どうしてなの……キリア……？」

夥しいほどの血液を流しながら、縋る気持ちでキリアを見つめる。

「よ……弱みでも……握られているの……？」

そう、それしか考えられなかった。そう思うと、途端に憎しみが湧き上がり、ルドルフに怒りの矛先を向けるように視線をぶつける。

だがイヴェアムの問いにキリアは答えない。先程とは……いや、今までとは違い、イヴェアムをまるで地べたに這いずる虫を見るかのように冷ややかな視線を向けているだけ。

「姫、現実を見ろ。奴は……キリアは裏切り者だったということだ」

アクウィナスが淡々と言うが、イヴェアムは首を大きく左右に振る。

「嘘だっ！　そんなことあるわけがないだろう！　アイツは……キリアは私が小さな頃からずっと傍にいてくれていた友人なのだぞ！　そうだろっ、キリアッ！」

悲痛が混入した言葉が飛び、ようやく今まで黙っていたキリアが口を開いた。

「私が、ですか？　それは何かの間違いでしょう。私は今日、初めてあなたと会いましたので」

キリアがアクウィナス以上に何でもないような様相で言葉を並べ立てるが、それを聞いているイヴェアムには到底理解できるものではない。

「は、初めて……会った？　何を……何を言っているの、キリア？」

すると驚くべき答えが返ってくる。

「私は識別番号０３―戦闘特化型ヴァルキリア。端的にいえば人造人間……あ、間違えました。一応『魔人族』ですから〝人造魔人〟ですね」

機械のように全く表情を変えずに言う彼女の声は、まるで冗談かなにかのようにイヴェアムの耳に届いていた。

「ヴァルキリア……！　まさか……いやそんなはずは」

突然訝しむように眉をひそめるアクウィナスの呟きにイヴェアムもハッとなって、彼の普段は見せない戸惑いがちの顔を見つめた。

「し、知っているのか……アクウィナス？」

アクウィナスが、段々と顔から血の気が引いていくイヴェアムの顔を見て微かに首を振る。

「今はそのようなことより……マリオネ、姫を……陛下を頼む」

「貴様はどうするつもりだ？」

「落とし前はつけさせてもらう」

ルドルフとキリア――敵を鋭い目つきでアクウィナスが睨みつける。

「俺がここで戦えば陛下にも被害が及ぶだろう。お前は一刻も早く陛下を安全な場所へ」

「ふざけるな……と言いたいところだが、確かに陛下がこの様子では放っておくと危険なのも確かか……ええい！　貴様らぁ！　覚えておけっ！　『人間族』は必ず我らが全て滅ぼしてやるからなっ！」

「ぐ……マリ……オネ……ッ」

マリオネはそう宣言すると、イヴェアムを抱えてその場を離れようとする……が、

――――いかせはせぬよ。

マリオネの目の前に、ある人物が立ち塞がっており、イヴェアムたちはギョッとなる。

「き、貴様は……っ!?」

「ガハハハハ、あの時はよくも逃げてくれたな……魔王よ」

獅子のような立派な鬣を持ち、鍛え上げた筋肉隆々の肉体に、凄まじい覇気を纏うまさしく武人。それは――

獣王レオウード・キングだった。

「むぅ、このような時によもや貴様まで」

マリオネは険しく眉を寄せている。それもそのはずだ。まさかこのような危機的状況の中で、【獣王国・バシオン】の国王までもが現れるとは最悪な事態だった。

「――父上」

「下がっておれ、レッグルス。あの魔王はこの獣王が仕留める。それが今回、人間どもと手を組んだ条件なのだからな。わざわざこの近くで待っていた甲斐があったというものよ」

レオウードの傍にいた、第一王子であるレッグルスにそう言うと、羽織っていた赤いマントを脱いでレッグルス

に渡した。その膨れ上がっている筋肉を準備運動とばかりに動かすと、殺気を充満させたオーラを体中から迸らせる。

「くっ、このままでは……！」

マリオネは雰囲気からレオウードが一筋縄ではいかないと感じ取ったようだ。レオウードの強さは《魔王直属遊撃隊》に匹敵するかそれ以上。さらにイヴェアムを抱えたままでは、まず間違いなく勝てないだろう。

しかし一刻も早くイヴェアムの傷を治さないと命が危ない。

「マリオネ……私を置いて……逃げろ」

「ふざけたことを仰るな、陛下。我々はあなた様を守るためにここに立っておるのです」

彼の言葉は頼もしい。しかし自分のせいで彼までもが命を散らしてはやり切れない。

イヴェアムは、どうすればここを乗り切れるのか必死に思考を巡らしていると……。

「――――マリオネッ！」

その時、また思わぬ人物がその場に現れた。

「シュ、シュブラーズッ!?」

国境で警備を任されていたシュブラーズだった。

余程急いで来たのだろう。いや、恐らく全力で休まず来たのだ。その証拠に彼女の服も乱れ、大量の汗をかき息も絶え絶えといったところ。

だが何故その彼女がこの【聖地オルディネ】にやって来たのか瞬時に理解できなかったようで、マリオネが少し距離を取りながら尋ねる。

「……何故このようなところにいる？」

もしかしたら彼女もまた裏切り者かもしれないから、と考えたに違いない。

イヴェアム自身は、味方の登場に幾ばくかの安堵を覚えていたが。

するとシュブラーズもマリオネの思惑を察知したように、不用意には近づかないようにして口だけを動かし始める。

「……イーラオーラが裏切ったわ」

普通ならとても信じられないことではあるが、ルドルフからも聞いており、キリアも裏切っていることから、イヴェアムはルドルフの言葉の真実味を感じて歯噛みをした。

「……グレイアルドはどうした？」

「っ……か、彼は恐らく……」

マリオネの質問に対し、悲痛な面持ちでシュブラーズが口ごもる様子を見て、グレイアルドがイーラオーラの手にかかったのだと理解できた。

「そんな……グレイアルド……ッ」

悔しい。イヴェアムは悲しみと怒りで震える身体を抑えられなかった。

その負の感情が傷口を広げたのか、イヴェアムは咳込みながら血を吐く。

「陛下っ!?」

シュブラーズがイヴェアムに手を伸ばそうと叫ぶが、

「止まれっ！」

マリオネが制止をかけた。

「で、でもマリオネ！　陛下凄い傷じゃないのっ！」

「いいからそこより動くな！」

マリオネは彼女を簡単に信用するわけにはいかないのだろう。もしこれが演技だとしたら、またキリアのように突然攻撃を受けるかもしれないのだから。

マリオネに強く言われ、足を止めたシュブラーズ。そのまま周囲を見回して、今の状況を把握していく。

「……そう。ここも大変なことになっているようねぇ。それに……！」

ルドルフの近くにさも当然のようにいるキリアに視線を向け、険しい目つきを見せる。

「まさかキリアが……。ならイーラオーラが言っていたあの方っていうのはキリアのことなのかしらぁ……？」

「む？　何を言っておる？」

マリオネが探るような目で問い質す――が、イヴェアムがまたも血を吐き出す。

「はあはあはあ……うっぐぅ」

「へ、陛下!?」

容体が悪化して、イヴェアムは呼吸がし辛くなってきた。この止めどなく流れ出ている血液を止めなければ、近いうち死が訪れることは間違いない。そこへ――。

「魔王ちゃん、これを呑め」

「お、おい貴様！　一体何を！」

やって来たのはジュドムであり、彼は小さな黄色い玉をイヴェアムに呑ませようとしてきた。当然マリオネはそれを素直に許容することなどできないようで、彼から距離を取る……が、イヴェアムがマリオネの腕を掴み「待て……」と言うと、さらに続ける。

「ジュ……ジュドム殿……？」

「これは失った血液を補うための《増血薬》だ。とりあえずこの血の量はヤベェ。このままじゃ失血死しちまう。信じろ魔王ちゃん、俺は敵じゃねえ」

ジュドムの瞳をイヴェアムは真っ直ぐ見つめる。

だが一番信頼していたキリアに裏切られたショックで、とても素直になれないでいた。

信じたい。信じたいが……。

迷っている最中、突然キィィン……と耳鳴りが襲った。

イヴェアムだけが感じていることではなく、他の者もまた聞こえているようだ。

そして不意に、かなりの魔力をイヴェアムは感じた。
（あれ……この魔力の感じは……）
その得られた感覚で、ここにはいないはずの人物の顔が思い浮かぶ。
イヴェアムの前方――その空間に歪みができる。その中から――
「――ん？　ここはどこだ？　……お、いたいた。おい魔王、獣人まで相手にすると聞いていない……って、何だこの面子は？」
脳裏に浮かんでいた赤ローブを纏った一人の少年が姿を見せた。

※

丘村日色がまず感じたのは、空気の重さが半端ないということ。
あちこちから殺気や敵意が飛び交っている。しかも今、周りにいる者たちのほとんどが、その存在感の強さだけで、只者ではないと強制的に理解させられた。
極めつけは、目的の人物――魔王イヴェアムが血塗れになって、変なオッサンに抱えられていることだ。
日色は自分が相当面倒そうな空気の中に飛び込んでしまったことを認識しながらも、静かに周囲を見回した。視界に大きな神殿のような建物が入る。
（これが魔王の言ってた《オルディネ大神殿》だな）
今回の会談について、ある程度は聞かされていたので驚きはなかった。強いてあげればその荘厳なる建物の大きさに感嘆したくらいだ。
「き、貴様っ、一体何者だ！　というかどこから現れたぁっ！」
マリオネが、突然現れた日色に警戒を強め睨みつける。だが日色は彼の質問には答えない。黙ってイヴェアムを見下ろしている。
また他の者も、突然の来訪者に言葉を失って戸惑ったように固まっていた。
「キリアのあの顔……ならあの少年は奴の手の者ではない？」
小さく呟くアクウィナスは、キリアの怪訝そうな表情を見てそう判断したようだ。

「……ヒ……イロ？」
ようやく日色の存在に気づいたのか、辛そうな表情でイヴェアムが掠れた声を出した。
「陛下？　あの小僧を御存知なので？　魔人のようですが……」
マリオネが尋ねると、イヴェアムは意識が朦朧としているのか、虚ろな瞳を見せていた。
「あ、いや……これは幻か……ヒイロ……には国を任せ……」
「国を？　何を言っておられるのですか、陛下！」
二人のやり取りを外に置き、日色は現況を見て冷静に分析を開始していた。
（どうやら会談は失敗に終わったようだな。人間も獣人もいる……つまり魔王たちは奴らの包囲網に遭い身動きが取れなくなってるってところか？　だが仮にも魔王、そんな奴にこれほどの重傷を負わせられるとは……）
キョロキョロともう一度周囲を見回す。
（やったのは……アイツか？）
そう思い獣王レオウードを見つめる。彼の佇まいから普通の奴らとは違ったオーラを感じた。言ってみれば、旅仲間であるリリィン・リ・レイシス・レッドローズを怒らせた時の雰囲気に似ているのだ。つまり――規格外。
（コイツらは……仲間っぽいか）
また他にも規格外っぽい者たちはいた。アクウィナスにジュドムだ。しかしどうにも魔王と敵対しているような感じは見受けられない。
（……ん？　アイツは……よく分からんな）
キリアに視線を向けたが、強いのか弱いのか判別つかない。一言で言うと不気味さだけを感じた。人のような人でないような。それはモンスターと出会った時のような感覚でもあり、強そうな『魔人族』と出会った時のような感覚でもあった。それと同時に意思も何もない人形のようにも感じる。
しかしそこで彼女の右手が真っ赤に染まっているのを確認した。
（なるほどな。魔王をやったのはアイツだったのか）
そのまま視線を他へと動かしていく。
（……ん？　あのオッサンは……！　あ、そうか。確か国王だ国王。名前は……まあ国王でいいか）
すっかり名前は抜け落ちている日色だった。しかし自分がこの世界に召喚されて、初めて目にした【人間国・ヴ

イクトリアス】の国王であることは薄々覚えていた。向こうはこちらには気づいていないようだが。
（まあ、『インプ族』の姿だし、印象もないだろうからな）
召喚されてすぐに彼の前から姿を消したので無理もないだろう。
そうやって若干の懐かしさを覚えていると――。
「――あ、君はあの時のお！」
不意に声を掛けられ、そちらに視線を向けると、そこには最近見た女性が映っていた。
（この女、確か魔王を迎えに来た……？）
そう、シュブラーズのことだった。喫茶店でイヴェアムと話している時、彼女がイヴェアムを喫茶店にまで迎えに来ていたことを思い出した。
「知っているのか、シュブラーズ？」
「え、ええまあ。簡単に言えば陛下の……コレかしらぁ？」
マリオネの問いに、シュブラーズは凡談めかしたように小指を立てる。
「だ、誰がこ、ここ恋人ぐうっ!?」
それを見ていたイヴェアムが大声を張り上げるが、その際に腕に激痛が走ったような様子を見せ、マリオネに名前を叫ばれている。自身が重傷だという事実を忘れているようだ。
だがそのお蔭か、先程まで虚ろだった瞳に力が甦っているように見える。
「はあはあはあ……ヒ、ヒイロ？　こ、これは……幻ではないのか？」
「おい魔王、オレはお前に文句を言いに来た」
イヴェアムにビシッと指を差す日色。
「お前な、前に話した内容に間違があるんだが、そこをどう考えてるんだ？」
「そ……そこ？　な、何を……？」
またも意識が混濁してきたのか、瞼が重そうなイヴェアムである。
「オレが聞いたのは人間たちが戦争を仕掛けるかもしれないから、その防衛と保護に力を貸せということだった。それなのに何で獣人まで襲ってきてるんだ？　いやそもそも何でオレがわざわざ雇い主の所まで……って聞いてるのか？」

日色は不機嫌面で物を言うが、どうやらイヴェアムはそれどころではなさそうだ。このままではスムーズに話が進められない。
「陛下！　ええい、何者か分からんが後にせい！　今は――」
「黙れ髭男爵！　オレは話をしに来たんだ」
「ひ、髭男爵……!?」
マリオネは日色の物言いに頬を引き攣らせているが、日色にとって優先すべき事項は、イヴェアムに問い質すこと。なので……。
「さっさと起きてもらうぞ、魔王」
そう言いつつ日色は指先に魔力を宿すと動かしていく。『完治』という文字を形成し、それをイヴェアムに向かって放った。
「貴様何をっ!?」
イヴェアムの安否を気遣うマリオネが、咄嗟に飛んでくる文字を弾こうと腕を伸ばしイヴェアムを守ろうとするが。
日色は地面に向けて指先をクイッと動かすと、まるでフォークボールのように文字の進む方向が曲がり、マリオネの腕をかわした。そのまま文字はイヴェアムの胸元に張り付く。
「――治せ、《文字魔法》！」
日色の呟きと同時に文字から放電現象が起き、文字が弾け飛んだかと思うと、その欠片が眩い光の粒子となりイヴェアムの身体を包み込んでいく。
「うっく……！　……あ……温かい。何て心地好い光なの……」
イヴェアムから苦悶の表情が消えていく。その顔は、まるで母親に抱かれていた頃を思い出させるような安心感を彷彿とさせていた。
「な、何なのこの凄まじい魔力はっ!?」
目を見張って叫ぶシュブラーズだけでなく、日色の魔法をその目にした者たち全員が驚愕の色に顔を染めていた。
そしてイヴェアムを包んでいた光が徐々に弱まっていく。
「おい貴様ぁ！　陛下に何をしたぁ！」

「さっきからうるさいぞ、髭男爵」
「だ、だから髭男爵と呼ぶでないわぁっ！」
確かにマリオネの口髭はクリンとしてつい笑ってしまうかもしれないが、『魔人族』のトップクラスに対して放つ言葉ではないだろう。
だが日色はまったく気にせず、意識はイヴェアムに向けている。光はすでに消失した。
「いつまで寝てる。さっさと起きて事情を説明しろ魔王」
「な、何を言っておる！　陛下は――」
するとムクッと、イヴェアムが自分の力だけで身体を起こす。その表情はキョトンと固まっており、自身の胸を恐る恐る触っている。
「……？　い、痛みが……ない？　き、傷も？」
「へ、陛下？」
さすがのマリオネも、突然顔色の良くなったイヴェアムを見て、首を傾げている。
「……な、何をしたのだ、ヒイロ？」
当然自身の身体に起こった謎を、イヴェアムが日色に聞いてくる。
「そんなことはどうでもいい。お前が死ねば契約が消える。それはオレも困るからな」
「ヒ、ヒイロ……そうか、お前が治してくれたのか。……礼を言う」
胸に手を置いたまま、ホッとしたような微笑みをイヴェアムが浮かべた。
だが次の瞬間、ハッとなって顔を上げ、
「し、しかしヒイロ、何故ここに？　国の防衛を依頼したはずだぞ！」
「その前に納得ができないことがあったから確かめにきただけだ。契約内容にも納得ができなければ個人で動くことができると書かれてたはずだぞ」
彼女と交わした《契約の紙》での契約。そこには確かに日色の言ったようなことも書かれていた。
「依頼ですと？　ど、どういうことですか陛下？　いや、それよりも本当にお身体の方は良いので？」
「あ、ああマリオネ、ヒイロは私が雇った。だから安心していい。それにこうして身体も治してもらったのだ」
「雇った？　いや、しかし……」

それでも納得し切れていない様子だ。
「それはホントか魔王ちゃん。一応《増血薬》を呑んでおいた方がいいんじゃねえか？」
そう言ってジュドムが、イヴェアムに先程彼女に見せた玉を差し出してきた。
「感謝します、ジュドム殿。だが何故か身体はすこぶる快活のようです。恐らくヒイロの魔法のお陰ですが」
先程まで血の気が失せて青白かったのに、今は血色の好い健康肌をしている。
ジュドムが安心したように胸を撫で下ろすと、その視線を日色へと向けた。
「しかしお前さん、見たところ『魔人族』――インプだろ？　魔王ちゃんを治したってことは、今の魔法は治癒――光魔法だ。一体何者なんだ？」
魔人が光魔法を使えないというのは周知の事実なので疑問が浮かぶのは当然だろう。
だがそこに警戒度MAX状態のアクウィナスから注意が飛んでくる。
「いろいろ疑問を解決したいのは分かるが、そろそろこの状況が動くぞ。見てみろ、獣王が痺れを切らし始めている」
確かにレオウードは、日色の登場のせいで戦うタイミングを逸していたが、イヴェアムが治癒された様子を見て、我に返ったように全身から殺気を迸らせて睨んできている。そのまま彼が両拳に力を集中し始めた。
「ウオオオオオ……ッ」
レオウードを中心にして、ミシミシッと大地が軋み始める。
「このまま戦えばここら一帯は更地になりそうだな」
アクウィナスの言う通り、レオウードから感じる圧倒的な力が解放されればそうなりそうだ。彼が溜めている力は、日色も目を見張るほどである。
するとレオウードが突如として空高く飛び上がり、日色たちの真上に移動。
「マリオネ、陛下を！」
早口でアクウィナスがそう言い、マリオネがイヴェアムを支えて逃げようとした時、
「大丈夫だマリオネ。一人で動ける。皆この場から離れろ！」
イヴェアムは自分で動けることを示し、皆と一緒にその場から離れようとする……が、
「喰らえっ、魔人どもォオオオオオッ！」

両拳を腰元まで引いた形で、そのまま地上へと凄まじい勢いで落下してくる。

「ウオオオオオッ！　《極大嬉牙撃》ィイイイイイイッ！」

全身から真っ赤な炎が噴出し、その炎がレオウードの両拳に集束。炎を纏った両拳を開いて前方へと突き出す姿は、まるで獅子が口を開いているかのよう。

落下の衝撃と、レオウードが繰り出した技の破壊力で凄まじい衝撃波が周囲を薙ぎ払っていく。それだけでなく、ほぼ同時に、彼を中心にして波紋のように広がる炎。

獅子の牙の餌食から逃れたと息を吐いても、襲い来る第二波とも呼ぶべき炎の波がターゲットたちを逃がさない。

日色たちも、攻撃を直接受けないようにその場から離れはしたが、第二波があるとは思っておらず、目の前に炎の壁が迫って来ていた。呑み込まれればただでは済まない。

凄まじい熱量とスピードで迫ってくる脅威に対し、日色は思わず溜め息を漏らした。

（おいおい、何でこんな目に遭ってるんだ？）

もちろんここに来たことが原因なのだが、こんなややこしい場面に巻き込まれるとは思ってもいなかった。

だが呆然としていると炎に包まれ死んでしまうので、即座に何とかしなければならないのだが、日色は慌ててはいない。一応身体には予め《設置文字》である『防御』の文字を施してある。それを使えばこの程度の攻撃なら防げるはず。

しかし、傍にいるイヴェアムを殺させるわけにはいかない。何故なら彼女は貴重な《フォルトゥナ大図書館》への切符なのだから。

それ故、彼女だけでも《文字魔法》で守ろうかと思ったその時、日色の目の前にアクウィナスが立った。彼は目の前に迫ってくる炎を、その紅い目で睨みつける。

（……！　何だこの魔力の質は……!?）

それは明らかにアクウィナスから感じるのだが、とてつもなく濃い魔力だ。小さい箱の中に、これでもかというほど魔力を圧縮しているような……。

（何をするつもりだ？）

日色が警戒を強めてアクウィナスに意識を向けていると、驚くことに迫ってくる炎が、薄白く変色していく。変色した部分から、炎は数え切れないほどの小さな粒状となって霧散し始める。

（何だコレは……!?　砂？　いや……灰？）

それは灰だった。炎は瞬時にして灰になり、地面に散っていったのである。

「……姫、無事か？」

「ああ、さすがはアクウィナスだ！」

その言葉で、炎を灰化させたのはアクウィナスの仕業だということを日色は知った。

アクウィナスはイヴェアムの無事を確認すると、再びレオウードの方を注視する。

大きなクレーターの中心では、忌々しげにレオウードがアクウィナスを睨みつけていた。

炎が灰になって助かったのはルドルフ側も同じだったようで、兵士たちや大臣であるデニスは生きた心地がしないといった感じで大きく安堵の息を吐いている。

「むぅ……やはりこの程度では傷一つ付けられんか。さすがは――《魔眼の将》だ」

レオウードは舌打ちをしながらも、何故か嬉々とした表情だ。まるで戦うことに喜びを見出しているように見える。

（これだからバトルジャンキー系の奴は始末に負えん）

日色はジト目で、ライオン野郎と名付けることに決めたレオウードを見つめる。

（しかしコイツら……確認してみるか）

そう思い、『覗』の文字を使って、相手の《ステータス》を見ることにした。これだけの強さなら、相当のレベルに達していると思ったからだ。

アクウィナス・リ・レイシス・フェニックス

Lv 243

HP 11645/11645
MP 8233/9574
EXP 249502212
NEXT 463080

ATK 1827(1784)
DEF 1569(1625)
AGI 1891(1971)
HIT 2023(2045)
INT 2361(2390)

《魔法属性》 闇

《魔法》 デッドアロー(闇・攻撃) ヘルフレイム(闇・攻撃) ダークリベレイション(闇・移動) デスアウト(闇・攻撃) フールアムド(闇・支援) シャドウカーテン(闇・支援防御) ブラックホール(闇・攻撃) エンベラーノヴァ(闇・攻撃)

《称号》 闇眼を持つ者・主に愛されし存在・殺りし者・忌み人・最上級魔人モンスターの闇・ユニークジェノサイダー・人斬り・魔眼の将・魔王直属騎衛隊・無愛想・冷血無比・強者を求める者・生と死を見続けてきた者・闇人極めた者・闇越者・闇人族最強・魔の皇帝

コイツはとんでもない《ステータス》だと思った。レベルもさることながら、日色が今まで見てきた誰よりも凶悪な称号の持ち主のようだ。

特に《魔人族最強》……《魔の皇帝》も気になるが、《魔人族最強》……シンプル過ぎて逆に怖いな。しかもこの半年間、レベル上げに集中してきたオレよりも上だとはな……)

ヒイロ・オカムラ

Lv 204

HP 7880/7880
MP 11370/15500
EXP 122783322
NEXT 237766

ATK 1344(1464)
DEF 1105(1120)
AGI 1617(1667)
HIT 1000(1050)
INT 1800(1805)

《魔法属性》 無

《魔法》 文字魔法(ワードマジック)(二文字解放・空中文字解放・多重書き解放・二文字解放・複数発動解放・設置文字解放・三文字解放・連層操作解放・範囲指定解放・自動書記解放・四文字解放)

《称号》 巻き込まれた者・異世界人・文字使い・覚醒者・人斬り・想像する者・ユニークジェノサイダーモンスターの闇・食いしん闇君・我が道を行く・妖精の友・ミカヅキの飼い主・超速レベル上げ野郎・テレポーター・放浪者・輝光サムライ・闇越者・幼女落とし神・闇に好かれし者・ニッキの闇医・巻き込まれ体質・人ダラシ・子供のヒーロー・純感マイスター・謎解マニア・勘違いプリンス・超絶ダイバー・至高の闇・極めた者

自身の《ステータス》と比べても、アクウィナスのソレは驚きだ。『魔人族』の中でも特別に強いのだろう。日色が今まで会った中で、最高の《ステータス》持ちの上、称号にも《魔人族最強》とある。

本当に最強なのかは定かではないが、人々からそう呼ばれていることは間違いないはず。

(まあ、人間や獣人の中にも天賦の才を持ってる奴はいるしな。コイツは戦闘に長けた『魔人族』の中でも、最も才能に恵まれた奴ってことだろうな)

そうでなかったらここまでのレベルにならないし、なったところでこれほどの《ステータス》を有しているとは思えない。

(……ん? だがコイツの名前どこかで……気のせいか?)

どこかで見たことのある名前だと思ったが、思い出せないのでスルーすることにした。

また凄いのは彼だけでなく、イヴェアム、マリオネ、シュブラーズともども、凡そ常人には達することのできな

いレベルを有していた。
（魔王102、髭男爵167、デカチチ女128、それに……）
人間であろうジュドムと魔王レオウードのレベルも、自分やアクウィナスと同様に200レベルを超えていたので、つい感嘆の声を上げてしまった。
ただその中で、一つ気になっていた人物がいるのを思い出す。日色はすかさずその人物の方へ視線を動かした。

ヴァルキリア03号

Lv 200

HP 20000／20000
MP 0／0
EXP 0　NEXT 0

ATK 20000〇　DEF 2000〇
AGI 2000〇　HIT 2000〇
INT 300〇

《魔法属性》——
《魔法》——
《称号》造られし者

何からツッコめば良いか分からなかった。名前、パラメータ、魔法、称号、どれをとっても一様に疑問が浮かぶものばかりだ。
（何だアイツは……？）
すると日色が見つめていたことに気がついたのか、キリアは視線をぶつけてくる。
（偏り過ぎた《ステータス》だが、間違いなく強い……な。それに《造られし者》か……）
いろいろ疑問は浮かぶが、相手の目を見て敵だということは何となくだが理解できた。
「ヒ、ヒイロ……？　どうした、何かあったのか？」
イヴェアムが押し黙っている日色のことを気にしてか声をかけてきた。

「いや、何でもない。それよりこの状況どうするんだ？　オレは早く帰りたいんだが？」
「帰りたいのは私も同じだ。そう言えばヒイロは【ハーオス】から来たのだろ？　どんな様子だ【ハーオス】は？　あ、いや、そもそもどんな方法でお前はこちらに？」
矢継ぎ早に質問してくる彼女に対して鬱陶しいと思いつつも、確かにそれを説明しなければ話も進まないかもしれない。だがこの状況でのんびりと説明している暇もまたない。
「とにかく、話は落ち着いてからだ。さっさと帰るぞ」
「え？　あ、いやだから、帰りたいのはやまやまだが、おいそれと帰してはくれなそうだぞ。ヒイロが邪魔をする者たちを全員倒すとでも言うつもりか？」
殺気塗れのレオウードや、ルドルフたちに視線を向けるイヴェアム。
「はあ？　そんなめんどくさいこと誰がするか。オレへの依頼は国の防衛だろうが。それ以外は無料働きになる。オレは嫌だぞ」
「で、ではどのようにしてこの場を乗り切るというのだ？」
「その前にだ、帰るのはお前一人でいいよな？」
「い、いやいや、帰るのは皆でだ！」
やはりそうなるか、と日色は肩を落としつつイヴェアムを見つめる。
「……！　な、何だ？」
いきなり目を見つめられたためか、ドキッとした表情をイヴェアムが浮かべる。
「……最後に言うことは何かあるか？」
「は？」
「ここから帰してやるから、アイツらに言うことはあるのかって聞いてるんだ」
ルドルフの方を指差して言う。
「え……何を言って――」
「ああもう鬱陶しい！」
日色はイラッとして即座に指を動かす。
「こ、この魔力量は、前に見た――っ!?」

イヴェアムは、日色から発せられる魔力に目を丸くした。確かに以前、日色は彼女の前で魔法を使用しているのだ。

日色は空中に書いた文字を発動――。

『転送』と『三人』。

文字から放電現象が起きた直後、音もなく目の前からアクウィナス、マリオネ、シュブラーズの三名が消えて、誰もがポカンと口を開けて固まった。

この場にいる魔人らしき三人を、イヴェアムの味方だと判断して、魔法で【ハーオス】へ送ったのだ。

「ほら、奴らはもう国へ送ったぞ」

「え……は？　う、嘘……っ」

「嘘じゃない。奴らの魔力だって感じないだろうが」

「……!?　た、確かに。じゃ、じゃあ本当に？」

まだ信じ切れていないのか紺碧の瞳を大きく見開いて尋ねてくる。しかしいちいちこの場で説明するのは面倒だ。

「これで最後だ。何も言うことがなかったら、問答無用で送るぞ」

「あ、ちょ、ちょっと待って！」

慌ててイヴェアムがキリアに顔を向けた。

「キリアっ！　一緒に――っ!?」

イヴェアムはキリアも共に帰ろうと言いたかったのだろうが、彼女の無機質な目を見てゾッとした顔色を見せた。

「キリア……あなたは本当に……っ」

イヴェアムのキリアを想う気持ちをよそに、キリアはすでに行動を起こしていた。

凄まじい速さでイヴェアムへ肉薄し、彼女の胸を貫こうと貫手を放ってくる。

だが――先に驚愕の思いをしたのはキリアの方だった。突然イヴェアムの周囲に出現した青白い半球状の壁に、キリアは弾かれてしまったのだ。

「悪いが、コイツを殺らせるわけにはいかないんだよ」

そう言う日色の手の甲には『防御』の文字が光り輝いていた。予め文字を設置しておき、いつでも任意で発動できる《設置文字》を行使したのである。

「……私の攻撃を防ぐ？　何なのですか、その魔法は？」

弾き飛んだキリアは、体勢を整えてから淡々と無表情のまま疑問をぶつけてきた。

「答える義務はないな。精々何が起こったか思い悩むんだな」

相変わらずの日色節が炸裂した。

イヴェアムは防御壁を見て、ここなら安全だと思ったのか、決意を秘めた瞳をキリアへと向ける。

「キリア……何故お前がそちら側につくのかまだ私は理解できていない。だが私は、私の魔王を貫く！　そしてつか、お前の目を覚まさせてやる！」

「……はぁ、私は起きていますが？」

イヴェアムの言葉は、キリアには曖昧に腕押しのようだ。

悔しそうな表情をしながら、イヴェアムは鋭い視線をルドルフに移した。

「ヴィクトリアス王よ」

ルドルフはさすがに王なのか、彼にとっていろいろ予想外の出来事が起きてしまっていたようだが、威厳を保ち、イヴェアムの顔を無言で見返している。

「一つだけ言っておく。私は――私は諦めないっ！　何故な――」

ピシュン――と、一瞬のうちにイヴェアムの姿がかき消える。その後ろにはイライラしている日色がいた。

「話が長い」

最後に何か言うことはあるかと尋ねたのは日色だが、あまりにも話が長かったので我慢の限界にきてしまっていたのである。

イヴェアムの舞台にあっさりと幕を下ろした日色は、

「あ、そういやアンタはいいのか？」

ジュドムに声を掛けた。

彼は人間だが、イヴェアムを庇っていたように見えたので仲間と判断していた。しかし魔人ではない彼を転送していいものかどうか迷ったので、直接聞くことにしたのだ。

「話を聞くに魔界へ戻るんだろ？　俺は俺で、こっちでやることがあるからな」

それならもう用はないということで、そのまま転移して帰ろうと思ったが、

（あ、そういや言いたいことがあったんだっけか）

言いたい相手というのはルドルフだ。彼に目線を合わせる。

「おい国王」

「……？」

「アンタ、勇者どもを捨て駒にしたな？」

「……」

「ま、それはどうでもいいんだけどな」

いいのかよと周りから突っ込みが聞こえてきそうだ。

「あの時、召喚された当初は、オレはまだ何も知らないヒヨっ子で、強くなるまでは自分のことをあまり大っぴらにしないように旅してきた」

「……召喚……だと？」

ルドルフの眉がピクリと上がる。

「だが今は違う。オレの力がバレて目立ったとしても、もう問題ないほどいろいろ経験してきたしな」

「お主は一体何を……いや、待て。召喚……？　それにその態度……まさかお主……っ!?」

段々とルドルフの顔が驚愕に歪められていく。それが目色にとって僅かながらも楽しきを覚えるものだった。

「今なら言える。オレをこの【イデア】に召喚してくれたこと、とても感謝してるぞ」

「――っ!?」

「もう二度と会うこともないだろうから一応礼を言っておこうと思ってな」

「お主……まさか勇者とともに召喚されてきた……？」

「そう、ただの一般人だ」

王の愕然とした顔が面白くて目色がほくそ笑んでいる。だがそこでルドルフは自分の考えを切り捨てるように首

を左右に振る。

「ふん、バカを言え。お主は魔人であろうが！　あの時召喚されたのは――っ!?」

すると目色の顔が『インプ族』から元の目色の顔へと戻る。戻ったのは『元』の文字を使い、元の姿に戻ったから。

「こんな顔だった……か？」

目色が起こした現象には、その場にいる誰もが息を呑み静寂が支配していた。

「あ～少しはスッキリした。バカ弟子のバカっぷりと魔王の話の長さでイライラしてたが、少し気分が晴れた」

ストレス解消のために皆を戸惑わせて楽しんでいたのだ。

目色はもう一度『化』で『インプ族』の姿に戻る。

「さて、それじゃオレはここらで」

「待て小僧がアッ！」

「ああ？」

いつのまにか上空へと舞い上がっていたのは――レオウード。すでに先程のように両拳に力を溜めていた。先程の技を再度放つつもりのようである。

「魔王をどこへやったぁっ！」

「……自分で探せ、ライオン野郎」

それだけ言うとブイッと自分の指先に視線を置いた。

「んなっ！　ならその身体に聞くまでだアアアアソ！　喰らうがいいっ！　《極大獄牙撃》イイイイイイイイイッ！」

先程と同様に凄まじい破壊力を込めた真っ赤な猛威が襲い掛かってきた。イヴェアムを守る時に使用した防御壁と衝突する。

ビギギギギギィィッという顔をしかめてしまうような衝撃音が轟く。防御壁と相手の攻撃が衝突し合って、互いに激しく綺を削るような音だ。

ただ彼の力の方が上なのか、徐々に防御壁にヒビが入り始める。

「……ほう、さすがは獣王だな」

先程確認した《ステータス》に獣王と記載があったので、彼が【獣王国・バシオン】の国王だということは理解していた。

「だが残念だったな」

突然防御壁が眩い光を放ったかと思うと、レオウードが先程のキリアの時と同じように壁に弾かれて吹き飛んでしまった。

日色が新たに書いた文字――『反射』の効果。防御壁にこの文字効果を重ねて、相手の力を跳ね返したというわけだ。

レオウードは空中で身体を回転させて、転倒することなく地面に着地する。

そんな彼に対して一言。

「じゃあな、精進しろよ獣王」

それだけを言うと、日色は『転移』の文字を行使してその場から去った。

※

「そ、そんな……父上の《化装術》をいとも簡単に……！」

レオウード・キングの第一子であるレッグルスは、誰もが認める強い王の技をあっさりと跳ね返してみせた謎の少年に吃驚していた。

しかし当のレオウードは、怒って暴れ倒すわけではなく、

「ガ――ハッハッハッハッ！」

天を仰ぎながら何とも楽しそうに笑っていた。

「ち、父上……？」

そんなレオウードの様子に愚わず固まるレッグルス。そんな息子の困惑など露知らず、レオウードは自身の後頭部を軽くポンポンと叩き、

「いやー参った参ったぁ！　何だあのガキは！　このワシをコケにしおるとは、何とも愉快な小僧ではないか！　ガハハハハ！」

頭でも打ったのかとレッグルスは心配そうに近づく。

「おい見たかレッグルス、あの赤ローブのガキを！」

「え、あ、はい。そ、それより父上は大丈夫なのですか？」

「無論だ！　この程度では驚きはしたがダメージは受けん！　いや、しかし面白いガキだ！　是非とも今度は全力でぶつかり合いたいものだな！　ガハハハハ！」

豪快に笑うレオウードを見て、どことなくホッとしたような顔つきを浮かべるレッグルス。ここでキレて暴れ出さなかったことに安堵しているのだろう。そこへ――。

「――獣王よ」

「む？　……何用だ、人間王よ」

ルドルフが声をかけたのだ。

「何故貴公がこのようなところへいるのだ？　ちゃんと事が終われば、魔王は貴公へ手渡すと言っておいたはずだが？」

「なぁに、ワシはただただ人間を信用などしていないだけだ」

「……」

「確かにそういう条件で手を組んだ。しかし魔人と手を組むような王だ。こちらもいつ裏切られるか分かったものではない。だから用心のためにも自国の防衛に戦力を温存させておいたから、【ハーオス】へはそれほどの数の兵を送れはしなかったがな。まあそれでも腕利きの連中は向かわせてはいるが」

「ち、父上、戦力に関しては口にしない方がいいですよ！」

「おっと、悪い悪いレッグルス。しかしまあ、この機を狙って人間たちが我が国を襲うとは思えんよ。【ハーオス】で手一杯な上、自国の防衛にも回しているだろうからな」

ギロリと無表情のキリアを一瞥してから、視線をルドルフへと戻すレオウード。

「ここで待機していた理由は簡単だ。魔王の傍にはあのアクウィナスや、ジュドム・ランカースもおった。奴らがむざむざ貴様の手の平の上で転がされるだけとは到底思えなかったのでな。するとワシの勘は見事的中。当初、二十四時間は《聖域の間》に魔王らを閉じ込めておくつもりだったようだが、すぐに脱出された。ワシにとっては好都合だったというわけだ。ガハハハハ！」

ルドルフが悔しげにレオウードを睨みつけている。
「まあ、予想外にも魔王には逃げられたがな。世の中はそう簡単に思い通りに事は運ばぬということだ。しかしそのお陰で面白い出会いがあった！　今はそれを喜ぶとしよう！　それに魔王は魔界へと帰るはずだ！　すぐに向かうぞ、レッグルス！」
「は、はい！」
「ガハハ！　そこにあの小僧もいるといいんだがな！　面白い！　実に面白いぞ！」
声高らかに笑いながら、獣人の部下たちを引き連れてその場を去って行く獣王たち。
彼らが去って行くのを黙って見ていたキリアが、隣に立つルドルフに質問を投げかける。
「行かせてもよろしいので？　一応同盟国の王ですが？」
「ふん、それも名ばかりよ。下手に声をかけて奴の気分を害し、藪蛇になってもつまらぬ」
去って行くレオウードたちを一瞥すると、ルドルフが視線をキリアに移す。
「それよりもイレギュラーが起こり過ぎた」
「確かに、ジュドム・ランカースの動きには驚かされました。もっと十分に警戒をしておく必要がありましたね。それにあの赤ローブ……お陰で修正しなければならないことが山ほどできました」
「……シナリオはどうなっておる？」
「御心配なく。確かに当初の目的である魔王暗殺は達せられませんでしたが……」
「――おいルドルフ」
そこに敵意満々といった様子のジュドムが大股で近づいてきた。
「……まだいたのか、ジュドムよ」
「一体そこの女は何だ？　見たところ魔王ちゃんの側近だったみてえだが、よく今まであのアクウィナスまで騙せていたもんだな」
自身が認めるほどの強者であるアクウィナスを騙し続けていたということは、キリアは容易ならぬ存在だということ。少なくとも諜報活動に於いては。
「それもそのはずでしょう。普段あの少女の傍に控えていたのは私ではありませんから」
「……何だと？　な、何を言ってるんだお前さん？」

「今頃05号は、ご主人様とともにいるはずですから」
「ゼロゴ？　そういやそんなふうに名乗ってたなお前さんも。つうことは何だ、お前さんに似た姉妹が他にもいるってことか？」
「そうです。私の他に作られたのは全部で――」
――喋り過ぎですよ、03号。
※
突如ジュドムの耳に入ってきた声。その声の居所を探し、思わずギョッとなってしまう。闇を思わせるような黒いローブを着込んだ者がいたからだ。
「だ、誰だお前は！」
当然ジュドムは、問い質した。すると黒ローブが細い腕をローブの中から出し、そのまま頭を覆っているローブを脱いだ。
その瞬間、ジュドムは度肝を抜かれてしまう。
何故ならそこには――キリアと全く同じ風貌をした人物が立っていたのだから。
（同じ……顔？　いや、それよりもコイツ、まったく気配がなかった……！）
ジュドムは息を呑み、完全に気配を絶って近づいてきたもう一人のキリアに警戒心を最大にする。
さらにいえばルドルフもまたもう一人のキリアを見て目を丸くしていた。
（ルドルフも知らなかった……？）
そう見受けられた。
「あなたは戦闘特化型。確かに戦闘力は並外れていますが、その分、駆け引きなどに疎い。良いように言うと素直ですが、悪いように言うとバカ正直ですね」
カツカツカツともう一人のキリアが軽やかな足取りで、ルドルフの近くにいるキリアの隣までやって来る。
「02号、どうしてここに？」

「どうしてここに私が来たのかと言うと、あなたのことだから、聞かれたことに対し、敵であるにも拘わらずバカ正直に情報を与えるのではと懸念して来たのです。結果は予想通りでしたね」

０２号と呼ばれたキリアが、チラリとジュドムの方を見やる。冷たい視線。まるで血が通っていないのではないかと思わせる昏い瞳だ。

（ちぃ……もう少し情報を引っ張れりゃ良かったんだが、思わぬ来訪者が来たもんだな）

内心で舌打ちしながら、現れた０２号キリアを見つめるジュドム。

確かに見た目では全く区別がつかないのだが、どこか取っ付き易い０３号と違って、０２号は隙がなく頭も切れそうなので扱い難さを感じさせた。

「なるほど、お前さんがもう一人の姉妹ってわけか。いや、さっきの口ぶりだともっといそうだが」

「見た目は筋肉だるまの癖に、少しは利口なことを考えますね。ですが当たり……とだけ答えて差し上げましょう」

毒舌さが目立つ０２号だが、０３号の方は何も喋らず突っ立っている。

「さて、そろそろご主人様の元へ戻りますよ、０３号」

「分かりました０２号。では――」

０３号は頷くと、ルドルフと対面するように身体を向けた。

ルドルフは彼女の行動の意味を把握できていないようで首を傾げたまま「な、何だ？」と口にし、０３号は続ける。

「先程言いました。当初の目的である魔王暗殺は失敗しました」

「あ、ああ」

「ですが、それは目的のほんの一部に過ぎません」

何を言っているのか分からないようで、ルドルフは目をしばたいている。

「そして――」

０３号が懐に手を入れると赤く輝く何かを取り出す。

そしてそのまま素早く胸を突き出して――ズブッ！

「んがぁっ!?」

「ルドルフッ!?」

０３号がルドルフの胸を素手で貫いてしまったのだ。

しかし彼女は表情を少しも変化させることなく手を抜くと、

「――これがもう一つの目的です」

やり慣れた作業のように平然と血に塗れた腕を、バッバッと振って血を落とす。

「０３号、アレは入れましたか？」

「抜かりなく」

０２号の質問に対し、０３号は無機質にそう答えた。

「てめえら一体何をっ!?」

胸を押さえて地面に跪るルドルフに、ジュドムや兵士、大臣デニスたちも駆けつけた。

キリアたちは、その場から少し距離を取る。

「がはっ!?」

ルドルフの口と胸から大量の血液が吐き出されている。

（こ、こいつはマズイ！　このままだとルドルフが死んじまうっ！）

助けなければと彼の名を呼びながら手を差し伸べようとするが……つい手が止まってしまう。何故ならルドルフの身体が徐々に膨れ上がっていくからだ。さらに肌の色も赤黒く変色し始めている。

「ル……ルドルフ……？」

言葉を発したジュドムだけでなく、ルドルフの変わり様に駆け寄った誰もが唖然。

「ぐ……がァ……ぎぎぎィ……っ!?　ぎがアアアアアアアッ！」

獣のような叫びとともに、ルドルフの胸から血が凝縮したような真っ赤に色づく大きな角が突き出てきた。人の腕ほどはあろうかと思うほどの大きさだ。

また彼の体軀も、元の大きさの五、六倍ほど巨大化している。

身長は五メートルを軽く越し、普段は痩せ細った体型だったルドルフは、まるでトロルのような恰幅の良い巨体に変化した。加えて顔つきも、とても理性があるとは思えないほど、ゴブリンに似た醜悪な表情だ。大きな口からは涎が溢れ出ている。

ドクンドクンドクンと、胸から突き出ている赤い角が、心臓のように脈打っていた。

「はあはあはあ……。はらァ……へっだァ……」

声色もルドルフと思えないほど低いものだった。喉が潰されて、必死に絞り出しているかのようなくぐもった声。

大臣や兵士たちは、国王の変貌ぶりに悲鳴を上げて後ずさっている。

ルドルフはその場から動かず、身体の変化に痛みを伴っているのか、顔を悲痛そうに歪めて耐えている様子を見せた。体中の筋肉が膨れては縮み、それが不自然なほどの速さで動いている。もうすでに人間の面影は失われていた。

「て、てめえらぁっ！　ルドルフに何をしやがったぁっ！」

ジュドムは怒りが頂点に達して問い質した。

会談を装い戦争をしかけるような行為をしでかしても、ジュドムにとってはやはり親友なのだ。彼がわけの分からない化け物にされたのを黙って見ていることなどはできない。

ジュドムの問いに対し、０２号は冷ややかな表情を浮かべながら言う。

「どうやら成功のようですね。彼はこれで晴れて『魔人族』の仲間入りを果たすことができました」

「魔人……どういうこった？」

「これ以上は黙秘します。もっと効果的な場面で発表した方が何かと都合が良いですから」

「くっ、ルドルフはどうやったら元に戻る！」

「……戻るとでも？」

その言葉に人間の兵士やデニスたちも青ざめる。

「ちっ、このクソ野郎どもがっ！」

ジュドムは、今すぐ０２号たちをぶん殴ってやりたい衝動にかられながらも、ルドルフの方を向いて叫ぶ。

「おいルドルフ！　正気に戻りやがれぇっ！」

言葉を受けてか、今まで硬直していたルドルフがビクッと身体を震わせたかと思うと、

「ハァアアアガァアアッ！　はらァッ、へっだァアアッ！」

巨体をズカズカと動かし、近くにいる兵士をその手で掴み上げ、そして――。

「や、止めてくれぇえええええっ!?」

何ともおぞましい光景だが、兵士を頭から自分の口に放り込んだのである。彼の口の中でポリポリと骨を砕く音が響く。それは強者が弱者を捕食する瞬間だった。

「だ……だりないイイイイッ！　もっどォ！　もっどォオオオッ！」

手当たり次第に動き回り、兵士を掴んでは胃袋へと収めていくルドルフ。当然兵士たちは悲鳴を上げながら逃げ回る。

「な、何やってんだルドルフゥッ！」

悲しいことにジュドムの叫びは彼には届いていない。こうなったら自分が彼を止めようと動こうとするが、０３号が立ちはだかる。

「どきやがれぇっ！」

しかし０３号は動こうとしない。

「ひ、ひぃっ！　こ、こここ国王様！　わ、わわわ私です！　デニスでございますぅ！」

腰が抜けて立てないのか、必死な形相で後ろへと逃げようとするデニスだが、

「デ……ニ……ス？」

「そ、そそそうです！　あなた様の忠臣！　大臣のデニスですぅ！」

ルドルフに名前を呼ばれて笑顔になる――が、

「ぎゃあっ!?」

振り払うように動かした剛腕であっさりと掴まれてしまう。

ミシミシギチギチと、嫌な音がデニスの身体から聞こえる。

「が……ぼ……ぎ……おぶぅ……っ」

まるで全身を万力で締め上げられているかのような圧力を受け、デニスの意識が朦朧としてくる。

そしてデニスはルドルフの口の中に放り込まれてしまった。大臣を助けようと、傍に控えていた国軍の隊長たちが剣でルドルフを突き刺しているが、全く効いていない。

それどころか怒りを買っただけのようで、ルドルフは唸り声を上げつつ大きな口を開くと、首を振りながら口からレーザーのような赤黒い閃光を繰り出した。

その破壊力と放出速度は凄まじく、隊長たちは反応し切れずレーザーの餌食になる。

頭に受けた一人は、見事にその部分だけキレイに消え去り、腹に受けた者は上半身と下半身との離反を経験した。

他の者たちも同様に、たった一撃で絶命してしまったのだ。

あまりにもの現状に、他の兵士たちは士気を落とし逃げ出す。

「そこをどけぇっ！」

ジュドムはルドルフを止めようと動いているはずなのだが、いまだに彼の目の前には０３号が立ち塞がっていた。

互いに拳を数度交えているが、決定的なダメージを互いに与えられずに今に至っている。

「……ふむ。そろそろいいかもしれないですね。０３号、《醜悪な人形》を連れてご主人様の元へと向かいましょう」

０２号の物言いにジュドムは眉をしかめる。

「アグリィ……ドール？」

「あの愚王のことですよ。いいネーミングでしょう？」

「けっ、吐き気がする！」

「これだからセンスの無い輩は不愉快なのです。やはりただの筋肉だるまですね」

「何だと！　いいからルドルフを元に戻しやがれっ！」

「不可能です。そもそもこれは我が主のシナリオ。誰も覆すことはできません」

ジュドムはどうするべきか悩む。どうすればルドルフを取り戻せるのか……。

ただ彼女たちのルドルフの扱いを見て不思議に思っていたこともあった。

恐らく今回、会談での裏切り工作を持ちかけたのは０２号たちだろう。ルドルフは愚かな王だが、簡単に『魔人族』を信じるほどバカではない。

それなのに彼女たちを信じて魔王たちを手にかけようとした。

何でだ……何でルドルフはお前らみてえなのを信じたんだ？　罠だって思わなかったのか……。答えやがれ、ルドルフに何をしやがった？」

鋭い眼光を０２号へとぶつけながら、いつでも戦闘できるように身構える。

「少しくらいなら教えて差し上げてもいいですよ。三回クルリと回ってワンと鳴けば、ね」

「ふざけてんのかてめえ……？」

「そんなに睨みつけても怖くはありませんよ」

ジュドムは飄々とした相手の態度に苛立ちを増していく。

「いいから答えろ！　さもねえと力ずくで口を開かせるぞ？」

「そのような脅しなど効くとお思いですか？　これだから脳筋は困るんです。何故そこまで必死なのですか？」

「ルドルフは俺の親友だからだ！」

「ああ、そういえばこの愚王とはお友達でしたね。ふむ……いいでしょう」

スッと目を細めた彼女が、退屈凌ぎに喋り出すような感じで、淡々と語り始める。

「半年ほど前のことですよ。このベットの前に、同志の一人を向かわせました。そこである契約をしたのですよ」

「け、契約？」

「はい。現魔王――イヴェアムを討ち、【ハーオス】を落とす契約です」

「……お前も魔人じゃねえのか？」

「だから何です？　ご主人様の命令がすべてですので、相手など関係ありません」

つまり主の命令ならば、どんなことでもやる信者のようだ。

「け、けどルドルフだって、いきなりやって来た魔人を信じるわけがねえだろうが」

「そうでしょうね。だからこそ、こちらが現魔王とその配下たちに復讐をしたいという名目で、哀れな愚王の娘のことを話して揺さぶったのです」

ルドルフは娘が死んだのは『魔人族』や『獣人族』が存在するからだと思っていた。だから０２号の同志とやらが復讐を口にしたことで、話を聞こうと考えたのかもしれない。

復讐……その言葉には若干の引っ掛かりを覚えてしまうが、それが本音なのかは分からない。機械的な０２号の瞳からは、感情が読み取れないのだ。

「そして、こちらからある条件も出し、ダメ押しをしました」

「条件……だと？」

「――最上級の《契約の紙》を使って、契約を破ればこちら側だけが命を差し出すと提案したのですよ。その他に

も、人間にとって有益な情報などを流しました。国境を守っている魔人はこちら側、だとか、会談の前に憂鬱しい課報役をこちらが始末するとか、いろいろですね」

課報役と聞いて、ジュドムの脳裏に浮かんだのは一人の青年。

（おいおい、まさかテッケイルの奴、やられたんじゃねえだろうな）

彼とは以前、仕事をともにこなしたことがあるのだ。油断できない魔人ではあるが、強さも人格も、ジュドムは認めている。

「こちらの言うことの裏を取るために、このペットは《獣の檻》という集団を使って調査していたようですけど」

「《獣の檻》……!?」

獣人排斥を謳う過激派の者たちで組織された集団だ。獣人を酷く嫌い、問答無用で人間界から排除したり、貴族に奴隷として売りつけたりする胸糞の悪くなる行為を平気で行うので、ジュドムも良く思っていない。

（ルドルフとの繋がりがあるって噂はあったが。まさか本当に一国の王が、奴らの存在を認めてただけじゃなく、手足として使ってたとはな）

やはりルドルフは、相当過激なことをジュドムに知られないようにやっていたようだ。

「こちらに嘘偽りがないと分かると、ようやく手を組むことを了承してくれたわけです」

「なるほどな。けどま、ルドルフはまんまと罠にかかってたってわけだ。けどこれはルドルフと交わした契約には違反するはずだ。何故死んでねえんだ？　さっき命を差し出したって言ってただろうが」

「死んでるでしょうね」

「何？」

「先程も言ったでしょう。もう忘れたのですか？　やはり脳まで筋肉化しているのですね」

いちいち気に障る言い方をする奴である。

「はぁ、私は先程同志の一人が、と言いました。契約を実際に行ったのは私ではありません。私の姉妹の一人なのですから」

「じゃ、じゃあ……」

「ふふ、あとはご想像にお任せしましょう」

つまりもう一人のキリアという存在は、すでに契約違反をしたとして命を失ったということなのだろうか……。

（仲間じゃねえのかよ……）

それなのにまるで痛くも痒くもないという感じで淡々と喋る０２号に対してゾッとするものを感じた。

「まあしかし、これほど扱い易い王だと、拍子抜けもいいところでしたけどね。それに現魔王も見事に引っかかってくれましたし」

「……！　そういや、何で魔王ちゃんを……同族を裏切ったんだ？」

「裏切った？　冗談でしょう。先程も言いましたが、我々が真に忠誠を誓うのはただ一人。ご主人様だけです」

「つまり最初から敵だったってわけだ」

「そういうことです。それもすべてはご主人様のシナリオのため。現魔王イヴェアムは、傍に０５号がいることにも気づかずに存分に踊ってくれましたよ。まさかほとんどの情報を操作されていたとは微塵も思っていなかったでしょうね」

「０２号、結構喋っています」

そこへ今まで黙っていた０３号が無感情に呟いた。

「おっと。０３号に注意しに来たつもりが、結果的に喋り過ぎたのは私のようですね。ジュドム・ランカースが聞き上手なので、つい口が滑ってしまいました。反省です」

そのまま０２号が冷徹な視線でルドルフを見た後、０３号に視線を送る。

「さあ、行きましょうか０３号」

「ちょっと待て！　どこに行くつもりか知らねえが、このまま行かせると思ってるのか！」

ここで逃がすつもりはない。まだまだ知りたいことが山ほどあるのだ。

「そうは言われましても、こちらもこれ以上イレギュラーは勘弁ですので……０３号」

「はい？」

「私は《醜悪な人形》を連れて先に戻ります。適当に相手をしたら戻って来なさい」

「分かりました」

「《醜悪な人形》！　腹ごしらえはそこまでです！」

「ウゥ……グァ？」

ルドルフが手に持っていた兵士の亡骸をポイッとゴミのように捨てると、ドシドシと足音を立てて０２号の傍に

やって来る。
「ルドルフッ！」
ルドルフの歩を止めようと、ジュドムが彼の前に行こうとするが、その前に０３号が立ち塞がる。
「行かせません」
「任せましたよ、０３号」
「はい、０２号」
「待てっ、ルドルフッ！　まだ意識があるんじゃねえのか！　目え覚ませ！　国はどうするつもりなんだっ！」
しかしルドルフはピクリとも反応せず、０２号を肩に乗せてそのまま去って行く。
「くそがっ！」
ジュドムは目だけを動かして周りを見る。そこには地獄絵図のような光景が広がっていた。血や、焼けた人肉のニオイで顔をしかめてしまう。まだ生きている兵士はいるが、その誰もが重軽傷を負っている。
そこへ０３号が凄まじい速さでジュドムに接近。
「ちぃっ！」
イヴェアムやルドルフにしたように、拳を突き出そうとするが、
「舐めるんじゃねえっ！」
バアアンソと、ジュドムが両手を勢いよく合わせた。
その瞬間――ジュドムを中心にして爆風のような衝撃が吹き荒れる。
「くぅっ!?」
真っ直ぐに向かっていた０３号は、風圧により吹き飛ばされて建物に衝突してしまった。
『拍手衝』ってんだ、覚えとけ！　悪いが、取っ捕まえて情報を吐かさせてもらうぜ」
ジュドムは０３号を吹き飛ばした建物に向かう。
しかしそこで悔しさに歯噛みする光景が入ってくる。
何故ならそこには破壊された瓦礫だけしかなかったからだ。どうやら彼女はわざと吹き飛ばされて、その隙をついてこの場から逃げ出したようである。
「ちっ……俺としたことが！」

こんなにも早く逃げ出そうとするとは思っていなかったので、その認識の甘さに、思わず建物の壁を殴って八つ当たりをしてしまう。
「……仕方ねえ。今はとにかく【ヴィクトリアス】に戻るしかねえな。奴らの情報も収集しねえといけねえし」
そう呟きながら国がある彼方へと視線を飛ばす。
「最悪の結果になっちまったが、やることはやらねえとな」

第五章・英雄の片鱗

【魔国・ハーオス】にある宿の前へと転移して戻って来た丘村日色は、何故かある人物から穴が開くほど睨みつけられていた。

燃えるような赤髪を激風に靡かせ、腕を組みながら紅玉のように美しい瞳を細めている。

「どういうことだ、これは？」

その人物の顔は、明らかに怒りと不機嫌さを露わにしていた。

「何だ赤ロリか、帰ってたんだな」

今、日色の目の前にいるのは、赤ロリこと――リリィン・リ・レイシス・レッドローズだった。

（どうして怒ってるんだ、コイツ……？）

その理由が分からなくて思案していると、ダダダダダと素早く地面を走る音が聞こえて、

「――ごしゅじいいいいいいいんっ！」

「はぐふっ！」

突然小さな人影が腹に突撃をしてきて、不意を突かれた日色は、そのまま後方へと吹き飛んでしまった。

「クイクイクイクイクイクイィィィ～ッ！」

日色に跳びついた何者かは、その小さな頭を日色の胸の中で甘えるようにグリグリと動かしている。そしてピタッと止まったと思ったら、今度はペロッと舌を出す。

「お、おい……ちょっと待て……っ！　～～～～～～～っ！」

周りが騒然とするのもおかしくはない。突然現れた赤ローブの男が、これまた突然現れた何者かに組み敷かれた上、顔全体を満遍なく舐められているのだから。しかもその相手の見た目が五歳児くらいなので、見ようによっては犯罪臭までしてしまう。

「ええいっ、鬱陶しい！　離れろよだれ鳥ぃっ！」

日色はその者の首根っこを掴み上げ、そのまま立ち上がるとポイッと投げ捨てた。

「クイィッ!?　いったぁぁぁいっ！　ごしゅじんひどいよぉぉ～っ！」

「黙れ！　顔を舐めるなといつも言ってるだろうが！」
ベチャベチャに涎塗れになった顔を袖で拭き取る。
「うぅ～だってだってぇ、ひさしぶりだったんだも～ん……」
フワフワモコモコとした白髪を持つ少女が、その愛くるしい表情を曇らせて意気消沈している。先程までの表情からは、活発さがハッキリと分かり、人懐っこそうな大きな目と、小さな鼻と口がちょこんと顔の中に収まっていて、とても可愛らしい。
もう一つ、その子のチャームポイントとして、額には三日月型の痣が浮かんでいる。
彼女の名前はミカヅキといい、元々はライドビークというモンスターなのだが、日色の魔法によって擬人化している存在なのだ。
ちなみにこの中では最も日色と一緒にいる期間が長い古株だったりする。
「ダメですぞ、ミカヅキ！　師匠に抱きついていいのはボクだけなのですからっ！」
「ちがうもん！　ごしゅじんにだきついていいのはミカヅキだけだもん！」
ニッキとミカヅキが口喧嘩を始めてしまった。これも日常茶飯事の光景だ。
「むむむ……師匠はボクのものですぞっ！」
「クイィ……ごしゅじんはミカヅキのもんだもん！」
互いに譲らず口を尖らせて睨み合わせているところに――ポカッ！　ポカッ！
「にょわっ!?」
「クイィッ!?」
二人の頭の上に拳骨が落とされた。
「いいからお前らは黙ってろ」
「……はい」
日色に怒られてシュン……と大人しくなる二人。
「おいヒイロ、質問にさっさと答えろ」
リリィンが痺れを切らしたように怒気混じりの言葉を投げかけてくる。
「質問だと？」

「そうだ、何だこの状況は？　ニッキは知っていたみたいだが、何故ワタシの耳に入っていない？」
泊まっている宿は無事だが、他の建物は傷つきボロボロになっており、明らかな戦闘の跡も残っている。さらに戦争に日色が参加していることなど知りもしないリリィンにとっては、置き去りにされたような気分になっているのかもしれない。
「お前には言ってないからな」
「だから何故言ってないと聞いておるのだ！」
「……はぁ、あのな、お前がこの国に来た時言ったんだろ？　この国の近くに住んでいる知り合いを探しに行く、とな。戦争になるかもしれないと聞いたのは、つい最近だ。だからその時にいなかったお前には教えられない」
「ええい、ふざけるな！　貴様の《文字魔法》を使えば、情報を伝えるのも難しいことではなかろうが！」
彼女の物言いにムッときた。
「それこそふざけるな、だ。何でわざわざオレが手に入れた情報を逐一お前に報告しなければならないんだ？」
「そんなの当然だろうが！　貴様はワタシのものだからだ！」
小さな胸を張って言い張る彼女だが、それをジト目で睨みつける日色。会った当初から変わらぬ彼女の物言いには、半ば呆れてしまっていた。
「オレはオレだけのものだ。誰かのものになるつもりなどない」
「ちっ、この半年、相も変わらず頑固な奴だ」
「お前に言われたくない」
「フン、まあいい。何を言ったところで平行線のようだしな。ところで、ここに来る途中見てきたが、どうやら種族間戦争が本格化しているみたいだが」
その言葉であることを思い出し、日色はサッとニッキに顔を向けた。
「おいバカ弟子、ここに魔王たちが来ただろ？」
「魔王？」
「金髪の女だ。オレが転送したはずのな」
「ん～……おお！　やって来ましたですぞ！　いきなり現れたと思ったら、わけの分からないことを叫んでいましたが、あれはなんですかな？」

恐らく話の途中でここへ転送したので、その話、というか彼女の宣言をニッキは聞いたのだろう。
「指を差している方向に誰もいないのに、何やら叫んでいまして……、すっごく顔をマッカにした後、師匠のことをバカとか信じられないなどと言っておりましたが……」
その時の彼女の恥ずかしさなど日色が知る由もない。
「そんなことはどうでもいい。奴らはどこに？」
「とにかく鎮圧せねばとか言ってどこかへ参りましたですぞ」
どうやら魔王イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングたちは、争いを鎮圧するために敵がいる場所へと向かったようだ。
「あ、それと勇者という者たちのことですが」
「ん？　勇者？　……ああ、そういやいたな、そんな奴らも」
すっかり忘れていたが、周囲を見回して勇者たちの姿を探す。だが見当たらない。
「……いないな」
というより、この場にいるのは日色、リリィン、ニッキ、ミカヅキの四人だけのようだ。
「師匠がどこかへ飛んで行った後、あのオオカミ殿が勇者たちと何か話をしだしてですね、そしたら急に変な人が攻撃してきて、どこかへ飛んで行ってしまわれたのですぞ」
「飛んで行った？」
オオカミというのは、オーノウスのことだろう。【聖地オルディネ】に転移するまで傍にいたので覚えている。ニッキの説明があやふやでよく分からないが、ここに勇者たちがいないのなら別に興味もないのでそれはそれでいい。
「ホントに井の中の蛙……だな。恐らく戦争が恐ろしくなってそのままこの国から逃げ出したってところだろう。国王の捨て駒にもなれなかったようだな。全く、アイツらは今まで何して来たんだか」
予想はできるが、これ以上興味のない連中のことを考えても生産的ではないと判断して、とりあえずイヴェアムに会う必要があったので探すことにする。
『探』という文字を空中に書いて発動させると、文字自体が矢印に変貌し、進むべき方向を指し示してくれた。
「おいヒイロ、まさか戦争に参加するつもりではなかろうな？」
リリィンがいまだ崩していない不機嫌面を向けてくる。

「そのつもりだが？」
「は？　貴様、まさか博愛主義に目覚めて、どうでもいい他人を救うために戦争を止めようとしているのではあるまいな？」
かなりの嫌味を込めて言う彼女に対して肩を竦める。
「オレが参加する理由はバカ弟子にでも聞け。一応教えてあるしな。それにジイサンとドジメイドもそのうちここへ来るんだろ？」
「ん？　……ああ」
「なら来たら説明してやるんだな」
ジイサンとドジメイドというのも、旅仲間であり、リリィンに仕えている人物たちだ。
するとリリィンがジッと日色の顔を見つめて、
「……手を貸すことはあるのか？」
この半年でリリィンの言動も変わったなと思い苦笑しながらも、手を振りながら、
「いや、さっさと終わらせてくるから待ってればいい」
そう言うと日色は大地を蹴って去って行った。
日色を見送った後、ニッキが何やら思案顔をしているのに気付いたミカヅキが尋ねる。
「どうしたのぉ、ニッキ？」
「ん～何か師匠にお伝えしなければならない重要なことがあったのですが……」
「そうなの？」
「う～ん」
「おもいだせないならたいせつなことじゃないんじゃないの？」
「あ、それもそうですな！」
「きっとそうだよ！」
「うんうん」
「あはは！」
笑い合っている二人を見て、リリィンは嘆息する。

「まさかこのバカ二人のお守りをするのは……ワタシなのか？」
誰でもいいから早く帰って来いといった様子のリリィンだった。

※

「防壁を固めろっ！　第一陣と第二陣は水魔法を！　さらにその後、すかさず第三陣と第四陣は雷魔法で相手の動きを奪えっ！」
イヴェアムの指示が飛ぶ。
前方に位置する兵士たちが水魔法を使って敵を攻撃した後、その後ろに待機していた兵士たちが雷魔法を使って、雷魔法の効果を強め相手の動きを奪う。
敵も魔法を警戒してそれ以上前に進めないでいた。
自国へ戻ってきたイヴェアムは、戦争を終結させるために、すぐにアクウィナスとともに兵士たちを指揮し敵を食い止め、これ以上国を侵略させまいと努めていた。
マリオネたちにも、他の地区へと向かわせ争いを鎮圧するように命じておいたのだ。
（本当に国に戻って来れたのは驚いたけど、ヒイロには感謝ね）
まずはこの地区の戦を終わらせようとしていた時、まるで黒いペンキを流したように、地面に黒が広がっていくのを確認する。
すると突如その中から、ズズズズと様々な生物が姿を出現した。いや、生物といえるものではない。その身体は腐蝕しており、鼻をつく腐臭が周囲に漂う。
「行くニャ、我らがゾンビ兵どもよ！」
敵の中から黒豹を擬人化したような存在が現れた。――クロウチである。
その場にいる獣人の兵たちも、クロウチが現れたことで、大いに士気が向上した。余程その存在が頼りになるのだろう。
「バカめっ！　たかがモンスターが我らの《雷網の陣》を破れるわけがないだろう！」
高らかに言うのは『魔人族』の兵士の一人。その言葉の根拠も理解出来る。現実に獣人の兵士たちは、水浸しの

周囲に雷を落とされ、動きを止められていたのだから。中には足を踏み入れてしまい感電してしまっている者もいる。
だがその言葉を聞いてクロウチは、出現させたゴーレム型の巨大モンスターの頭の上から兵士を見下しながらほくそ笑むと、
「よく見てみるニャ。それニャら何でゾンビどもは動きを止めてニャいのかニャ？」
「――っ!?　な、何故だっ!?」
クロウチの言う通り、モンスターたちは感電するはずの地面を、何事もなく進んでいる。
『魔人族』の兵士たちがそれぞれに驚愕していた。
しかしイヴェアムは、その謎の解明に辿り着く。
「……！　そうか、見ろ兵士たちよ！　あのモンスターたちはどれも雷に耐性のある種族ばかりだ！」
出現したのは、レッドマッドゴーレムと呼ばれる、身体が泥で構成されているモンスターに、ストーンラプトルと呼ばれる岩石恐竜、それにボルテスグリズリーと呼ばれる熊型モンスターは全身から雷を発する特性を持つ。
そのどれもがイヴェアムの言うように雷に耐性のあるモンスターたちである。
「どうするニャ、魔王様？　この軍勢を相手にドデカイ魔法でも放ってみるかニャ？　そんニャことして街が壊れニャきゃいいのニャ？」
周囲は多くのモンスターたち。それらを一匹一匹相手していると、時間もかかるし兵力もかなり減らされる可能性だってある。だが一度に殲滅するほどの魔法を使えば、クロウチの言うように、街を大いに巻き込み被害を甚大化させてしまう。
「ニャハ、それともそこにいるアクウィナス将軍に例の《魔眼》を使わせてみるかニャ？　あの力ニャら、こいつらをぜ～んぶ一気に灰化できるかもニャ」
しかしイヴェアムとアクウィナスは、静かにクロウチの目を見返しているだけ。
「ニャハハ、でもそれができニャいことは知ってるニャ。あくまでも《魔眼》が通用するのは無生物のみ……ニャろ？」
「……」
「けど、このモンスターたちは一度死んではいるけど……果たして無生物ニャのかニャ？」

何もかも理解しているような笑みを浮かべるクロウチを見て、イヴェアムは心の内側から悔しさが込み上げてきている。

（アクウィナスの《魔眼》が無生物にしか効かないというのも確かだ）

チラリと横に立つアクウィナスを見つめる。彼もその視線に気づいているようだが、前を見据えたままだ。その彼が静かに口を動かす。

「仕方ない。陛下、街は後で作り直すしかないぞ？」

それは言外に広域殲滅魔法を使ってここら一帯を攻撃すると言っている。しかしもちろんそんなことをした結果は言うまでもなく、街の外観は見事に吹き飛んでしまうだろう。

イヴェアムも本当なら街にあまり被害を出したくはないが、このまま洪っていれば兵士や国民が傷を負う可能性が高くなる。

（……街ならまた作ればいい。だが人は……命は奪わせるわけにはいかない！）

キッと顔を上げてアクウィナスを見つめる。彼もイヴェアムの決意を感じたのか、今まで腕を組んで静観していたが、その腕を下ろし、一歩踏み出そうとした。

だがその時――

「――――こんなところにいたのか」

屋根を伝いながら向かって来た人物がいた。

その人は、イヴェアムたちをこの国に戻って来させた張本人だった。

※

「――ヒ、ヒイロッ!?」

日色の存在を視界に入れて名前を呼ぶイヴェアム・グラン・アーリー・イブニングだが、日色に注目していたのは何も彼女だけではなかった。

「……んニャ？　何か見たことあるようニャ恰好ニャ……？」

実は日色とクロウチ、まだ獣人界を旅していた時、【グリー洞穴】という場所で出会い、強制的にタイマンさせられた経験があったのである。

クロウチと会った時は、日色は獣人の姿をしていたので、クロウチが今の日色があの時の日色と似ている、と不思議そうな表情を浮かべるのも至極当然であった。

そんなクロウチの様子に誰も気づかず、イヴェアムが「ヒイロ、どうしてここに!?」と尋ねてきたので、日色は溜め息混じりに言う。

「おい、契約を忘れたのか？　いろいろ納得できないことはあったが、とにかく契約した以上はそれに見合った働きはするに決まっているだろうが」

「そ、そうか！　それは助かる！」

日色は改めて目の前に広がっている光景に視線を送る。殺気だった獣人の兵士たちが後衛に位置し、その前では数え切れないほどのモンスターたちが建物を破壊していた。

「何ともまあ、めんどくさい状況だな」

その状況を見て、日色は思案顔を作ると、イヴェアムに質問する。

「この一画ごと吹き飛ばすのが一番簡単だが？」

日色にしてもその方が楽なのだが、一応雇われている以上、雇い主に聞いてから戦うのが筋と思ったのだが……。

「あ、ああ……それしか方法はなさそうだからな。アクウィナスもそれに賛成した。だから手を貸してくれ」

悲痛そうに顔を歪める彼女を見て、日色は呆れて溜め息を吐く。

「お前な、契約内容を忘れたのか？」

「え？」

「契約内容にあったのは、国、即ち街の防衛、保護に力を貸す、だろ？　それなのに潰していいのか？　しかもそれをオレにさせるとは」

「し、しかし、その方法をとらなければ被害が広がる一方で……」

「お前、オレの力がどういうものか詳しく知らないだろうが。勝手にそんな方法しかないとか決めつけられてもな」

「そ、それはそうだけど……」

「ならまずはオレに必要以上に街を破壊せずに奴らを制圧できるかどうかを聞くのが普通じゃないのか？」
「え……いえ、だって……で、できるの？」
「当然だ。オレを誰だと思ってる」
「……で、でもアクウィナスや私でもできないのよ？　普通に考えて――」
「ふん、お前の普通がどんなものかなんて知らないが、できないのが普通っていうなら、そんなもの――オレが歪めてやる！」
背後にドーンッ！　という文字が現れそうなほど自慢気に胸を張った日色。
「ア、アクウィナス……？」
イヴェアムが彼に助けを求めるようにチラリと視線を送ると、
「……できるのか？」
細めた紅い瞳が日色を射抜いてきた。
「言っただろ。契約に見合った働きはするとな」
それだけを言うと、日色はモンスターの群れに目をやる。そのまま人差し指に魔力を宿して『飛翔』という文字を書いて発動した。
その場から日色の身体はフワリと浮き上がり、凄まじい速度で上空へと昇って行く。
翼を持たないはずの『インプ族』である日色が飛んでいる姿に、地上にいる者たちはポカンと口を開けていた。
ある程度上空へと上がり、国を一望できるところまできたところで、日色は眼下を確認する。こうやって空から【魔国・ハーオス】を拝むのは初めてだが、やはり規格外の規模を持つ巨大国家だ。
そしてそこら中から煙や火が立ち昇り、大小様々な物体が無数に蠢いているのを確認。
（モンスターどもは……よし、確認した）
多くのモンスターたちが国や兵士たちをきずつけている。
（一番前じになるが、これが最も効果的だからな）
『吸引』と『魔物』。
一度敵人たちを一気に一掃するために使用した時と同様、両手の人差し指に魔力を宿し、器用に二つの文字を書いた後、プツン――と指先から文字を切り離し、空中に漂わせたまま、日色はイヴェアムの元へと戻る。

「な、何をしていたのだ、ヒイロ？」
いつの間にか口調が戻っているイヴェアムが、皆の代表として困惑気味に聞いてきた。
「いいから黙って見てろ。……ふぅ。――――《文字魔法》発動」
小さく唱えた刹那――。
空に置いてきた文字から突如として眩い電光が放たれた。
そしてその光がさらに強まっていくと、地上のモンスターたちが、次々と空に浮かぶ光へと吸い寄せられていく。
ただ〝人〟には全く影響はない。
まるで光がS極でモンスターがN極の磁石のように、国中で動き回っているモンスターたちが、どんどんと光に吸い寄せられていく。
数え切れないほどのモンスターたちが次第に集い、球体のような形状を作る。
「ニャ、ニャにごとニャァッ!?」
クロウチも突然の異常事態に声を荒らげている。自分がこの国に放った魔物たちが、意志を無視して遥か上空に集まっていくのだから驚愕するのも当然だ。
そんなクロウチの様子も無視し、日色は黙って空を見上げていた。
（……そろそろだな）
もう空へと向かうモンスターがいないと判断し、
「おい、一応吹き飛ばされないように注意しろよ」
「へ？」
イヴェアムは日色の注意の真意が分かっていない感じだったが、
「陛下、言う通りにしておこう。お前たちも今すぐどこかに掴まるか身を屈めておけっ！」
声高に言うアクウィナスに従い、戸惑いながらもイヴェアムと魔人の兵士たちは、近くにある建物に身を寄せたり、言われた通りに身を屈めたりし始める。
しかし敵人たちはただ空を険しい表情のまま見つめているだけ。
そして日色は、再び指先に魔力を集中させて――『大爆発』という文字を書き、モンスターの集合体に向けて放つ。

（……三発ほど放っておくか）

さらに同じ文字を書いて、正面から見上げて左、中央、右に文字を分けて放った。

（一応爆発力は上空へと向けておくが、かなりの爆風と爆音は来るだろうな）

そう判断した後、両手で耳を塞ぐ。

「――――爆ぜろ、《文字魔法》！」

モンスターにピタリと張り付いた三つの『大爆発』の文字が一瞬光った直後――。

ズドォォォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッッッッッ！

空間を割るのではないかと思うほどの凄まじい爆発音と光が空から迸った。

同時に激しい爆風が国を叩きつけるように吹く。メキメキと音を立てて木が倒れたり、地面にヒビが入ったりするが、多くの建物はどうにか耐えているようで壊れてはいない。

日色が爆発力を上空へ向かうようにコントロールしていたからこそ、これだけの被害で済んでいる。それでも爆風に備えていなかったほとんどの者が、立っていられずに吹き飛ばされていく。

「うっくっ！」

イヴェアムもよろめいたが、アクウィナスが彼女の背に手をやり支える。

「す、すまない、アクウィナス」

上空からは燃えカスのような黒々とした細かな物体が雨のように降り注いでくる。

恐らくモンスターたちのなれの果てだろうことは予想できたが、それほどの爆熱力だったのかと考えると日色以外の皆の背筋が凍った。

アクウィナスは、さも当然のように平然と立つ日色を見る。

「陛下は恐ろしい少年と契約したみたいだな」

彼でなくともそう思うであろうことは、イヴェアムの唖然としつつの「あ、ああ……」という返事で理解できるだろう。

しかし日色は彼らのそんな呟きに気づかず静かに口を開く。

「――よし、殲滅完了だ」

クロウチが言葉を失ったかのように、降り注ぐモンスターたちの残骸を見つめながら固まっていた。

しかしそれは獣人の兵士たちも同じようで、モンスターたちが、あんなにも呆気なく全滅した事実に、戦争をしていることも忘れて完全に呆けてしまっている。

「さて、あとはお前らだけだな」

そう呟きながら、クロウチたちを見る日色の視線に気づき、獣人たちの顔が青ざめる。

日色の行った所業に不気味さと恐怖を感じても無理はないはず。獣人たちは皆が揃って、クロウチの方へ身体ごと向ける。

「ク、クロウチ様ぁっ！」

「ど、どうすればよろしいんですかぁ！」

「し、指示をお願いしますっ！」

まさに縋る思いとはこのことか。明らかに地に足が着いていない様子の彼らを見てから、歯を食いしばって獰猛な目つきで日色を睨みつけるクロウチ。

「ニャんてことしてくれたニャ？　せっかく戦争のために補充した駒が、ほとんどニャくニャってしまったニャッ！」

「それは残念だったな。こっちも仕事で……ん？」

そこで日色は目の前にいるクロウチを初めてジックリと観察し、既視感を覚えた。

（……あれ？　コイツどこかで……あ、思い出した！　確か【パシオン】の近くにあった【グリー洞穴】に現れたニャンコ野郎！）

思い出すと同時に、メラメラと怒りが湧き出てきた。

あの時、仲間たちと力を合わせて仕留めたモンスターであるクレイバイパー。その後、日色一人で討伐部位を得ようとしていたが、クロウチが突然現れて邪魔をしてきたのだ。

さらにそのモンスターを横取りしていったことに腹を立てていた。

「おいニャンコ野郎、あの時はよくもヘビを持って行きやがったな」
「あの時？　ヘビ？　ニャに言ってるニャ？」
「惚けんな！　【グリー洞穴】でせっかく仕留めたクレイバイパーを持って行きやがっただろうが！」
【グリー洞穴】？　ん～……ニャニャ!?　確かそんニャこともあったニャ！」
思い出したのか手をポンと叩く。
「討伐部位を剝がす前に持って行きやがって。お前のせいでオッサンに小言を言われたんだぞ！」
当時の旅仲間の一人――アノールド・オーシャンに、奪われたことは早く言えと叱咤されたのだ。
「確かに僕はクレイバイパーを持って行ったけどニャ……お前には関係ニャいニャ！」
「はあ？」
「だってニャ、お前はタロウじゃニャいニャ」
「タ……ロウ？　お前何言って……あ」
そこでハッとなる。あの時は面倒そうな奴に本名を名乗るのは嫌だと思って偽名を名乗っていたことを思い出した。確か、クロウチに部下にしてやると言われ、その時に名前を聞かれ、タロウ・タナカという名前を教えたのだ。
「さっきお前ヒイロとか呼ばれてたニャ。だからお前は似てるけど別人ニャ」
日色は思わず「そういえばそうだった」と、こめかみに指を当てて溜め息を吐き出す。名前はともかく、今は『インプ族』の姿だったのを忘れていた。だがまた獣人の姿に戻るのも面倒なので、もうこのまま貫き通すことに決めた。
「とにかく、オレはお前をぶっ飛ばす。あの時の借りを返させてもらうぞ、ニャンコ野郎！」
「ニャニャニャ！　こっちもお前には怒ってるニャ！」
「ぬかせ。覚悟しろよ」
日色はまだ続いている『飛翔』の文字効果で空を飛びながら、クロウチの前方十メートルほどのところに立つ。
そのままクロウチを睨みつけながら、
「おい魔王！　他の獣人どもはお前らが何とかしろ！　オレはコイツに用がある！」
と叫ぶと、イヴェアムも慌てたように返事をして、アクウィナスや兵士たちとともに動き出す。
「さあ、かかってこいよ」

日色の漆黒の瞳が、クロウチを射抜いた。
腰に携えた黒い鞘に納められている刀を、日色はゆっくりと抜いていく。
これは以前――《刺刀・ツラヌキ》と呼ばれていた刀である。日本刀の形状をしていて、刀身が氷のように透き通った美しい造形だった。
だが今は――《絶刀・ザンゲキ》という刀銘を持つ。
氷のような刀身は変わらない。しかし刃の両側面には、切っ先から真っ赤な柄まで、炎のような紋様が走っている。
初めてこの刀と出会った時、一目見て日色は――美しい……そう思わされた。
この刀はある鍛冶師に打ってもらったものなのだが、《刺刀・ツラヌキ》と融合させて造り上げられたものなので、無論斬突きに特化している能力も秘めている。更にこの刀は斬ることに重きを置かれたものでもあり、まさに万能とも言える刀として生まれ変わった。
またこの《絶刀・ザンゲキ》は、魔力を纏わせ相手を攻撃した場合、相手の精神力そのものを攻撃して魔力酔いを引き起こさせ、意識を混濁させることが可能。一瞬で意識を奪うこともできる。
先刻、日色に襲いかかった獣人たちを気絶させたのも、この刀の能力だった。
「ニャハハ、ゾクゾクするニャ」
クロウチは日色からただならぬ雰囲気を感じているようで笑みが零れている。
「どこまでいっても獣人はバトルジャンキーが豊富だな」
「ニャにを言うニャ。お前だって強くニャるために鍛えてるはずニャ」
「否定はしない」
死なない努力は、全身全霊でやってきた自負がある。
「ニャら、自分の強さを確かめるためには、相応の強者が相手しニャいと許れニャいニャ」
「……まあ、一理あるか」
「ニャら、しばらくの間――この戦いを楽しむニャ！」

クロウチの脚部の筋肉が盛り上がっていく。

【獣王国・バシオン】が誇る《三獣士》が一人――クロウチ！　いざ参るニャッ！」

クロウチが凄まじい速さで地上を駆け回り始める。日色を翻弄するつもりだろう。以前はこの速さに度肝を抜かれたが、今はそうはいかない。

クロウチもまた、確実に日色が自身の動きを捉えていることには気づいているようだ。

「ニャら一つギアを上げるニャ！」

グゲンッと、クロウチのスピードが急に向上する。すでに戦う前にクロウチの《ステータス》を『覗』の文字で確認しておいたが、レベルは明らかに日色の方が上だった。しかし獣人ということもあって、身体能力はかなり高い。

特にＡＧＩ――つまり素早さには目を見張るものがあった。

（速さに特化した獣人ってところか。まだ全力ではなさそうだが）

日色は忙しく眼球を動かしながら、クロウチの姿を追う。そのまま日色も大地を蹴り出した刹那、ボボウッと風圧が周りに広がった。風を引き起こしたその中心には、日色の刀とクロウチの右手が鍔迫り合いのようにせめぎ合っていた。

いつ衝突したのか、レベルの低い者たちには視認できていなかったが、クロウチが日色の背後から攻め入り、日色はそれにしっかり対応して防御しただけのことだ。だがそれがあまりの速さだったため、見逃した者が多かったということである。

「ニャハハ！　よく反応したニャ！」

「……相変わらず奇妙な手だ」

以前もそうだったが、こうして日色は刀で、相手は素手なのに、一向に斬れる様子がないのだ。それどころかまるで木刀で粘土を叩いたような感触がある。

日色は若干身体を引くと同時にクロウチの腕を右足で下から蹴り上げ、そのまま身体を回転させて横薙ぎに斬りつけるが、その時にはもう相手の姿はなかった。

「ちっ、すばしっこい奴だな」

クロウチの気配が消えていた。恐らく建物の陰にでも潜んでこちらを窺っているのだろうが、その様子はまさに

獲物を捕らえようとする肉食獣の狩りのようだった。

「残念だが、その作戦はオレには効かんぞ」

挑発してもクロウチは反応しない。だが日色も反応を期待して言ったわけではない。正真正銘、効かないから効かないと言っただけ。

『素敵』という文字を瞬時に書いて発動――。すると敵の位置が頭にスッと入ってくる。今度は素早く『伸』の文字を刀身に書いて、敵の方角へと切っ先を向け刀身を伸ばした。

「――ニャニャッ!?」

建物を貫きながら、その後ろに隠れているであろうクロウチを攻撃。クロウチは寸でのところで避けて建物の裏から出てきた。その顔は驚愕に支配されている。

日色は『元』の文字を書いて刀身を元に戻すと不敵に笑う。

「だから言ったろ？　かくれんぼはオレには通用しないと」

「うぅ～ニャ～」

悔しそうに歯を食いしばり、唸りながら足で地面を何度も踏みつけている。

「どうして分かったのニャ？」

「答える義務はない」

「……っ、ニャら、今度は本気で行くニャ」

「さっさと本気で来い、ニャンコ野郎」

クロウチが地面に両手をつくと、手から地面へ黒い液体が流れるようにして広がっていく。日色の足元まで伸びてきたので飛翔して避けようとするが、

「させニャいニャソ！」

影から黒い触手のようなものが幾本も伸びてきて、日色の身体に巻き付いた。

「くっ!?」

必死で逃れようとするが、無情にもそのまま影へと引き摺り込まれていった。

※

――一方その頃、破壊された建物の残骸の上では二人の人物が睨み合っていた。

一人は【獣王国・パシオン】の第二王子であるレニオン・キング。身体はすでにボロボロで、手に持っている剣もヒビと刃毀れで今にも折れそうだ。

そして対照的に、ほぼ無傷で相対しているのが――オーノウスだった。

（むぅ。なかなかにしぶとさを見せる）

獣王レオウードの血を引く者としてのプライドがあるのだろう。圧倒的な実力で、レニオンの攻撃を何度も返り討ちにしているというのに、いまだ心を折られることなく立っている彼に対し、オーノウスは敬意を持っていた。

（先程の空で起こった爆発によってゾンビは一掃された。あとは指揮官であるこの者を倒すことで戦場の優位はこちらに傾くはずだが）

しかし相手は焦燥感にかられた表情はせず、笑みを浮かべたまま。これほどの窮地に立たされていても、決して敵に弱みを見せないのには脱帽である。

「はあはあはあ……けっ、どうした疲れたのか？　俺様はまだまだやれるぜ？」

それは明らかな強がりだと分かるが、

「さて、そろそろ決着をつけさせてもらおうか」

オーノウスが一歩踏み出そうとしたその時、

「――ちょ～っと待ってぇ、オーノウスぅ～！」

と、間延びした声とともに一人の女性がやってきた。

「!?　シュプラーズ！　何故ここへ？　橋の防衛はどうしたのだ？」

「とにかく詳しいことは後よぉ。陛下に伝言を頼まれてるわぁ」

「陛下に？」

「ええ、そこの王子さんを捕らえよってねぇ」

「ちぃ、ここにきて《魔王直属護衛隊》の増援かよ」

愚痴混じりに言葉を漏らすレニオン。【ハーオス】の最高戦力の一人がやって来たことで、益々彼の勝機はなくなったといってもいいだろう。

「捕らえる？　……殺さないということか？」

「そうよぉ、もしこの国に指揮官クラスの敵がいれば、捕らえて交渉材料にするんだと思うわ」

「なるほど。あい分かった。ならばそのように努めようか」

レニオンをギロリと視線で射抜くオーノウス。

「へっ、舐めんなよっ！　俺は獣王の息子だっ！　捕らえられるもんならやってみやがれぇっ！」

剣を天にかざしながら全力の《化装術》を発動してくる。家一軒を軽く覆うほどの巨大な竜巻が、剣を中心にして天へと立ち昇り始めた。このまま剣を振り下ろさせてしまえば、ここら一帯を更地にできるほどの竜巻がオーノウスたちを襲うだろう。

「吹き飛びやがれぇっ！　《一刀竜巻》　いいいいっ！」

――だが、剣がそのまま振り下ろされることはなかった。

「――――がはぁっ!?」

レニオンが大量の息を口から吐き出す。腹部から伝わってくるであろう激痛に顔を歪めている。歯をギリギリと噛み締めたまま、オーノウスを睨んできた。

オーノウスは目にも止まらない速さでレニオンとの間を詰め、剣が振り下ろされないように、挙げていた手を左手で掴み、残っている右手で彼の腹部を殴打したのだ。

その瞬間、竜巻も消失した。

「悪いが、これ以上国は傷つけさせんよ」

レニオンが全身から力が抜けたようにガクッと膝をついて剣を地面に落とす。

「ち……っくしょうぉ……っ！」

レニオンは必死な形相で立ち上がり拳を突き出してくるが、あっさりと受け止める。

「寝ているんだな、獣人の王子よ」

オーノウスは、彼の意識を絶とうと首に手刀を落とそうとしたが、突然空から殺気を感じて慌ててその場から離れた。

――ザクザクザクッと、オーノウスが立っていた場所に、複数の鳥の羽が、鋭い刃物のように地面に突き刺さった。

「レニオン様ぁぁっ！」

上空からレニオンの傍へと降り立ったのは、背中から翼を生やした一人の獣人。

「……！　……バ……リド……？」

レニオンを助けに来たようだ。彼の呟きを聞いて、その者の正体を掴む。

「ほう、お主が《三獣士》の一人――《雷侯》バリドか」

オーノウスは、目の前にいる外見上は完全に鳥人間のバリドを見据えていた。

「……俺だけではない」

「何？」

バリドがそう言うと同時に、辺り一面を一瞬にして氷が覆った。

「こ、これは――っ!?」

オーノウスだけではなく、シュブラーズも同様に眉をひそめて警戒している。

レニオンの傍、凍った地面がモッコリと膨らみ、大きな氷の塊が出現。突如その氷塊が音を立てて割れた。

すると中からは、子供のように小さな体躯の、明らかにペンギンの着ぐるみだと分かるようなものを着用した存在が出現した。そのため素顔は分からない。

オーノウスが目を細めると、現れた者を観察して口を動かす。

「この氷……なるほど、お主があの《氷漠》か。名はプティス……だったはずだ」

そう、この戦場で異様な姿を見せる彼女こそ、バリドと同じく《三獣士》の一人だ。

「これで《闘飼》のクロウチが揃えば壮観だったろうな。王子を助けに来たのだろうが、悪いがお主たちを纏めて捕縛する」

増援は望めない状況ではあるが、このまま退却はさせてはならない。オーノウスは全身に力を漲らせて一撃のもとに、まずバリドから仕留めようとしたところ、

「……それは叶わんさ」

バリドの一言で、突如足元に広がっている氷が、オーノウスの足を固めて動きを奪った。さらにその氷が徐々に上半身へと伸びてくる。

「ぬぅっ！　……はぁっ！」

オーノウスが下半身に力を込めて拘束している氷を力任せに粉砕する。シュブラーズは拘束される前に上空へ跳んで逃げ出していたようだ。

そしてすぐにオーノウスは、目の前にいるレニオンたちに視線を走らせるが、ギョッとしてしまう。それもそのはず。何故ならレニオンたちの身体が、いつの間にか氷に覆われていたからである。

「この借りはいずれまた……」

バリドの呟きとともに、レニオンたちを覆っている氷が割れたと思ったら、そこにいたはずのレニオンたちの姿は掻き消えていた。近くに気配もない。

「ふぅ、逃がしたか」

「あらぁ、失敗しちゃったわねぇ」

「……仕方ない。だがこの戦場を勝利に収めたのは事実だ。それに他の戦場でもマリオネ殿たちが奮闘してくれている」

危機一発で逃げ出すことに成功したレニオンたちだったが、間違いなく戦況は戻って来た《魔王直属護衛隊》の力と指揮により、徐々に【ハーオス】へと傾いていた。

※

「ヒイロォォォォォォッ！」

クロウチが発生させた影に呑み込まれてしまった日色の名を叫ぶイヴェアム。

対してクロウチは、勝利を確定したように笑みを浮かべている。

「これで終わりニャ。僕の《化装術》は檻そのものニャ。これは《闘牢》といって何でも収納できる便利な能力ニャ。ただ生き物はこの中で息ができにゃいけどニャ」

「そ、そんな!?」

それでは窒息して死んでしまう。

「しかもニャ。この中には、まだ外に出してニャいモンスターがいるニャ。その数は五匹だけニャけど、どれもSSランクのモンスターで、一匹はSSSランクだニャ」

「う、嘘……っ！」

ということは、日色はそんな凶悪なモンスターを五体も一人で相手にしなければならない。しかも呼吸ができずに、だ。

「アクウィナス、今すぐヒイロを！」

「待て」

「何故だ！　このままではヒイロが！」

アクウィナスが少しも事態の窮地を理解していないのでつい怒鳴ってしまうイヴェアムに対し、彼の目は、静かにクロウチから広がっている影に注がれていた。

「アクウィナス……？」

「陛下、奴なら無事だ。あの中でも魔法が使えるのであれば……な」

その言葉にハッとなってイヴェアムも影に視線を落とす。

しかしクロウチは自身で生み出した影を背にし、建物の上にいるイヴェアムたちの方を向いてバカにしたように笑う。

「ニャハハハハハ！　ニャにを期待してるのか知らニャいけど、この中に入った以上、僕の許可ニャく出ることはニャ――ッ!?」

その光景に誰もが目を見張った。何故ならアクウィナスが視線を向けていた影から腕が突き出ており、その腕が持っている刀が、クロウチの胸を背中から貫いていたのだから。

「がっ……はっ!?　……ニャ……ニャに……がぁ……っ」

刀を勢いよく抜かれて、クロウチの胸から血が噴出する。フラフラとよろめきながらも必死な形相で背後を確認すると、そこからは……。

「――よっと」

全くの無傷のまま、影から日色がひょっこりと現れたのだ。

クロウチの《闇牢》に閉じ込められた日色。影から伸び出てきた触手には驚いたが、影の中に引きずり込まれた後は比較的冷静だった。

真っ黒な空間。まるで星のない宇宙空間に漂っているような感じだ。上下感覚すら行方不明状態である。しかし自分の状態も正確に判断できていた。

（息ができない……か。しかしそれ以外に別段変わった様子はない。……む？）

周囲に蠢く巨大な影。闇に目が慣れていき、それが徐々に正体を視認できるようになる。

（これは……相手をしてると息がもたない……か？）

見たところ、そこにいたのは、雰囲気からしてかなりレベルの高いモンスターのようだ。しかもそれが――五体。その中で極めて危険度が高そうなのは、

（……アイツだな）

他の四体の後ろで見え隠れしている、規格外に巨大な影だ。

時間をかければ魔法を駆使して倒せると思うが、呼吸を奪われている今の状況で五体相手は正直言って状況が悪過ぎる。

（奥ってくる様子はない？　いや、まだオレに気づいていないみたいだな）

だったらその時間を利用して……と、周囲に視線を巡らせる。広さは果てが見えないほど大きい。なるほど、これなら多くのモンスターをここに収納できるのも頷けた。そして何故ゾンビ体だけを収納しているのかも理解する。呼吸ができないのであれば、普通の生物では長時間この空間には滞在できないからだろう。すでに死んでいるゾンビならば、その心配はないということ。

（どうやら出口はなさそうだが……）

日色は息を殺しながら、モンスターに気づかれないよう一定の距離を保っている。

（オレを閉じ込めて殺すつもりだろうが）

指をササッと動かすと、闇の中で青白い光が軌跡を生む。

『脱出』

文字の光に反応して、モンスターたちの敵意が一気に膨らむ。ピリピリと大気を震わす雄叫びをあげるモンスターもいて、日色も反射的に身構えさせられる。それほどの相手だ。

（ならばなおさらこんな面倒なとこで戦ってられるか）

瞬時に文字を発動させると、頭上に文字が浮かび上がって光の環に変化する。そこを潜れば外に出られることは感覚で理解した。

モンスターたちも急いでこちらへ向かって来ていたがもう遅い。

光の環の先に、ここに閉じ込めた敵の姿を確認。

日色は刀を握り締め、その光の環に向かって突き出す――手応えありだった。

「――ヒイロっ!?」

イヴェアムの声が、影から脱出した日色の耳に入ってくるが、今はそれに応えるよりも、目前で胸を押さえながら膝をついている敵を無視できない。相当なダメージは与えたはずだが、それでもクロウチの闘志は一向に衰えていなかった。

「ぐぅっ……ど、どうして……ニャ?」

自分の《闇牢》に絶対の自信があったのだろう。だからこそどうやって日色が抜け出てきたのか気になって仕方がないはず。しかし。

「答える義務はない。早々に潰れろ!」

刀を振りかぶってクロウチ目掛けて振り下ろした。だが突然、相手の足元に広がる影が一気に膨らみ、彼全体を覆って刀の行く手を阻んだ。

「……また影か」

さすがは魔法が使えない獣人が編み出した《化装術》の力だと感心する。汎用力もかなり高い。

影の感触から、先程クロウチと打ち合った時と同じものを感じた。日色はひとまずその場から一歩後ろへ跳んで距離を取り、ウネウネと動く影をジッと観察する。

「なるほどな、オレの刀を素手で受けてたが、お前……その影を手に纏ってやがったな?」

だからこそ素手で刃物とやり合うことができたのだ。

膝をつきながらもニヤッと口角を上げるクロウチ。すると影が日色のつけた傷口に吸い込まれるように消えていく。

「ぐっ……がぁぁっ!」

その現象に激痛が伴っているのか、クロウチが歯をギリギリと噛み締め唸り声を上げた。徐々に身体が黒い炎を纏っているかのようにユラユラと揺らめき始める。

そんな中、日色は素早く間を詰めた。

「悪いが、変身シーンなどで手を出さないほど礼儀正しくはないんでな」

それはアニメや特撮の中だけにしろと思い、動かない相手を仕留めるのならこれ以上ないというほどのタイミングで勢いのまま刀を突き刺した。

クロウチは避けることも防ぐこともできなかったようで、再び胸を刀に貫かれた。

完全に捉えた――と思っていた日色だったが、クロウチが刃を摑んだ。

ゆっくりと顔を上げて、してやったりというような笑みを浮かべてくる。

「残念ニャ。もう変身は終わったニャ」

ゾクッとしたものを感じた日色は、すかさず距離を放つが、驚くべきことに傷がみるみるとクロウチの身体に埋め込む。まるで手応えがない。

「何だとっ!?」

日色だけでなく、戦いを見ていた者たちが驚きの声を上げていた。いや、イヴェアムとアクウィナスだけは、まるで見慣れているような自然な態度を保っている。

「やはり使えるか――《転化》を」

イヴェアムがクロウチを険しい表情で見つめながら発した言葉に、日色は注目した。初めて耳にする言葉だ。

「ああ、元々魔法が使えない獣人が編み出した《化装術》。その真骨頂は――魔法そのものになること」

イヴェアムの隣に立つアクウィナスも続ける。

「魔法そのものの身体。それはいわば、精霊と同じ存在になること。精霊と近しい存在である『獣人族』だからこそ可能になる術だ。しかし《転化》は制御が難しい。普通は一部分だけを《転化》するのがやっとなはずだが、さすがは《三獣士》といったところか。全身を《転化》させている」

「ヒイロ、気を付けろ! その者に単純な物理攻撃は効かない!」

イヴェアムの叫びが耳に届いた時、このままではマズイと思いすぐにでも足を引き抜こうとしたが、黒い腕で摑

まれてしまう。
「逃がさニャいニャ」
足を伝ってクロウチの身体から影が伸びてくる。
「さっきのお返しをするニャ」
クロウチから伸びた影が、日色の全身に巻きついて絞め殺そうとしてくる――が、バチバチバチバチィッと、突如日色の身体から凄まじい放電現象が起こった。
「ニャアッ!?」
その雷力に堪らず、その場を離れるクロウチ。そのまま距離を取ってから日色を見るが、その変わり様に表情が強張る。
「ま、魔法……ニャ？　いや、この感じは……いやいやありえニャいニャ！　ニャってこれは――っ!?」
クロウチは考えついたことに否定するように首を左右に大きく振る。戸惑うのも仕方のないこと。
「――どうだ？　お前と同じ身体だ」
日色の身体が、青白いプラズマで構成されているかのように色も変化していた。
『雷化』
それが、日色が書いて発動させた文字の正体である。
（文字通り、身体全体を雷と化して物理攻撃も無効化できるが、制限時間が短い。早々に決着をつける！）
文字効果は三分間であり、一度使うと同じ効果のある文字は時間を置かなければ使えなくなるという制限が存在する。なので素早く勝負を決する必要があった。
「お、同じ身体？　信じられニャいニャ……けどあれは確かに僕の《闇夜転化》と同じ力ニャ……！」
と、困惑を口にするが、考えていても仕方がないと判断したのだろう。すぐに日色から距離を取る。表情から先程受けたダメージも、完全に回復しているわけではなさそうだ。
それにクロウチとてこれほどの力。長時間維持できるとは思えない。
図らずも、日色が望む短期決戦は、クロウチにしても望むところなのかもしれない。
クロウチが身体から影を槍のように伸ばして日色へと攻撃を開始する。
日色も同様に雷を放電させ、矢のような形状をしたものを幾つも作り上げた。

攻撃が衝突し合い、その際に黒い塊や雷が周囲に飛び散ってしまう。被害に遭わないように、周りの者は悲鳴を上げながら建物の陰へと離れる。
「これでもくらえ！」
日色が『止』という文字を素早く書いて放つ。
「そんニャもん、当たるかニャッ！」
加速して真っ直ぐ飛ぶ文字から左側へと避けるクロウチ――だが、クイッと日色が指を左側に向けて折る。すると文字の進行方向もまた左側へと曲がり、
「ニャニャッ!?」
避けて安心していたクロウチの身体にピタリとくっつく。
（これが《遠隔操作》の力だ！）

魔界を冒険している間に手に入れた《文字魔法》の新たな力――《遠隔操作解放》。

> 《遠隔操作解放》　消費ＭＰ　３０
>
> 放った文字を遠隔操作することが可能。ただし動かせる範囲は、それぞれの文字の効果範囲内でのみ。また一度何かに触れてしまえば、それ以上は動かせない。

イヴェアムに放った文字をマリオネに邪魔された時に使用したのもこの力である。

「止まれっ、《文字魔法》！」

文字が発動した刹那、クロウチの身体がピタリと止まる。

今だ――と、雷の力を右拳に宿して殴り飛ばした……が、

（――手応えが……ない!?）

ただの物理攻撃ではないので効くはず。それなのにまるで水を殴ったような手応えしかなかった。

「――ウニャニャ……」

背後から寒気とともにクロウチが現れ、蹴りを放ってきた。

「ぐはっ!?」

不意を突かれた日色は、そのまま自分が殴り飛ばしたクロウチがいる方向へと吹き飛ぶ。

戦闘不能のダメージではないが、かなり痛かった。

起き上がって初めて気づく。

（！　……なるほどな。分身……か）

見れば、『止』を受けたクロウチが地面に倒れていたが、瞳に生気が感じられず人形のような印象を受ける。多分文字が当たる前に分身を作って、その場から逃げていたのだろう。

（オレとしたことが、見落としてたってことか）

単純に力比べをしてくると思いきや、知恵も絞ってくることに、相手の見極めが甘かったと痛感し、分析を修正していく。

「やるじゃないか、ニャンコ野郎」

「ニャハハ、これでも《三獣士》ニャし～」

改めて気を引き締める必要があると、日色は大きく深呼吸した。

「……よし、こっからだ」

しかしクロウチもさらに動きと力強さが増し、互角の戦いで鎬を削っていく。

そうして一分、二分と時間が過ぎる。

（そろそろ決着をつけないとな）

そう日色が思っていると、クロウチが技同士のぶつかり合いによって生まれた煙に身を隠しつつ、空へと高く飛び上がった。

日色は煙を払い、上空から感じる殺気に気づき見上げる。

そこには――十人に分身したクロウチがいた。

「――これで最後ニャァッ！　全力全開マックススピードでトドメッ！　喰らうニャ！《十愚の黒撃》いいいいっ！」

十人全員が、今までとは別格の速度で目まぐるしく動き回りながら天から突っ込んでくる。とても一人一人確認して相対することはできそうもない。

「……大した奴だ。オレじゃなかったら、その攻撃を受けてるだろうな」

雷で十本の矢を形成し空中に浮かべる。それを、向かって来るクロウチ目掛けて放った。

「そんな遅い攻撃、僕に届くわけがニャいニャッ！」

ヒュンヒュンヒュンと、軽業師のように空を移動するクロウチたち。目の前から迫ってくる矢を視認して、余裕を持って回避しようとする。

だが彼にとって予想だにしないことが――。

「――え？」

避けたつもりだったはずの雷の矢が、気がついたらクロウチの腹に突き刺さっていた。

「ニャ……んで……!?」

その時、クロウチの目に映る日色の指先には、『必中』と言う文字が浮かんでいた。

他の九体のクロウチの身体にも、ただの一本も外れることなく矢が貫いており、直後――雷に打たれたようにク

ロウチたちは叫び声を上げる。

「「「ニャパパパパパパパパッ!?」」」

空中から糸の切れた人形のようになって地面へと落下してくるクロウチたち。

他の九体も地面に落ちると影に戻り本体へと戻っていく。どうやら《転化》自体も解けたようで、感電した身体がビクビクと痙攣している。

仰向けに倒れているクロウチの首に、日色の刀が突きつけられた。

「お前らが起こした戦争だ。当然覚悟はあるんだろ？」

日色は冷酷な表情で彼を見下ろしている。

「っ……ニャハハ……しょうがニャいニャ……僕が弱かったってこと……ニャからね」

恐怖に顔を歪めるでもなく、むしろ楽しそうに笑みを浮かべている。そんな彼を見ると、呆れて肩を竦めてしまう。

「てっきり、死にたくないとか言うと思ったが？」

「ニャハハ、そんなつまらニャいことは言わニャいニャ」

「ほう、良い度胸だ。さすがはバトルジャンキーだな」

「楽しかったニャ。タロウは最高ニャよ」

タロウではないが、わざわざ否定することもないと思った。

「けど覚えておくニャ」

「ん？」

「今回は負けたけど、次生まれ変わったら、必ず勝つニャ」

呆れるほどの戦闘バカっぷりだった。それ以上はもう何も言うまいと思い、柄を握る手に力を込めたその時――

「――待て、ヒイロッ！」

突然の制止。日色はいつの間にか傍まで来ていたイヴェアムに鋭い視線を送る。

「どういうつもりだ？」

「殺すことは許さん」

「……理由は？」

「殺したくなどないからだ！」

「……コイツは他の『魔人族』を手にかけているはずだ。街も大分破壊された。それでも報復はしないと？それで他の者が納得できると本気で思ってるのか？」

さらに目を細めて彼女を見るが、それに気圧されることなく見返してくる。

「確かに彼は私の家族を傷つけた。しかし、殺すことで解決するとは思えない」

「……」

「他の者たちだって憎いだろう。だがそれでも殺しはしない。少なくとも今は」

「今？」

「ああ。彼は《三獄士》と呼ばれる、獣人の中でもトップクラスの実力の持ち主だ。なら彼を上手く使えば」

「交渉ができる……ということか？」

「ああ」

ジッとイヴェアムと睨み合うような形で視線を合わせるが、不意に日色が目線を切る。

「……まあ、オレは雇われてるだけだ。お前がそう言うのならそれでいいが、この先、コイツが暴れてもオレは責任は持たんぞ？」

「ありがとう」

日色はやれやれと思いつつ刀を鞘に戻した。

※

クロウチを打ち倒し、自分が行うべき仕事は一先ず終了した。これでお役御免かと日色は思った矢先――不意に倒したはずのクロウチから強烈な殺気を感じる。

突如地に伏している彼が、イヴェアムを見てバカにしたように笑い出す。

「ニャハハハハ、甘い！　ハチミツをたっぷりかけたパンケーキよりも甘いニャ、魔王！　敵に囚われた時点で僕の命はニャいに等しいニャ。それは僕だけじゃニャく、【パシオン】の兵士全員がそうニャ。それはそう思って動けと教えられてるからニャ。言いたいことは分かるかニャ？　僕には人質の価値はニャいということニャア！」

クロウチを殺さず交渉材料として扱うという発言をしたイヴェアムは、彼の言葉に対し何も言えないようで下唇を噛んでいる。

「それにニャ！　敵の命を奪うまで安心できニャいのが戦場ニャアアアアアッ！」

クロウチの叫びとほぼ同時――彼の背中から地面を伝って一気に影が広がる。

反射的に日色たちはその場から距離を取った。

「出てくるニャッ！　我が最高の下僕たちィイイイイイッ！」

大きく広がった影の中から――ナニカが地上へと上がってくる。

（――コイツらはっ!?）

それは日色には見覚えのある五体のゾンビモンスター。

「ニャハ……ハ……ッ、もう少し余裕のある時にィ……呼び出したかった……ニャア……」

突然黒い体毛で覆われていたクロウチの身体が真っ白になり、さらに小さく縮んだと思ったら、そのままバタリと地面に倒れてしまった。どうやら最後の力を振り絞ってモンスターを呼び出したようだ。それだけで呼び出すにも相当のリスクがあることが分かる。

（まためんどくさいことをしてくれたもんだな。それにあの一匹……）

五体のモンスターの中で、一際大きい身体と三つ首を持つ生物は、別格のような強烈な存在感を漲らせていた。他のモンスターと同様に身体は腐蝕しているのだが、単純な睨みだけでも大抵の者を恐怖で動けなくさせることが可能だと思われるような威圧感を発している。

（アイツは別格だが、他の奴らも……デカいな）

一踏みで建物を踏み潰すほどの巨躯を持つモンスター群を見て、誰もが呆気にとられたように硬直したまま。

「ま、まさか……このようなモンスターまで呼び出すとは……っ!?」

イヴェアムが信じられないといった面持ちで言葉にしていた。

「くっ、私が彼を生かしたばかりに……っ。けど……私はそれでも……」

クロウチを仕留めておけばこのような事態にはならなかった。結果的に敵を信じた彼女がバカを見てしまった形になる。

悲しげに顔を伏せるイヴェアムを、アクウィナスが諭すように言う。

「……陛下、嘆くのは後だ。今は現状を纏めるべきだろう」

「……そうだな。その通りだ」

泣きたいのをグッとこらえているような表情をしながらも、顔を上げて前を見据えるイヴェアムが口を開く。

「し、しかしまさかあのようなモンスターを呼び寄せようとは……」

「有名なのか、あのモンスターは？」

日色の問いに小さく頷きを返すイヴェアム。

「あ、ああ。あれは――ケルベロス。魔界でも二つといない存在だ」

やはりケルベロスかと内心で納得する。日本でも知っている者は多い。

ギリシャ神話において、冥府に通じる入口の番犬のこと。三つの頭、蛇の尾を持つ姿、あるいは首や胴体から何匹もの蛇が頭をもたげる姿で表されることが多い。

《冥府の番犬・ケルベロス》――日色も本で読んだ知識しかないのだが、外見上は確かにその通りのいでたちだ。

この【イデア】では最高のランクとされているSSSランクに相当するモンスターとして畏怖されている存在のようだ。たとえレベルが百を越えていたとしても、単身では一捻りにされるほどの伝説級のモンスターの一匹である。

「一体どうやってケルベロスを……？　いや、他にも手強いモンスターをこれほど」

イヴェアムは五体のモンスターに視線を向けながら額から冷たい汗を流している。

これは国の保護を優先などと言っている場合ではなくなったはず。

モンスターたちを呼び出して気絶しているクロウチを睨みつけるが、すぐに視線を切ってイヴェアムは部下に命令を出す。

「この者を捕らえて牢に入れておけっ！」

部下は返事をすると、クロウチを拘束して運んで行った。

「くっ！　こうなったらアクウィナス、皆で力を合わせて奴らを仕留めるぞ！」

「いいのか陛下？　あのような巨大モンスターと本気で戦えば、ここら一体は滅茶苦茶になくなるぞ？」

「し、しかしそうも言ってはいられない！　放置しておけば益々被害が広がるばかりだ！」

だからあの時、クロウチが何かする前にトドメを刺しておけば良かったんだと日色は内心で思ったが、もう自分

がすることはないと勝手に判断して、高みの見物に徹する。
「この国には貴重な文化遺産もあるというのに……」
そんなイヴェアムの言葉を受けて不意に思い出すことがあった。
確かこの近くには、日色が渇望して止まない——あるものがあったはず。
それは——《フォルトゥナ大図書館》。
そのことに今更気づき、日色は顔を大いに引き攣らせた。
（ちょ、ちょっと待て……あんな連中がここで暴れたら貴重な知識の宝庫が……！）
日色の脳裏で、粉砕されていく図書館が浮かぶ。貴重な書物がグチャグチャに潰され、炎に包まれ……後はもう想像したくなかった。
（マズイ！　これは早急に手を打たなければ！）
高みの見物などしている場合ではなかった。
「ちょっと待てっ！」
日色がイヴェアムたちの意識を自分に向ける。
「な、何だヒイロ？」
「ダラダラと相手なんかしてられるか。もしあの化け物に《フォルトゥナ大図書館》を破壊されたら目も当てられんぞ！」
焦った表情を見せながら言う日色に対し、イヴェアムがケルベロスを指差す。
「と、図書館？　あ、いや、しかしあのモンスターを見ろ！　ゾンビ化のせいで動きは鈍いし思考能力はないようだが、それでも攻撃力は手足の一振りだけで一瞬にして建物を吹き飛ばせるほどの存在だぞ！　どうしたって倒すのには時間が掛かる！」
「そんなことはない」
「……は？」
「確かめるが奴は、というより奴らはゾンビ……なんだな？」
「え……ああ、そうだが……それがどうした？」
何故今更そんなことを確認するのかイヴェアムに意味が伝わっていないのだろう、彼女が首を傾げていると、ア

クウィナスが間に入ってくる。
「……やれるのか？」
「当然だ。本来ならこれは魔王の不手際で、オレの仕事はもう終わった感抜群だったんだが、事情が変わった」
まだ読んでもいない書物を失うわけにはいかない。
日色の言葉にイヴェアムが若干嬉しそうに尋ねる。
「ち、力を貸してくれるのか？」
「戦うにしても、奴らがゾンビじゃなかったらもっと時間がかかったかもしれないがな」
日色は魔力を両手の人差し指の先に集束させていく。
「っ!?　あ、相変わらず凄い魔力……っ」
日色の魔力量に圧倒されているようで、イヴェアムは後ずさりながら日色の青白く光る指を見つめている。
「おいそこの……赤髪、奴らがあの場所から動かないように足止めしろ」
「……いいだろう」
アクウィナスに向かって偉そうに命令したが、彼は怒ることはなく、その言葉に従って動いてくれる。
アクウィナスが僅かに深呼吸をして瞼を閉じる。そのまま一歩前に出た。
「……陛下、少し街が壊れるが許せ」
「あ、ああ、やってくれ！」
アクウィナスがゆっくりと天を仰ぎ、閉じていた瞼を上げた直後——大気が急に怯えているかのように震え出し、日色でさえ驚愕するほどの濃い魔力が、アクウィナスの身体から溢れて立ち昇り、薄黒い雲を突き抜けていく。
「——我がもとに顕現せよ、《第三の剣・束縛する巨大剣》」
彼の呟きが終わった瞬間——空から雲を割って、人が十人集まっても持つことすらできないほどの大きさを持つ剣が、夜色のオーラを纏いながら現れた。しかもそれが五本。
「ちょうど良かった。俺でもこの剣を顕現するのは五本が限界だったからな」
その大剣群が空気を切り裂くような勢いで、五体のモンスターに突き刺さっていく。モンスターたちは元々死んでいることで痛みというものはないので呻き声一つ上げない。
突き刺さった剣が身体を突き破り地面まで貫いており、身動きを奪っているようだ。

「何かをするのなら早くするのだな。奴ら相手に、そう長くは保たんぞ」
ケルベロスを貫いている大剣に、徐々にヒビが入っていく。他のモンスターたちのも、ケルベロスほどではないが、ミシミシと剣が悲鳴を上げている音が聞こえてくる。
やはり腐っていてもSSランク以上のモンスターだけはあるようだ。
しかしこれだけの魔法を使用しておいて、涼しい顔を向けてくるアクウィナスに、日色は驚嘆する。
（おいおい、オレがここに来なくてもコイツ一人いれば問題なかったんじゃないか）
大剣に貫かれて地面に串刺しにされているモンスターを見つめる。モンスターは必死に抜け出そうとジタバタしているせいで、地面が徐々に破壊されていく。
（まあ、奴が言ってたように若干街は傷ついたようだがな）
それがもしかしたら、アクウィナスが今までこの力を使うことを渋った原因かもしれない。強力過ぎて周囲を巻き込んでしまうのだ。
「――さて、十分な成果だ。こっちも準備はできているしな」
両手の指先に浮かんでいる青白い文字。
『浄化』と『空間』。
この両手文字は、右手で効果、左手で範囲を指定して発動させる《文字魔法》の能力の一つ――《範囲指定解放》で手に入れたもの。

《範囲指定解放》　消費MP　1000
二つの文字列を書き、一方は効果を、もう一方はその効果範囲を指定することが可能。一文字魔法なら一文字魔法を、二文字魔法なら二文字魔法といった同じ文字数でしか対応できないので注意する。

これは初めてイヴェアムと出会った時、不良どもを飛ばした時、この国で獣人たちを引き寄せて攻撃した時、また【聖地オルディネ】に向かった時にも使用していた。
かなりの魔力を消費してしまうが、その威力は絶大を誇る。
日色は、その場から五体のモンスターが立つちょうど中心ほどに移動した。

「――浄化しろ、《文字魔法》！」
日色を中心にして辺り一面が眩い光で包まれる。その発光量にその場にいる者たちが顔をしかめて目を閉じた。
光は半球状に広がって行き、半径百メートルほどを覆い尽くす。
するとその空間内にいるモンスターたちに異変が生じ始めた。腐蝕した身体が、老朽化した土壁のようにボロボロと崩れ始めたのだ。
日色以外は言葉を失ったかのように、その光景を見て動きを止めている。
瞬く間にケルベロス以外のモンスターは、骨だけになりバラバラと地面に転がった。
そして残りは――ケルベロスのみ。
（コイツがもし現役のままだったら、さすがのオレでもあの力を使わないと勝てなかったかもしれないがな）
とうとうケルベロスは、二つの首を地面に落とす。残りは首一つ、痛みを感じないはずなのに、苦しそうに呻き声を上げながら膝を屈する。
「ゾンビがアダとなったな。まあ、獣人に捕まったのが運の尽きってことで諦めてくれ」
「ギギィ……ガガ……」
「……じゃあな――《冥府の番犬》」
最後に断末魔の叫びを上げながら、他のモンスターと同じように骨と化して沈黙した。
そうしてクロウチの最終手段は、またしても日色によって呆気なく失敗に終わったのだ。
振り返ってみれば、魔人側の被害は最小限。敵は一掃され、将の一人を捕縛することもできた。それを成せたのはたった一人の少年の力が大きい。
間違いなくイヴェアムたちの圧倒的勝利であった。

「「「うおおお

だが勇者や《三獣士》、レニオン王子などの指揮官クラスが戦場からいなくなったことで、敵の士気は大いに下がり、逃げ帰る者が出だしていく。

帰って来たイヴェアムたちの力により、徐々に戦場は一旦の収束を示していった。

エピローグ

【魔国・ハーオス】にて、魔人たちが勝利の雄叫びを上げていた頃――。ジメジメとした湿気と、ほんの細やかな明かりしかない暗い場所で、

「……う……っ」

一人の青年が目を覚ました。

それは勇者の不審な行動を追っていて、何者かに意識を奪われてしまったナザー・スクライド、いや――《魔王直属護衛隊・序列三位》であるテッケイル・シザーだ。

目を開けると冷たい地面の上に俯せ状態で寝ていることに気づく。

「……はは……どうやらここはあの世じゃないようッスね」

手足を拘束されながらも、ハッキリとした生を実感する。自分は間違いなく殺されたのだと思っていたが、どうやらまだ命はあるようで少しホッとしていた。

仰向けに寝返りをうつと、ここが一体どこなのかを判断するために周囲を見回した。見たところ洞窟のような場所だ。上空にある鍾乳洞で勝手に決めつけただけなのだが。

鉄格子もあるし、洞窟に作られた檻に閉じ込められているようである。

（けど、何で僕は殺されてないんスかね……？　というより、どれだけ眠っていたかも気になるッスね）

周りに人の気配がしない。上半身を起こし、そのまま身体を捻ってもう一度周囲を確認してみる。……かなり先の方に光が見えた。

（あれは出口なんスかね？）

ここで大人しくしているわけにはいかないので、とりあえずは出口らしき光を放つ場所を目指すことにする。一度寝転び、反動をつけて今度は上手く立ち上がる。

「む～、この拘束具……魔具の一種ッスかね？　ピクともしないッス」

力一杯拘束具を引き千切ろうとしてみるが、ウンともスンとも言わない。魔法の力を発揮する道具――魔具。効果は様々だが、この手錠と足枷は、相手の身体能力を制限するだけのもののようだ。

「ん～、どうやら愛用のペンは取り上げられたようッスね」
テッケイルはそのペンで絵を描き、それを具現化させることのできる魔法を持つユニーク魔法使いだった。しかしそれは描くものがないと効果は発揮しない。
「やっぱ、あの時見たものは間違いじゃなかったんスね……まさかあの人が……信じられないッス」
しかしそれなら自分の能力のことを知っていても不思議ではないし、こうしてペンを取り上げておけば、魔法が使えないと判断したことも頷ける。
だがテッケイルはクスッと笑みを零すと、
「けど失敗したッスね」
ガリ……っと、テッケイルは自身の下唇を噛み切った。
地面にポタポタと血が滴り落ちていく。
「ペンがなくても、描くものはあるッスよ」
舌をペロッと出すと、大きな岩に舌をつけて血を利用し描いていく。
（う～ザラザラしてて気持ち悪いッスけど、この際ガマンッスね）
それは鳥の絵だった。描き終えるとその絵が立体的に浮き出てきて、本物の鳥のように空を舞い始める。そしてテッケイルの肩に降り立つ。
「今ある情報を、必ず陛下に伝えてほしいッス」
鳥が「チチチ」と鳴き素早く頭を動かしている。
「僕も隙を見て、脱出できればすぐに【ハーオス】に戻るッスから」
するとゾッとした寒気が背中に走る。空気が何倍にも重くなっていく。
「マズイッスね……どうやら帰って来たようッスね。ほら、あの上から飛んで行くッスよ！」
そうして頭を上空に向けてクイッと動かす。そこには小さな光が射している部分があった。とても人が通れるほどの大きさではないが、この小さな鳥ならば問題なく通過できるはずだ。
テッケイルが促すと、鳥は再度「チチチ」と鳴いて、その穴から外へと飛んで行った。
カツカツカツカツと、洞窟内に足音が響き渡るのを聞く。
先程まで自分が寝ていた場所まで戻り、また横になる。相手の思惑がハッキリしない以上、このまましばらく様

子を見ることにした。
もしかしたらいろいろ情報を得ることができるかもしれない。殺される可能性は極めて高いが、幸い今持っている情報は届けることができたと思う。
（それにまだ僕が見たあの人が、あの人だっていう確証もないッス。何とか無事に情報が得られればいいんスけどね）
それに相手の油断を誘い反撃するためにも、このまま気絶したフリをしている方が何かと都合が良いかもしれない。
（何か大きな力が動き出そうと……いや、すでに動いている気がするッス。陛下、どうか最後まで油断しないでほしいッス）

※

「――――おい、これはどういうことだ？」
イヴェアムたちと別れた氏村日色は、自身が泊まっていた宿屋へと帰還していた。
獣人兵の指揮官たちが軒並み撤退したことで、獣人兵たちも一斉に敗走した。続いて人間の兵たちも、隊長格の者から今すぐに自国へ引き返せという指示があったらしく、そのままこの国から蜘蛛の子を散らすかのように去ったという。
獣人兵が去った理由は分かるが、人間兵たちが何を慌てたように去ったのかは謎に終わったが。自国で何か問題でも起こったのかもしれない。
結果、【魔国・ハーオス】を脅威に陥れていた敵が一掃された。日色も《フォルトゥナ大図書館》が無事だと聞いてホッとする。まだ近くに敵が潜んでいる危険性は高いので容易ならぬ現状ではあるが、一先ずの落ち着きは獲得できたのだ。
それからイヴェアムからは簡易的にだが礼を言われ、後はもう我々だけで何とかできるということで別れることになった。
現状を把握し、落ち着きを取り戻した後に連絡するから待っていてくれということで、イヴェアムに宿屋の場所

を教えた後、こうして戻って来たわけだったが……。

何故か自分の部屋に、会話もまともにしたことがない他人が二人いた。一人は自分が寝ていたベッドを占領し、一人は身体に負った傷を治癒魔法で治していた。

よく見なくても分かる。二人は四人の勇者の二人だ。

何故その二人がここにいるのか？　そしてもう二人はどうしたのか？

この状況を作ったであろう者に問い質す。

「説明しろ、バカ弟子」

ニッキの首根っこを掴んで、猫を持ち上げるようにする。

「うぅ～申し訳ありませんですぉ～。言うの忘れてたのですぅ～」

宙に浮かせられながらシュンとなっているニッキ。それを見てミカヅキが楽しそうに笑いながら「バ～カバ～カ、おこられてるぅ～」と言っている。

ニッキが言うには、日色が会談場所から戻った時、伝えなければならないと思いながらも、ミカヅキとのやり取りなどで、すっかり忘れてしまっていたらしい。

こういうところがバカだというのだ、と日色は呆れ返る。

どういう状況があって、どうしてこんなことになっているのかニッキから説明を受け、思わずこめかみを押さえてしまう。

「……なるほどな。その風使いの獣人の攻撃に巻き込まれて、残りの二人は飛んで行ったというわけか。それで気絶したそこの女をとりあえずお前が宿に案内したと」

残された勇者二人――赤森しのぶと皆本朱里は、ニッキの計らいでここにいるとのこと。

（ったく、余計なことをしおって）

ジロリと正座をして反省をしているニッキを睨んでいると――。

「――あ、あの……丘村っち？　その子を許してあげてぇな」

と、しのぶが畏縮するように言ってくるが、

「少し黙ってろ」

すっぱり切ったら、しのぶも「あ、うん」と言って、日色の不機嫌さを感じているのか押し黙ってしまった。

「……まあ、やってしまったことについては何を言っても仕方がない。赤ロリはどうした？」

ニッキと一緒にいたはずのリリィン・リ・レイシス・レッドローズのことを聞く。

「それはですね、シウバ殿たちを迎えに行ってくると言ってどこかへ参りましたですぞ！」

「……はぁ、ホント面倒だな」

まだここに来ていない仲間たちを迎えに行ったみたいだが、ニッキとミカヅキのお守りが嫌で、逃げ出したに違いなかった。

やれやれと頭をかきながら、自分のベッドに寝ている皆本朱里に視線を送り、軽く溜め息を吐くと、今度はしのぶに顔を向ける。彼女は不安そうに目を見返してきた。

「今は仕方ないからベッドを貸してやるが、夜には出て行けよ？」

冷たく言い放ち、別の部屋を取ろうと思い踵を返して部屋から出て行こうとすると、しのぶが慌てて声を出す。

「あ、待ってぇな！」

「あ？」

「え……あ、そのな……ホンマに丘村っちなん……やな？」

「それがどうした？」

今の日色は『インプ族』の姿なのだから戸惑うのも無理はないだろう。

「ホンマゴメンッ！」

突然勢いよく頭を下げて謝罪する彼女を、日色は無表情のままジッと見つめる。

「こんなこと頼める義理やないんは分かっとる！　けどな、頼れるんは丘村っちしかおれへんねん！」

「……」

「こ、ここは魔人だらけやし、外にも迂闊に出られへん……せやから……」

「しばらく匿ってくれ……ということか？」

しのぶはピクッと肩を震わすと、ゆっくりと顔を上げる。

「……アカン……かな？」

彼女の目をしばらく見つめた後、大きく溜め息を肺から押し出す。

「あのな、お前らはここに攻めてきた敵だぞ？　そして依頼とはいえ、オレはこの国を守る立場にいた。どの面下

げて言うんだ、お前は」

本当に呆れる。自分の立場というものを全く理解していない。

「お前らは勇者だろ？　『魔人族』を滅ぼすために『人間族』に召喚された英傑だ。そのお前らが、もう戦いませんから『魔人族』が住む国に、傷が治るまで住まわせてくださいとよく言えたもんだな」

日色の辛辣で突き放した言葉に、言い返すこともできずに下唇を噛むしのぶ。

「大体おかしいと思わなかったのか？　お前らみたいなのほほんとしたゲーム脳の奴らを、戦場に送った理由が」

「……え？」

しのぶはポカンとしている。どうやらまだ気づいていないらしい。

「……はぁ、お前らはただの捨て駒だ」

「そ、そんなことあらへんよっ！」

「いいや、オレは直接国王に確かめた」

「へ？　直接ってどういう……」

「言葉通りだ。直接人間王……いや、もう愚王だな愚王。そいつに会って来ただけだ」

「え……でもどうやって？　丘村っちはここにおったんよね？」

「方法なんてどうでもいいだろ。それがそんなに大事か？」

そう言い放つと、またも押し黙るしのぶ。

「あの愚王は否定しなかったぞ？　お前らのことをオレが捨て駒だと言った時にな」

「……う、嘘や……っ」

「大体お前らは何故あんな愚王を信じることができたんだ？　自分の娘を犠牲にする王が、正しいわけないだろうが」

「っ!?」

日色の言葉に衝撃が走ったように目を丸くする。

「それにだ、この世に送還魔法なんて――無いと思うぞ」

「……へ？　無い？」

「そうだ」

「そ、そんなわけあらへんて！　だって王様は魔王が知ってるって言うとったし！」

そう、確かに日色たちを召喚した後、ルドルフ王はそう言っていた。

「ホントに信じてたのか？　よく考えてみろ。何故魔王が知ってる。仮に知ってるとしたら、何故召喚魔法を知ってる『人間族』が知らない？」

「そ、それは……」

「それにだ、お前らこの世界の文献や書物は読んだのか？」

「文献……書物？」

「そこには召喚された勇者は確かに『人間族』を救ったと書いてあるが、どの本にも元の世界へ帰還したなどと書かれたものなどなかったぞ」

徐々にしのぶの顔色に血の気が失われていく。その様子だけで、本当に彼女たちが何も考えず、何も調べずに日々を過ごしてきたことがよく分かる。

「ここに来て今まで、一体何してたんだ？　どうせ国王に指示された任務や鍛錬だけをこなして、偉いさんの相手をして、毎日毎日城で楽しく過ごしてたんじゃないのか？」

まさしくその通りなのか、彼女からゴクリと喉を鳴らす音だけが聞こえた。その態度を見て、呆れて日色は首を左右に振る。

「やはりな。与えられたレールの上を指示された速さで歩いて、それで戦争に勝つ？　お前ら、世界を舐めてるのか？」

「あ……」

「一度でも一人で冒険に出てみたことがあるか？　モンスターに殺されかけたことは？　その手で人を斬ったことは？　殺したことは？」

「うぅ……」

「温室の中でぬくぬく育てられた犬が、野生の猛獣や狂犬揃いの戦場に放り出されて無事なわけがないだろうが」

しのぶは立っているのが限界といった具合に膝を折った。身体も小刻みに震え出す。

「国王は気づいてたんだろうよ。お前らは人も殺せない役立たずだとな。精神的に甘く、利用の幅も狭い。だからこの戦争で捨て駒にした。もしここでお前らが殺されれば、今度はそれを理由に民たちを煽り、更なる戦争を起こ

す火種にする。そんなところだろ」

「嘘や……嘘や嘘や……！」

「勇者は力一杯戦った。だが『魔人族』は卑怯な方法で彼らを謀り殺した。これが許されていいのか？　死んだ彼らの無念を晴らすためにも皆で仇をとるのだ……とか何とか言って、お前らの死を国民たちの怒りを引き起こす起爆剤として扱っただろうな」

「……そんな……せやったらウチらがしてきたことって……っ」

信じられないといった感じで両手を頬に当て、絶望の表情を浮かべている。

「まあ、不幸だったのは周りにそれを気づかせてくれる者がいなかったことだが、普通は気づくもんだぞ。あの国の怪しさにな。だからオレは出て行った」

「そ、そんな！　せやったらあん時、ウチらに教えてくれてもええやんか！」

「甘えるな」

「う……くっ」

殺気を含ませた視線をぶつけると、気圧されて尻餅をつくしのぶを冷ややかに見下ろす。

「少し考えれば誰でも分かることだ。どうせお前らは浮かれてたんだろ？　ここはゲームのような世界で、オレらは勇者だ。怖い者などない……とな」

「あ……」

「だから普通では気づくはずの矛盾やおかしなことに気がつかず、何とかなると息巻いて、不確定な要素に見向きもせず、他人に言われるがまま日々を過ごした。ここにこうしているのは、何も考えず危険な世界で過ごしてきた報いじゃないのか」

「それは……」

「ここはゲームみたいなご都合主義の世界じゃない。お前らは立場として勇者かもしれないが、何もせず英雄になれるほど世界は簡単じゃない。今の状況は、お前らの甘さが招いた結果だ」

「せ、せやけど……」

まだ納得していないというよりは、納得したくないという意思が窺える。

「……愚王が送還魔法の話をした時、確かお前ら二人は他の二人と違って、少し疑問を持ったような顔をしていた

が、あれはオレの見間違いだったようだな」

ルドルフ王が送還魔法について語った時、いや、それ以外でも召喚された者が元の世界に帰るまで、向こうの世界では存在が無かったとして扱われるなどと詭弁のような言葉を並べ立てていた時も含めて、少なくともしのぶと朱里だけは、その言葉に疑問を持っているような表情をしていたのを思い出したのだ。

「そ、それは……」

何やら言い難そうに顔を伏せるしのぶを見て確信する。

「どうせこう思ったんだろ？　嘘かどうかは分からないが、こっちに来る魔法があるんだから、必ず帰る魔法もあると」

「……っ!?」

「それに勇者という肩書き、ファンタジー世界、そういったものに浮かれていたお前らは、そんな重大な疑問をあっさりと捨て去った。何とかなる。自分たちは仲間が四人もいるんだ。支え合ってれば、いつか元の世界に戻れる……とかな」

日色の言葉に口をパクパクさせて固まっている。彼女の額からじんわりと汗が流れ出て、日色の言葉が完全に的を射ていることを証明していた。

「そんな確証なんてどこにもありはしないのに、お前らはせっかくの疑問を押し殺した。自分たちで調べようともしなかった。ハッキリ言ってやろうか？　この状況を生んだのは、そこに寝ている奴も含め、お前ら二人のせいだと言っても過言じゃない」

「ウチらの……せい？」

「少しでも疑問が浮かんだ時、他の二人に対し言葉にしていれば国王のやることに疑問を持つことができたかもしれない。それをしなかったお前ら二人の状況判断の甘さが今だ」

言葉にしていれば、四人で話し合う機会も持てたかもしれない。

少なくともこの状況になるまで何も気づかないという愚鈍さからは抜け出せた可能性が高い。しかししのぶは、いや朱里も含めて彼女たちは、日色の言う通り、目の前の輝かしい未来に浮かれて、小さな疑問のことなど忘れていたのだろう。

その疑問が、自分たちの運命を左右することも知らずに目を向けなかったのだ。

自分たちのせいと言われても反論することができないのはそのためである。
それからしばらく沈黙が続いた。傍にいるニッキとミカヅキも、余計なことを言うような空気ではないことを悟っているのか黙っている。すると……。
「……間違っていたんですね……私たちは」
静寂の中、口火を切ったのは、寝ていたと思われていた朱里であった。
「しゅ、朱里っちっ!?」
しのぶがベッドに駆け寄り、彼女の手を取って顔を見つめる。
「心配したで……朱里っち」
「ごめんなさい……しのぶさん。話はずっと……聞かせて頂いていました」
朱里が苦痛に顔を歪めながらも上半身を起こそうとする。
「あ、まだ寝てなアカンて！」
「いえ、大丈夫……です」
「朱里っち……」
そうしてしのぶの制止の声を無視して上半身を起こすと、朱里は腕を組んで憮然としたまま立っている日色の顔を見やる。
「本当に……丘村くん……なんですね」

またか、と思い、鬱陶しくなったので、
「……ふぅ、これなら理解できるか？」
『元』の文字を使い、人間の丘村日色に戻った。
無論二人はギョッとなるが、本物の日色だということが伝わったようで安堵のような表情を見せる。ちなみにニッキたちはもう知っているので驚きはしない。
「何や、丘村っちは、やっぱその方がええな」
「ここは魔界だ。鬱陶しい訝いを避けるためには魔人の姿の方が良いに決まってるだろ」
無愛想に言う日色を見て、朱里は少し頬を緩めた。
「ふふ、やはり丘村くんです。覚えていますか、丘村くん」
「ん？　何をだ？」
「日本にいた時、あなたは私たちと話した記憶が無いと言っていましたが、実は私とは入学式の日、一度だけ話しているんですよ」
日色はそのことを覚えていない。というより彼女が出鱈目を言っていると思っていた。
日色の様子に物悲しそうに目を伏せる朱里だが、顔を上げて説明し始める。
「丘村くんは、入学式が終わってすぐに図書室に行きましたよね？」
そういえば行ったな、と思い出す。
「その時、私も行きました。私も本を読むのが好きなので、どんな本があるのか楽しみで、つい足を伸ばしてしまったんです」
「その時に会ったってことか？」
「はい、図書室へと入ろうとした時、逆にあなたが出てきました。その時、ちょうど肩がぶつかってしまい、あなたが持っていた本を落としたんです」
「……あ」
そう言われて、ようやくその時のことを思い出した。……確かにあったのだ。
「思い出しましたか？　会話という会話ではありませんでしたが。その時、私が本を拾ってこう言いました。『本、お好きなんですか？』と。その時、私に何と答えたか覚えていますか？」

「……さあな」
そんなこといちいち覚えていない。彼女はよく覚えているもんだと感心する。
「あなたはこう言いました。――『生きがいだ』と」
「……そんなこと言ったか？」
「ええ、それだけの会話でしたが、あまりにも単純で、それでいて複雑で、とても印象に残っているんです」
か弱そうに微笑みながら答える。
ニッキは「さすが師匠ですぞ！　よっ、知識欲の権化！」と言って調子に乗っていたので拳骨をお見舞いしておいた。
「それで？　その話が何のためになる？　まさかそれで同情を引こうとしてるのか？」
「いいえ、ただ丘村くんとお話ししてみたかっただけです。こちらに来た時は、すぐに離れ離れになってしまいましたから」
「そうやったんか……朱里っちと丘村っちがそんな出会いをしとったやなんて」
出会いなんてどうでもいいだろ。今はお前らのことだ。オレとしては夜までに出て行ってくれたらそれでいい」
「……そうですね、これ以上は、丘村くんに迷惑がかかりますから」
「ちょ、ちょっとそんでええの朱里っちは！　まだ気分も良くあらへんねやろ？　それにや、ここを一歩でも出るといつ襲われてもおかしないねんで？」
「ですが、千佳さんたちを探さなければなりませんし」
「せ、せやけど……」
吹き飛ばされた二人がどこにいるのか気になるのは当然だろう。しかしここは言ってみれば敵地のど真ん中。しかも勇者で人間である彼女たちが、そう簡単に今の状況で国外へと抜け出せるはずがない。
「それにな朱里っち、丘村っちの話がホンマやったら、ウチらにはもう人間界に……あの国に居場所はあらへんのとちゃう？」
「そ、それは……」
二人がともに悲しげに目を伏せる。国王は勇者を捨て駒として使った。仮に無事に帰還できたとしても、また傀儡として扱われるだけだし、そんな国王の下で、また戦いたいと願うほどバカでもないはず。

「言っておくが、近いうちにここへ魔王の使いがオレを呼びにやって来るぞ」
「えっ!?」
二人はそれぞれに顔を青ざめさせる。それもそのはずだ。彼女たちは魔王を倒しにここまでやって来た。その魔王が彼女たちを許すわけがない。見つかったら殺されると思うのは至極当然の発想だ。
「むむ？　何故師匠が呼ばれるのですかな？」
ニッキが首を傾げながら聞いてくる。
「ニッキはバカだよ！　そんなもんごしゅじんがかっこいいからにきまってるもん！」
ミカヅキがそれに続く。
「むぅ～バカとは何事ですか！　それに師匠がカッコ良いのはボクがいっちばん分かっていることですぞ！」
「ちっがうも～ん！　いちばんわかってるのはミカヅキだもん！」
「ボクですぞ！」
「ミカヅキだもん！」
――ポカッ！　ポカッ！
「にょわっ!?」
「クィィッ!?」
「お前ら、ちょっと外へ行ってろ、邪魔だから」
額に青筋を立てて怒っている日色を見て、二人は半泣き状態で頭を擦りながらしょぼんとして部屋から出て行った。
そんな三人のやり取りを見ていた朱里が微笑しながら言う。
「仲良しなんですね」
「目が腐ってるのか？　アイツらはオレの部下みたいなもんだ」
「部下って……出世したんやな……丘村っちは」
「お前らと違って遊んでたわけじゃないからな」
彼女たちも頑張ってきていないというわけではないだろうが、日色の頑張りと比べると見劣りしてしまうのもまた事実だろう。

「ところで、さっさとどうするか決めろ。言っておくが手は貸さんぞ」
「な、何でなん？」
「関係ないからだ」
ズバッと言われしのぶは固まる。
「あの時と一緒ですね……関係、ない」
この世界に来た時に彼女たちに言い放った言葉でもある。
「そうだ、お前らとオレとは何の関係もない。ただ一緒に召喚されてきたという共通点があるだけだ」
「他人やから……関係あらへんから、ウチらがどうなってもかまわんっつうことか？」
少し殺気の混じった言い方になっている。
「ああそうだ」
「そんな！」
「お前らだって、オレが一人でこの世界をどう生きてきたかなんて考えてもいなかっただろ？」
「っ、それは……」
「オレが初めて人に似たモンスターを殺した時に感じた思いも、ユニークモンスターと戦って死にかけたことも、実際に人をこの手で傷つけたことも、何もかも知らないだろ？」
「で、でもそれは当たり前やんか！」
「ああ、当たり前だ。だって関係ないからな」
「せやからそれは……」
「なら知ってたらオレのために遠くまで駆けつけたっていうのか？　お前らがのほほんと城で食っちゃ寝してる時に、遠くの魔界でオレがモンスターに囲まれていると知った時、お前らは一目散に駆けつけてくれたか？」
「……」
「それはないな。そんな高尚な思いがあるのなら、こんな世界にオレが一人で生きていくと言った時、何が何でも止めてるはずだからな」
「……！」
「結局お前らは自分たちのことしか考えてない。戦争に参加したことも、本当に『魔人族』は滅ぼさなければなら

ない存在なのかどうかも調べようとしなかったろ？　それは自分のことしか考えてないからだ。この国や、魔界を見て回ったことがあったか？　『アスラ族』の集落に行ったことは？　奴らは死者の魂を重んじ、厳しい砂漠という環境の中でも必死に生きる連中だった。『オーキッド族』は？　あそこの奴らは人間に仲間を滅ぼされても、争いが嫌いだから決して自ら手を出すような奴らじゃなかったぞ。人間に救われた過去も持っていて、いつか人間も魔人を好きになってくれると信じて祈る奴らもいた。それに――」

「もう止めてぇやぁっ！」

しのぶは両耳を塞ぎながら、これ以上は聞きたくないという姿勢を見せた。だが日色はまだ続ける。

「それでもお前らは、何も考えず『魔人族』を滅ぼすのか？　もっと周りを見てみろ。世界は単純じゃないんだよ。いろんな奴らが、いろんな思いを持って生きてる。お前らがどんな正義を持ち戦って来たのか知らんが、オレからすれば何も見ようとしていないお前らの方が悪に思えるがな」

そのまま日色は扉を開けて外へと出て行った。もう何も言うことはなかったのだ。

残された二人は、時を凍らせたように目線を下に向けていた。

勇者二人にガッツリ自分の言いたいことを言い放った日色だったが、部屋から出た時、すぐ近くにいた人物が面白そうに笑みを浮かべていた。

日色はそのまま壁を背にしている人物の前を通り過ぎて、外へと向かう。するとその人物も後ろからついてくる。

「ずいぶん苛めたではないか。何も知らぬヒヨッコ相手に」

「帰ってたのか」

それは赤ロリこと、リリィン・リ・レイシス・レッドローズだった。

「何をイライラしてる？　いつもの貴様なら、話を聞くまでもなく放置しておくだろうに」

「……まあな」

顔に出していないつもりだったが、彼女には若干気分が悪いことを見抜かれていたようだ。さすがは曲がりなりにも半年以上一緒に旅をしてきただけはある。

「……ところでいつまでその姿でいるのだ？」

「あ？」

「まあワタシとしては、どっちでも構わないがな。ククク」

そこでようやく自分がまだ人間の姿だったことを思い出した。少し感情的になって忘れてしまっていたようだ。

リリィンにもニッキと同じく、この半年の間に人間だということがバレているので良かったが、このまま外に出れば面倒なことになりかねない。

日色は『化』の文字で『インプ族』の姿になり、そのまま宿屋の外へ出て行く。

そこには先程追い出されたニッキたちと、いつの間に帰って来ていたのか、変態執事とシウバ・ブルーティスに、ドジメイドことシャモエ・アーニールの姿も発見できた。

「ノフォフォフォフォ！　これはこれは、お久しぶりですね、ヒイロ様！」

「ど、どこご無沙汰申し上げております！」

十日ぶりだが、二人ともまったく変わらない様子で日色に挨拶をするが、「ああ」と気の無い返事が日色から返って来て、二人は首を傾げる。

シウバが「むむむ？」と眉をひそめ、彼の主であるリリィンに近づいて「どうかされたのですか？」と事情を聞いた。

「何でも同郷の者たちの不甲斐無さに呆れているようだぞ」

それだけ言うと、リリィンが日色の傍に黙って立つ。

日色は大きく息を吸って吐いた。自分でも何故これほど二人に対して憤りを感じたのか分からなかった。興味もなかったはずなのに……。

彼女たちがあまりにも短絡的過ぎたから？　こんな者たちとともに召喚されたと思うと気分が悪いと思ったから？

彼女たちは国に守られ、誰からも敬われ、ただ一つのことだけを信じて生きてきて、それが裏切られてここにいる。立場も何もかも失った悲劇のヒロインを気取るように、助けてくれるのは当然でしょと保護を求めてくる。

その愚かさが日色にはまったくもって理解できなかった。助けてほしいから、そう言えば誰かが助けてくれると彼女たちは本気で信じている。

その助けてくれという言葉さえ言えない者たちが、この世界にごまんといることを彼女たちは知らない。また助

けてくれと大声で叫んでも、無下に扱われる、無視される、それとも届かない、だがそれでも叫ぶことしかできない者たちのことを彼女たちは知らない。

挫折もなく、絶望も知らず、ただ喜楽しか経験してこなかったツケが今、彼女たちに回って来ているのだ。そしてそのツケは、自らが動かなければ決して払い終わることはない。それなのに、また考えもせずただただ知り合いというだけで日色に助けを求めてくる。

「バカだバカだと思っていたが、これほどまでとはな」

「仕方なかろう。奴らの瞳を見ただろ？　純粋で疑うことを知らない平和に塗り固められていた瞳だ。この世界で死線すら経験しておらぬ小粒どもが理解できる道理ではないわ。まして戦争など以ての外だろうな」

クククと楽しそうに目を細めるリリィンを見て、相変わらず趣味が悪い笑い方をする奴だと嘆息してしまう。

「ま、放っておけばいい。なぁに、ここの魔王様はえらくお優しい、たとえ見つかったとしても、すぐに殺されることはあるまい。その周りの連中はどうだか知らぬがな」

リリィンの言う通りだと思った。今回の戦争でイヴェアムが実に魔王らしくないと大いに感じた。戦争を起こした敵にまで情けをかけるとは正気の沙汰とは思えない。彼女は今後の交渉などに使うと言っていたが、体の良い言い訳にしか聞こえなかった。

どんな者の命も尊重する。それは大変高尚な思いだが、時と場合を考えなければならない。事実、クロウチの時も、さっさとトドメを刺しておけば、わざわざ日色が出るような事態にもならなかった。

「……どこの王もバカばっかりだな」

人間王であるルドルフは完全なる愚王。魔王は世間知らずの甘ちゃん。獣王は相対して分かったが、ただの戦闘バカのように見えた。

「ククク、どの国も、どの王もくだらない連中ばかりだ。いっそ別の国を建てて纏める方が良いのではないか？ん？　王にでもなってみるか？」

「冗談だろ。そんなものに興味はない」

「言うと思った。だが正直なところ、そう悪い話でもないぞ？」

「は？」

「今はどの国もまともではない。どうしてそうなったか、分かるだろ？」

「王がバカ……いや、種族間の問題か」

「そうだ。他種族同士がいがみ合い、互いを認め合わないことから諍いが始まり、それがやがて収拾もつかないほど大きなものになっていった」

遥か昔、この【イデア】に住むすべての種族が、ともに手を取り合っていた時代があったと伝えられているのにもかかわらず……だ。

「今の魔王だって本質のところでは『魔人族』のことしか考えてはおらん。皆が平和になれれば良いと思ってはいても、やはり重きを置くのは同じ種族の者たちだ」

「まあ、それは当然だと思うがな」

誰だって他の種族より同族を優先する。それが自然だ。

「だがもし、どの種族も平等に扱う国があったとしたらどうだ？」

「……何だって？」

リリィンの目を見ると、こちらを挑むような目つきで見返してきた。

彼女はスゥ……ッと息を吸い込み、天を仰ぐようにして顔を上げる。

「……貴様には以前言ったな。ワタシには野望があると」

「……そういや、前に言ってたな。どんな者たちでも住めるような場所を造りたいって」

世間に疎まれる存在でも、そうでない者たちでも、区別なく、差別なく住める居場所。

リリィンが遠い目をして空に浮かぶ雲を見つめ、小さな口を動かす。

「そうだ。ワタシは――」

横目で日色の目を見つめ、彼女は宣言するように言い放つ。

「――――【万民が楽しめる場所】を造る！」

「……確か、そんな場所が造れれば面白いから、という理由だったな？」

「そうだ。『人間族』も『獣人族』も『魔人族』も『精霊族』も何もかも、一か所に集まってともに娯楽に勤しむんだ。魔法大会という催しものもいいだろう。腕力勝負、知恵比べ、早食い競争。何でもアリだ！　な、面白いと思わんか！」

「似たようなことを前にも聞いたぞ」

「む？　そうだったか？　まあこの半年間魔界を回って、建造場所の候補も幾つか見つけておるし、ここらで本格的に動くのも悪くないと思ったのだ」

だからここで改めて大きく宣言したということか。

「まあしかし、候補にしている場所もそれぞれ環境問題があるが、それはおいおい何とかすれば良い」

「……お前、まさか以前屋敷があったみたいな辺境地とかじゃないだろうな？　あんな場所じゃ誰も集まらんぞ」

湖の中央にポツンと島があり、そこに屋敷が建てられてあった。

「フン、相も変わらずワタシのセンスが理解できん奴だ」

「できるかそんな変人のセンス」

「誰が変人だ！」

しかしそんな彼女のセンスによって、この夢物語が生まれたのも確か。もし実現したとしたら、それは――見てみたい。そう思わされる具体案ではあった。

「まあでもアレだな、もしお前の言う野望が実現したとしたら、マラソンや料理対決とかをやるのもいいかもな」

「おおっ、さすがはヒイロだ！　そいつは面白そうではないか！　きっと見たこともない極上の料理も拝めるだろうな！」

クハハハハと、本当に楽しそうに笑う彼女を見て、彼女が真にその野望を求めていることが伝わってくる。

「まあ、国である必要はないのだが、いっそのこと大きな国を建国し、万民をそこに住まわせた方が面白いと思ったのだ！　クハハハハ！」

「……改めて分かったかもな」

「む？　何がだ？」

シウバやシャモエが何故リリィンを尊敬し信頼しているか。

万民……つまり《禁忌》と呼ばれるハーフでも、精霊として何かが欠けた異端な存在でも、それら全てを含む者たち。リリィンは差別することなく一人一人を見てくれている。だからシウバたちは着かれているのだ。

「……何でもない」

「そうか？　それより先程の話だ。もし国を造ったら、王になってみないか、ヒイロよ」

「言っただろ？　王になど興味はないと」

「む……むう」

少し頬を膨らませこちらを睨んでいる。見た目が幼女なのでまったく怖くない。

「お前が建国するのなら、お前がなればいいだろうが」

「そんなめんどくさそうなものに誰がなるか」

「な、誰がドアホだっ！」

憤慨する彼女の顔をチラリと見て少し頬を緩める。

「だが、そうだな……お前の夢の先は見てみたい気持ちになった」

「へ……あ、ほ、本当か？」

突然日色の笑顔が向けられ、リリィンは照れたように頬を染める。

（面白い。コイツの考えることはホントに面白い。確かにそういう場所があるのなら、是非とも見てみたい）

だが当然彼女の野望は、一朝一夕でできるものではないし、時代が時代だ。下手をすれば日色が生きている間には見られないかもしれない。できることならこの世界の者たちが、そう……地球に住む人々のようにオリンピックやスポーツに勤しむ姿を見てみたい。

きっと面白い。それに是非料理大会はやってほしい。無論その時は審査員として参加する。これ絶対。そう思うと、つい未来に希望を見出し、期待感が溢れ出てくる。

だが道のりは果てしなく険しい。

日色は、戦争でボロボロになった街並みを見回した。

「夢……か」

「ん？　どうした？」

「いや、そういやこの世界に来て、夢らしいものを持ったのは初めてだ」

「夢？　貴様にも夢があったのか？」

「失礼だぞお前。さっき言っただろ？」

「え？」

「オレの夢は――――お前の夢の先をこの目で拝むことだ」

「！　……い、いいのか？　そのような夢で」

日色がまさか自身の夢をそこまで後押ししてくれるとは思わなかったのだろう。リリィンは呆気に取られたように口をポカンと開けている。

「いいも何も、オレが見てみたいと思っただけだ。そんな【イデア】をな」

「そ、そうか……そうかそうか！」

パアッと子供のように、無邪気に満開の笑顔を浮かべるリリィン。

「だがな赤ロリ、それはとてつもなく難しいぞ」

日色の言葉に一瞬キョトンとなるが、すぐさま腕を組んで不敵に笑う。

「フフン、それこそ望むところだ！　我が辞書に不可能などないわ！　クハハハハ！」

「……そうか。覚悟はあるんだな」

「無論だ！」

「なら、オレも手を貸してやろう」

するとまたも呆気に取られたような表情を浮かべるリリィン。

「……ん？　どうした、そんな呆けた面をして」

「ノフォフォフォ！　お嬢様はまさかご自分の夢がヒイロ様の夢に繋がるとは思っておらず、手伝って頂けるという言葉に感極まってお言葉が出ないのでございましょう！」

「よ、良かったですぅ、お嬢様ぁ～！」

「か、か、勝手なことを言うでないわっ、シウバ、シャモエッ！　ワ、ワタシは別に……だって……その……」

急に真っ赤な顔でモジモジしだすので、今度は日色がキョトンとしてしまう。

「ノフォ！　そのお姿はベリーベリーナイスですぞぉ！　ああ可愛らしい！　とてつもなく愛らしいですぞ！　おおおお、もう辛抱堪りませんっ！　おっ嬢様ぁぁぁぁぁっ！」

「相も変わらず死ねぇい変態っ！」

「でぶぃすっ!?」

リリィンが自分目掛けて飛びかかって来たシウバの顔面に、全力ストレートナックルをぶち込み、シウバの顔が拳型に凹み、静かに大地に沈む。

「ふぇえええっ!?　シウバ様ぁぁぁっ!?」

「きゃはははは、おかおがへっこんでるぅ～！」

「さすがはリリィン殿！　見事な一撃ですぞ！」

シャモエは慌ててシウバに駆け寄り、ミカヅキは楽しそうに笑い、ニッキはリリィンの一撃に感心している。

（はぁ……十日間、静かだったんだがなぁ）

これからいつもの騒々しい毎日が始まると思うと辟易した。

するとリリィンが、ビシッと日色に指を突きつけて宣言してくる。

「い、いいかヒイロ！　き、貴様はワタシのものなのだからな！　手伝うのは決まっているのだぞ！」

何やら顔がニヤけているような気もしないでもないが、それを指摘すると面倒そうなので無視しておく。

「ふざけるな。これはあくまでも依頼として受けてやる。対価はそうだな……その場所での自由権ってとこか？」

「じ、自由権だと？　……何を考えている？」

「さあな。乗るのか？　乗らないのか？」

「むむぅ……ええい！　ワタシの器を見くびるな！　自由権だろうとなんだろうとくれてやるわ！」

「ほほう、言質は取ったぞ」

もし言い逃れても、この記憶を『映』の文字で映像化して見せればいいだけだ。それでも渋るのなら魔法を使って強制的に言うことを聞かせるのも辞さない。

実際にこの国へ来て、いや、リリィンとともに旅をして初めて良かったと思う出来事だった。

まさか自分の夢が見つかるとは……。

もちろんこの【イデア】を見て回るというのも夢の一つではあるが、それはどちらかというと趣味の延長線上にある目的の一つ。

この世界では確かに日色の夢は限りなく難しいものだろう。

だが必ず叶えてみせると決心した。

（そのためにも、この赤ロリをサポートしつつ、戦争を何とかしなければならないんだよな……）

日色の夢には、ある重大な決心が必要になる。

それは三国の諍いを失くすこと。どうせならば、はみ出し者たちだけでなく、すべての種族がスポーツなどで競い合う姿を見てみたい。

しかしそれがどれほどの危険を孕み、困難なのかは十分に理解している。それでもやると決めたのだ。

（そうだな、やりたいことをやるだけだ。そのためにもまずは動くしかないな）

まさか自分がこんな決断をすることになろうとは思いもよらなかったが、不思議と心は晴れやかだった。

やはり無気力に日々を過ごすより、目的がある方が、人生に潤いが出るということなのだろう。

（険しいが――やる価値はある）

決意をその双眸に秘め、いつの間にか澄み渡っている空を見上げた。

日色が選んだ長く険しい、先が見えない道。

この選択が、後に日色を加速度的に世界と関わらせることになるのだが、その第一歩としてこの戦争がきっかけになるのは言うまでもないことだ。

ただ戦争はまだ終わってはいない。一時的に落ち着きを見せているだけ。自国へ逃げ帰る人間たちはともかく、猛人たちは今もなお、獰猛な瞳で【魔国・ハーオス】を見続けて、隙あらば鋭い牙で噛みつこうと狙っている。

やがて魔王イヴェアム・グラン・アーリー・イブニングから日色へと使者が放たれる。

そこで日色は思いもよらぬ戦いに身を投じることになるのだが、それはもう、すぐそこまで近づいていた。

だがどんな障害があろうと、日色は決して膝を屈したりはしない。

その先に、初めて見る夢の果てがあることを信じて――。

あとがき

皆様初めましての方は初めまして、お久しぶりの方はお久しぶりの十本スイです。

さて、今回の『金色』第七巻ですが、いよいよ種族間戦争が勃発します。

出てくるキャラクターたちもわんさかいて、その中でヒイロが大活躍するというお話。

そしてヒイロが初めて〝夢〟を見つけます。是非お楽しみください。

最後に謝辞を述べさせて頂きたいと思います。

第七巻の出版に関わってくださった全ての皆様、ファンの方々には感謝を申し上げます。

原作イラスト担当のすまき俊悟さんや、漫画担当の尾崎祐介さんにはお忙しい中、いつもいつも素晴らしいものを描いて頂いております。本当にありございます。

ではまた、是非皆様にお会いできることを祈っております。

そして皆様が素晴らしき本に巡り会えますように。

十本スイ

次回予告

金色の文字使い

勇者四人に巻き込まれたユニークチート

8

5本勝負！決闘で決めろ!!

魔人族vs獣人族、戦争の勝敗は

そして彼女たちも参戦……!?

《運命を決める決闘編》開幕！
第8巻、2016年7月頃発売予定!!

ファンタジアBeyond にて、外伝【ユニークチートの異世界探訪記】連載中!
http://www.fujimishobo.co.jp/beyond/

ファンタジア文庫

十本スイ

●とおもとすい

十本スイです。今巻で、主人公が夢を見つけることになるのですが、子供の頃の夢を思い出してみると、獣医だったような気がします。動物が果てしなく好きなので、そんな夢になったのでしょうか。ただ絶対的に血を見るのがダメなタイプであり、医者には向かないということで止めました。今の夢は、やはり大人気作家になることです。

金色の文字使い 7
—勇者四人に巻き込まれたユニークチート—

十本スイ

平成28年3月19日　発行

(C) Sui Tomoto, Syungo Sunaku 2016

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

富士見ファンタジア文庫「金色の文字使い 7　—勇者四人に巻き込まれたユニークチート—」
平成28年3月25日初版発行

発行者　三坂泰二
発　行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-301（カスタマーサポート・ナビダイヤル）
受付時間 9:00～17:00（土日 祝日 年末年始を除く）

http://www.kadokawa.co.jp/

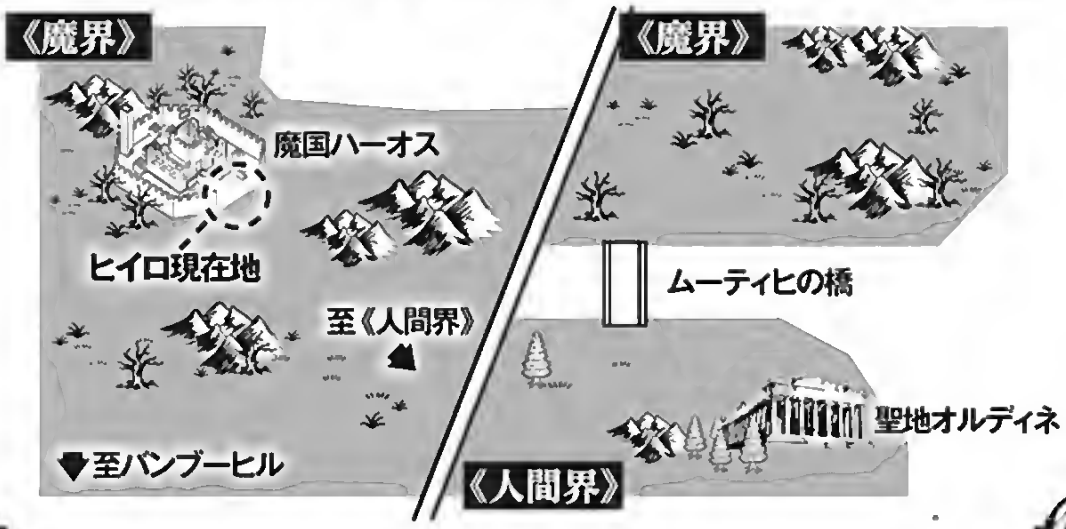
口絵・本文イラスト／すまき俊悟
カバーデザイン／coil

1
金色の文字使い
リードマスター
勇者四人に巻き込まれたユニークチート
十本スイ
Sui Tomoto
illu すまき俊悟
Syungo Sumaki
ファンタジア文庫

「争いの鎖を断たねば、平和はやっては来ません！」
▶ヒイロ・オカムラ
《称号》巻き込まれた者・異世界人・文字使い…
魔界での半年の旅を経て成長した異世界人。ハーオスにて魔王と邂逅し、ある契約を交わす。
「おい魔王、獣人まで相手にするとは……って、何だこの面子は？」
「貴公は……大切な者を失ったことがあるかな？」
▶イヴェアム・グラン・アーリー・イブニング
《種族》魔人族
《称号》魔王(ハーオス国王)
魔国ハーオスを統べる魔王。争いを止めるため、人間国との同盟会談へと臨む。
▶ルドルフ・ヴァン・ストラウス・アルクレイアム
かつて勇者や日色の召喚を行った、人間国の国王。魔王からの親書に応じるが……。
金色の文字使い
勇者四人に巻き込まれたユニークチート
1

Golden
Wordmaster

異世界【イデア】エリアマップ



▶▶▶ ヒイロ パーティ ◀◀◀

丘村日色（おかむら ひいろ） Lv.204 HP:7880 MP:15500

《魔法》文字魔法（一文字解放・空中文字解放・二文字解放…）
《称号》巻き込まれた者・異世界人・文字使い・グルメ野郎…
▶異世界に召喚された高校生。綴った文字のイメージを具現化する《文字魔法》を使い、イデアの旅を続ける。

リリィン Lv.154

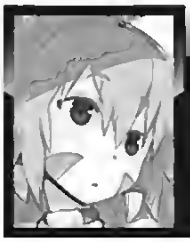
《魔法》幻夢魔法
《称号》幻と共に生きる者…
▶魔界の辺境で暮らしていた魔女。尊大な実力者。

シウバ Lv.82

《魔法》プールボール（闇）…
《称号》闇の精霊…
▶リリィンに仕える執事にして、異端の精霊。

シャモエ Lv.25

《魔法》——
《称号》家族思い・禁忌…
▶リリィンに仕える天然ドジっ娘メイド。



ニッキ Lv.35

《戦技》爆拳
《称号》？？？・捨て子…
▶モンスターに育てられた少女。

▶▶▶ 人魔同盟会談サイド ◀◀◀

イヴェアム・グラン・アーリー・イブニング Lv.102 HP:4750 MP:6500

《魔法属性》火・水・風・土・氷・雷・闇
《魔法》アヴィス・ブレイド（闇）、コスモエンド（闇）…
《称号》魔王・エレメンタルレディ・極めた者…
▶魔国ハーオスを統べる心優しき魔王。種族間の戦争を止めるため、人間族との同盟会談に臨む。